

平成26年度指定
スーパーグローバルハイスクール
研 究 報 告 書
【第5年次】

平成31年3月



学校法人 名城大学
名城大学附属高等学校

はじめに

学校長 岩 崎 政 次
IWASAKI Masaji

本校は1926（大正15）年に名古屋高等理工科講習所として開設され、2016（平成28）年には開学90周年の節目を迎えました。戦後の新教育制度になってからは、普通科・商業科・電気科・機械科の4学科体制の男子校として新たに出発しました。その後、1999（平成11）年に専門学科を総合学科に改組するとともに、普通科の一部を男女共学にし、段階を踏みながら2004（平成16）年に総合学科を男女共学にすることにより、全学の共学化が完了しました。2014（平成26）年には、従来から国際クラスで行ってまいりました課題探究型学習や英語学習を発展させることにより、スーパーグローバルハイスクール（SGH）の指定を受けることができました。

SGH事業の中核をなす国際クラスは、2003（平成15）年に名城大学の8番目の学部として人間学部が発足するのに合わせ、高大一貫7か年教育のパイロットケースとしてスタートしました。本クラスは、当初より、生きた英語力の獲得と異文化理解を目的とした「ニュージーランドでの修学旅行」、英検・TOEIC等の「資格取得」、各自が設定したテーマに基づいた8,000字以上の「課題研究論文の作成と英語での発表」の3つを特色とし、7年後を見通したキャリア教育を実践してまいりました。

SGH指定により、「愛知県産業を基盤としたグローバルビジネス課題」を研究課題として課題探究活動の一層の深化を目指しています。初年度の2014（平成26）年度には、開発と環境、協働・共生、といったグローバル課題をテーマに実施したインドネシアやアメリカでの「海外研修」、SSH事業と共同して現代社会の諸問題についての講演や座談会等を行う「グローバルリーダー講座」、社会の諸問題について国際的な視野を持ちつつ自分自身で考えて判断ができるような素養を高めることを目的にした「グローバルサロン」を展開することができました。

本年は指定5年目となり、昨年度に引き続き、探究活動を実践している各県の高校生同士が協働して多面的・複合的に課題を捉えることを通じて、地域発のグローバルリーダーとしての成長を促すことを目的とした「Meijo Global Festa 2018」を主催し、生徒間の交流を図ることができました。加えて、国際クラスの第2学年では各自の研究課題につなげることを目的としたグローバルフィールドワークをインドネシアと台湾のいずれかを選択させる形で行い、グローバルアクションとしてカナダ研修を全校生徒の希望者から選考して実施しました。

これまでに国際クラスで取り組んだ課題探究型の学習は、文部科学省が提唱する、これからの社会で求められる「新しい学力」につながるものであり、SGHの指定を機に、さらなる充実を図りながら、課題探究型の学習を国際クラスだけでなく普通科文系に広げてきました。

今後、目まぐるしい社会の変化が予測され、教育現場にもその変化への対応が求められています。SGH事業は、生徒にとっては未来のグローバルリーダーへと成長する機会として、教員にとっては研鑽を積む機会が与えられることで指導的人材として成長する機会として機能しております。これからも自校の過去の実践・研究から得ることができた成果と、指定校を始め各学校間の強い連携体制を生かしていきます。

最後になりましたが、本研究の機会を与えていただいた文部科学省、事業の運営にあたり指導と助言をいただいた愛知県教育委員会・名古屋市教育委員会及びSGH運営指導委員会の委員並びに学校評議員等、関係の皆様方に厚くお礼申し上げます。また、高大協働教育の推進に積極的かつ献身的に取り組んでいただいた名城大学の教職員及び探究活動の実践に協力いただいた愛知県企業・団体、他大学の皆様、TA等で協力いただいた学生・OB・OGの皆様に感謝の意を表します。

目次

本校について.....	- 1 -
スーパーグローバルハイスクール構想の概要.....	- 2 -
研究開発完了報告.....	- 4 -
実施報告書.....	- 19 -
1 研究開発名.....	- 19 -
2 平成 30 年度（第 5 年次）の研究開発実施計画.....	- 19 -
3 研究開発の実績.....	- 20 -
3 (1) 事業の評価.....	- 20 -
3 (2) 探究学習に関わる授業.....	- 22 -
3 (2) -1 総合的な学習の時間：多文化共生（国際クラス第 1 学年・2 単位）.....	- 24 -
3 (2) -2 総合的な学習の時間：課題探究（国際クラス第 2 学年・2 単位）.....	- 26 -
3 (2) -3 総合的な学習の時間：課題探究（国際クラス第 3 学年・4 単位）.....	- 28 -
3 (2) -4 総合的な学習の時間：探究基礎（一般進学クラス第 1 学年・1 単位）.....	- 30 -
3 (2) -5 総合的な学習の時間：グローバル概論（一般進学クラス文系第 2 学年・2 単位）.....	- 32 -
3 (2) -6 総合的な学習の時間：課題探究（一般進学クラス文系第 3 学年・2 単位）.....	- 34 -
3 (3) 海外研修.....	- 36 -
3 (3) -1 ニュージーランド研修「グローバルレクチャー」.....	- 37 -
3 (3) -2 台湾研修「グローバルフィールドワーク」.....	- 39 -
3 (3) -3 インドネシア研修「グローバルフィールドワーク」.....	- 41 -
3 (3) -4 カナダ研修「グローバルアクション」.....	- 43 -
3 (4) ローカルフィールドワーク.....	- 45 -
3 (5) Meijo Global Festa.....	- 47 -
3 (6) グローバルパスポート.....	- 50 -
3 (7) グローバルサロン.....	- 52 -
3 (8) グローバルリーダー講座.....	- 54 -
3 (9) SGH 運営指導委員会の開催.....	- 54 -
3 (10) 成果の公表・普及.....	- 54 -
4 目標の進捗状況・成果・評価.....	- 57 -
4 (1) 【研究開発目標①】.....	- 57 -
4 (2) 【研究開発目標②】.....	- 58 -
4 (3) 【実践目標①】.....	- 59 -
4 (4) 【実践目標②】.....	- 62 -
4 (5) 【実践目標③】.....	- 63 -
4 (6) 【実践目標④】.....	- 65 -
4 (7) 【実践目標⑤】.....	- 66 -
4 (8) 【実践目標⑥】.....	- 67 -
関係資料.....	- 69 -
平成 30 年度入学生 普通科 教育課程表.....	- 69 -
平成 29 年度入学生 普通科 教育課程表.....	- 70 -
平成 28 年度入学生 普通科 教育課程表.....	- 71 -
平成 27 年度入学生 普通科 教育課程表.....	- 72 -
平成 26 年度入学生 普通科 教育課程表.....	- 73 -
メディア掲載・フライヤー等（一部抜粋）.....	- 74 -
生徒作成物.....	- 81 -

本校について

1 学校の概要

本校は大正 15 (1926) 年に名古屋高等理工科講習所として開学し、平成 30 年で創立 92 年目を迎えた。

本校では、『知・徳・体』の調和した生徒を育成する」というビジョンのもとに、生徒一人ひとりが知性と教養を身に付け、たくましさ与他人を思いやる優しさを兼ね備えた心豊かな人間に成長することを目指している。

本校は、普通科と総合学科それぞれに、生徒の興味・関心や多様な能力を伸ばすためのクラス・系列を設けており、普通科には特別進学クラス・一般進学クラスのほかに、先進的理数教育を目指すスーパーサイエンスクラス、グローバル人材育成を目指す国際クラスを設け、総合学科には、数理・社会探究・地域交流・ビジネスの 4 系列を置いている。

2 教育目的

教育基本法・学校教育法に則り、知・徳・体の調和する人格の完成を目指す。創設以来の伝統に基づき、穏健中正で実行力に富み、国家、社会の信頼に値する人材を育成する。

3 教育方針

「教育目的」を実現するために、更に次の 6 つの「教育方針」を定める。

- 1 学習意欲を高める
- 2 基礎学力を伸ばす
- 3 しつけ教育を重んじる
- 4 健全な心身を育む
- 5 主体的な行動力を養う
- 6 創造力の根元である生きる力を養成する

4 生徒数とクラス数（平成 30 年度）

		< 生徒数 >			< クラス数 >		
		1 年	2 年	3 年	1 年	2 年	3 年
普通科	特別進学クラス	138	106	102	4	3	4
	スーパーサイエンスクラス	32	35	30	1	1	1
	一般進学クラス	370	190	150	9	5	4
			127	114 (25)		3	3
	国際クラス	34	23	30	1	1	1
総合学科	文系	180	113	89	4	3	3
	理系		43	51		1	2
計		754	637	566	19	17	18

※ 国際クラスは SGH 事業における主対象、一般進学クラス第 1 学年及び一般進学クラス文系第 2 学年、一般進学クラス文系第 3 学年の選択者（25 名）は準対象。

スーパーグローバルハイスクール構想の概要

平成 25 年申請書提出時

指定期間	ふりがな	めいじょうだいがくふぞくこうとうがっこう				②所在都道府県		愛知県
26～30	①学校名	名城大学附属高等学校						
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模		
	1 年	2 年	3 年	4 年	計	普通科	1409 名	
	普通科	429	145	24		598	総合学科	463 名
						合 計	1872 名	
⑥研究開発構想名	高大協働による愛知県産業を基盤にしたグローバルビジネス課題の探究							
⑦研究開発の概要	愛知県のビジネス課題を軸に、高大・産学協働の探究活動を行う。PBL の授業と課外活動とを融合させたサービスラーニングによりスキルとマインドセットを育成し、グローバルシチズンシップを獲得させる。評価・検証には、ループブック等を用いたパフォーマンス評価、定期的なアンケートによる統計学的手法を用いる。							
⑧研究開発の内容等	⑧1全体	(1) 目的・目標						
		地球に生きる一市民として、社会や世界の諸問題について当事者意識をもって捉え、他者との協働を通して解決に向かう意欲あふれる人材を育成する。そのための体系的な教育課程やプロジェクト型学習（PBL）の教育課程を開発し、校内及び他校に普及する。						
		以上の目的を踏まえ、研究開発目標として①「グローバルパスポート」制度のプログラム実施、②各教科における PBL の展開例の開発と定着、実践目標として①スキルとマインドセットの育成、②ローカルとグローバルを往還する視座の獲得、③国内外の研修、大会及び社会活動に主体的に参加する生徒の育成、④年間 12 回以上のプレゼンテーションの実施、⑤CEFR の B2 レベル到達率 100%、⑥国際化を進める国内・海外の大学等、課題研究を生かした研究を行える大学へ進学する生徒の育成の計 8 点を設定する。						
		(2) 現状の分析と研究開発の仮説						
		対象である国際クラスの生徒については、探究型学習や英語学習で一定の成果を得た。本 SGH 事業においては、従来の取り組みでは十分には育成できなかった「批判・摩擦・失敗を恐れず、変化する状況へ対応する」マインドセットや「コミュニケーションをとりながら協働し問題解決に向かう」スキルを、課題探究の各取り組みの中で育成し、それらを通してグローバルシチズンシップを形成していくことが肝要である。						
		そのため、本研究開発においては、「世界の現状と課題に触れる経験」、「自らの意見を発表し、他者と対話・議論する経験」、「自ら新たなネットワークを構築する経験」を重視し、「スキルとマインドセットの育成は、グローバルシチズンシップの獲得に有効である」と仮説を立てる。						
		(3) 成果の普及						
		他の SGH 指定校に呼びかけ、生徒研究討論会「SGH ミーティング」と生徒研究発表会「SGH フェスタ」とを毎年継続的に開催する。同時にパネルセッションも行い、全国の SGH 指定校に広く発表の場を提供する。この活動は研究成果の発表というだけではなく、生徒、教員を含めた指定校相互の交流、情報交換の場であり、また、SGH の成果を広く情報発信し理解を図る、中核拠点的な意味合いも含んでいる。そのため、名城大学と密接に連携し、産業界にも協力を求めて高大・産学協働で実施し、近隣の中学校、高等学校に向けて「SGH ミーティング」及び「SGH フェスタ」実施を案内し周知を図る。ミーティングまたはフェスタ実施後、発表校による研究集録を作成・配付する。						
		なお、平成 28 年度以降は優秀発表者を表彰するとともに、本校の海外研修を利用した海外での発表を計画している。						

⑧ 2 課題研究	(1) 課題研究内容 地元産業に根差したグローバル化における諸課題を軸に研究する。ただし、地球市民としての責任感ある姿勢を育むために、経済面のみのアプローチではなく、教科・高大・産学融合型のサポートにより、「人間開発」、「CSV」、「コンフリクト・レゾリューション」、「協働・共生」の観点を学ぶことを特徴とする。研究課題の具体例としては、「愛知県中小企業のグローバル化戦略と課題」、「グローバルな起業モデル」、「外国人労働者との協働・共生モデル」及び「日系企業における多様性の調和とガバナンスのあり方」等があげられる。 (2) 実施方法・検証評価 「スーパーサイエンスⅠ」、「多文化共生Ⅰ」、「多文化共生Ⅱ」及び「課題探究」において、研究課題や探究方法の理解、論文作成等を進める。それを補完するものとして、研究課題に関するフィールドワークを国内と海外で関連させて実施し、比較検討する。作成した論文及び課題解決に向けたアクションについては国内及び海外で発表を行う。探究の過程においては、有識者やSGH指定校生徒とも議論を行い、知識と理解を深める。検証は、生徒の意識及び行動の変容等についてのアンケート、プレゼンテーション、論文のループブック評価及びコンテスト等の受賞数によって評価する。 (3) 必要となる教育課程の特例等 特になし。
⑧ 3 上記以外	(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価 専門的な知識と幅広い教養を身に付け、高度教育への意欲を高めることを目的として、国際クラス第2学年を対象にした学校設定科目「国際教養Ⅰ」及び「国際教養Ⅱ」を開設し、名城大学人間学部の講義を受講する。検証評価は、大学生と統一の定期試験結果によって行う。外国人教員による「英会話Ⅰ」、「英会話Ⅱ」、「英会話Ⅲ」を各学年で実施し、発表や討論に取り組む。評価は発表等のパフォーマンス評価と定期試験の成績を合わせて行う。 (2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等 平成26年度実施分については、特になし。 (3) グローバルリーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の取り組み内容・実施方法 ポートフォリオ「グローバルパスポート」を用いて、グローバルリーダー育成のロードマップの開発及び取り組み促進の材料とする。また、グローバルリーダー育成の検証評価の指針としても用いる。また、大学教員、専門機関職員、多国籍の人々等、多様な立場の人とともに、共通のテーマについて対話を通じて共に学びを深める、サロンの学習の場「グローバルサロン」を実施する。本取り組みは全校を対象として毎月実施する。課題解決に向けた活動として、ボランティア活動やアドボカシー活動等に取り組む。
⑨ その他 特記事項	主たる対象となる国際クラスは、女子生徒の割合が高く、生徒会執行部等学校全体でリーダーシップを発揮している女子生徒も多い。このことを踏まえて、女性リーダーの育成も念頭に置いている。我が国は先進諸外国と比較して女性リーダーの割合が低いと思われる。SGH教育によってグローバルな視点を身に付けた女性リーダーの育成を目指す。

平成 31 年 3 月 29 日

研究開発完了報告

文部科学省初等中等教育局長 殿

住 所 愛知県名古屋市中白区塩釜一丁目 501 番地
 管理機関名 学校法人名城大学
 代表者名 理事長 立花 貞司

平成 30 年度スーパーグローバルハイスクールにかかる研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成 30 年 4 月 2 日（契約締結日）～平成 31 年 3 月 29 日

2 指定校名

学校名 名城大学附属高等学校
 学校長名 岩崎 政次

3 研究開発名

高大協働による愛知県産業を基盤にしたグローバルビジネス課題の探究

4 研究開発概要

愛知県産業に根差したビジネス課題を軸に、「共生」、「協働」、「海外への発信・展開」、「国際貢献・社会貢献」の観点から、高大・産学で連携した探究活動を実施する。また、「総合的な学習の時間」と学校設定科目、課外活動を融合させたサービスラーニングを通じて課題研究を行い、スキルとマインドセットの育成、グローバルシチズンシップの獲得を目指す。

大学・他指定校等を招聘して「Meijo Global Festa」を開催し、SGH 事業の普及を行う。

学習評価には、パフォーマンス評価を用いる。スキルとマインドセットの変容等についてはアンケートを用いて検証する。

5 管理機関の取り組み・支援実績

5 (1) 実施日程

業 務 項 目	実 施 日 程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1 授業における連携												→
2 研究発表会における連携				▶▶		▶	▶	▶▶			▶	
3 グローバルサロンにおける連携											→	
4 グローバルリーダー講座における連携			▶					▶				
5 グローバルレバースポートにおける連携												→
6 SGH 運営指導委員会の開催								▶			▶	
7 海外研修における連携												→

- 5 (2) 実績の説明（主対象生徒：87 名，準対象生徒 522 名）
- 5 (2) -1 授業における連携
国際クラス第 2 学年（23 名）「総合的学習の時間：課題探究」，一般進学クラス文系（127 名）「グローバル概論」にて，授業実施（計 4 回）。その他，海外研修事前学習等において助言。
- 5 (2) -2 研究発表会における連携
「Meijo Global Festa 2018」をはじめとする計 7 回の研究発表会に対する助言・講評・運営。
- 5 (2) -3 グローバルサロンにおける連携
全校生徒を対象に自由参加で行う全 9 回の講座の支援。
- 5 (2) -4 グローバルリーダー講座における連携
全校生徒を対象に行う全 2 回の講座の支援。
- 5 (2) -5 グローバルパスポートにおける連携
運用状況の共有及び制度の連携方法について協議。
- 5 (2) -6 SGH 運営指導委員会の開催
11 月，2 月に 2 回開催。
- 5 (2) -7 海外研修における連携
海外研修における提携校やフィールドワーク先の紹介，学習内容等に関する助言。

6 研究開発の実績

6 (1) 実施日程

業 務 項 目	実 施 日 程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1 事業の評価												→
2 探究学習に関わる授業												→
3 海外研修							▶				▶	▶
4 ローカルフィールドワーク												→
5 MeijoGlobal Festa								▶				
6 グローバルパスポート												→
7 グローバルサロン										→		
8 グローバルリーダー講座			▶					▶				
9 SGH 運営指導委員会等の開催								▶			▶	
10 成果の公表・普及												→

6 (2) 実績の説明

6 (2) -1 事業の評価

グローバルシチズンシップの獲得に有効であると考える 5 つのスキルと 5 つのマインドセット（以下，5S5M）を中心に，各因子における生徒の変容等をもって事業を評価。

5 つのスキル（5S）

- ①論理的・批判的思考力【思考力】
- ②ICT 活用能力【ICT】
- ③コミュニケーション・コラボレーション力【コミュ・コラボ】
- ④行動力・発信力【行動・発信】
- ⑤課題発見力・課題解決力【発見・解決】

5 つのマインドセット（5M）

- ①アイデンティティを確立する意欲を持つ【ID】
- ②多様性を認め共感する気持ちを持つ【多様性】
- ③批判・摩擦・失敗を恐れない【失敗耐性】
- ④変化に対応する意欲を持つ【変化への対応】
- ⑤リーダーシップを発揮する意欲を持つ【リーダーシップ】

* 以下の図表等において各因子の名称は，カッコ【】内のように省略して表記した。

対象生徒を対象とした本年度の調査：

- ①スーパーグローバルテスト（以下、SGT。5S5M等の各因子における到達度調査）：5段階の順序尺度
- ②5S5M等の各因子における向上実感調査：5段階の順序尺度
- ③②で向上実感を高めた要因調査：10項目の選択肢からの複数選択
- ④5S5M各因子における目標設定の変更状況と理由：3段階の順序尺度と記述
- ⑤次年度の活動意欲調査：3段階の順序尺度
- ⑥5S5M, アクシンプランをもとにしたリフレクションシート：記述

6 (2) -2 探究学習に関わる授業

国際クラス第1学年（34名）総合的な学習の時間における「多文化共生」（2単位）
 国際クラス第2学年（23名）総合的な学習の時間における「課題探究」（2単位）
 国際クラス第3学年（30名）総合的な学習の時間における「課題探究」（4単位）
 一般進学クラス第1学年（370名）総合的な学習の時間における「探究基礎」（1単位）
 一般進学クラス文系第2学年（127名）総合的な学習の時間における「グローバル概論」（2単位）
 一般進学クラス文系第3学年選択者（25名）総合的な学習の時間における「課題探究」（2単位）

6 (2) -3 海外研修

国際クラス第1学年：グローバルレクチャー（ニュージーランド）3月実施：34名
 国際クラス第2学年：グローバルフィールドワーク（台湾）10月実施：14名
 国際クラス第2学年：グローバルフィールドワーク（インドネシア）10月実施：9名
 グローバルサロン参加者より選抜：グローバルアクション（カナダ）1月実施：6名

表 5年間の海外研修

	1 年目	2 年目	3 年目	4 年目	5 年目
グローバル レクチャー	インドネシア・バリ	インドネシア・バリ	ニュージーランド・ウェリントン		
	第 1 学年全員	第 1 学年選抜	第 1 学年全員		
グローバル フィールド ワーク	ニュージーランド・ホロフェヌア		ニュージーランド ウェリントン	インドネシア・バリ	
	第 2 学年全員			第 2 学年選択制	
			台湾・台中	台湾・台中	
			第 2 学年選抜	第 2 学年選択制	
グローバル アクション	アメリカ・サンディエゴ		台湾・台中	カナダ・トロント	
	SGH 対象生徒から選抜				

海外研修の成果検証の1つとして海外研修が各因子の向上実感に影響を与えた割合を調査したところ、特に第2学年において高い結果が出た（図1）。10月に海外研修を終えたところである第2学年の方がより強くその影響を感じていることがわかる。しかし、両学年とも探究活動や進路選択において重要な要素となっていることがうかがえる。

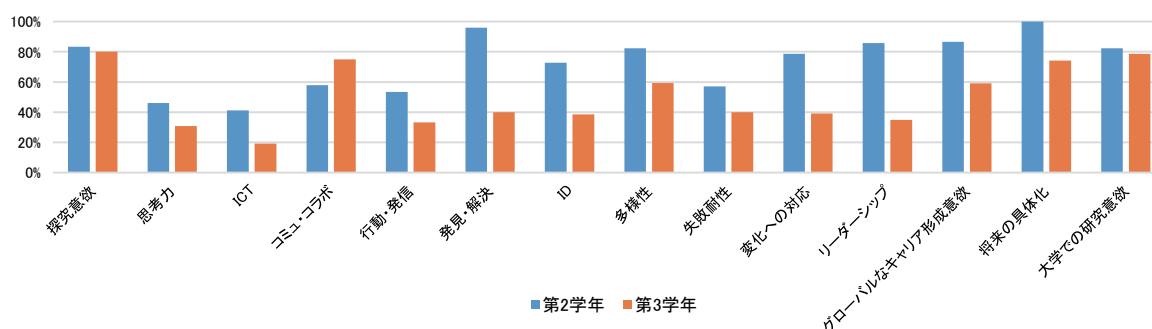


図1 海外研修が各因子の向上実感に影響を与えた割合

6 (2) -4 ローカルフィールドワーク

国際クラス第1学年：10回（南山大学人類学博物館・JICA 中部・株式会社ユニクロ・名古屋市内）

国際クラス第2学年：ゼミ別課題研究フィールドワーク 62 か所

一般進学クラス文系第2学年：3回（南山大学人類学博物館・JICA 中部・立命館アジア太平洋大学）

一般進学クラス文系第3学年：ゼミ別課題研究フィールドワーク 4 か所

表 5年間のローカルフィールドワーク

	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目
受け入れ企業・団体数	不明	33 箇所	54 箇所	68 箇所	76 箇所

6 (2) -5 Meijo Global Festa

東海地区の高校生を対象にフォーラム部門、口頭発表部門の開催・実施。

11月11日（日）9：30～17：00 実施（参加校 16 校、参加人数合計のべ 189 名）

フォーラム部門 173 名／口頭発表部門（フォーラム成果発表 7 件 34 名・研究発表 11 件 23 名）

フォーラム部門：参加校 15 校・参加生徒 166 名（昨年度 参加校 9 校・参加生徒 108 名）

分科会 A 「Is More Immigration Good or Bad for Japan? 」

講師：名城大学。法学部准教授 David Green 氏

分科会 B 「グローバル・タックス（国際連帯税）の実施に向けて」

講師：名城大学法学部教授 伊川正樹氏

分科会 C 「新興国の通貨安からグローバル化を考える」

講師：名城大学経済学部准教授 新井大輔氏

分科会 D 「相模原障害者施設殺傷事件と杉田水脈議員の LGBT に関する発言に通底するもの」

講師：名城大学経営学部教授 村松恵子氏

分科会 E 「高校生が考える適切なスマホ利用」

講師：名城大学都市情報学部准教授 杉浦伸氏

分科会 F 「名古屋城天守閣木造復元をこのまま進めるべきか、そうでないならどうするか？」

講師：名城大学人間学部教授 伊藤俊一氏・水尾衣里氏・笠井尚氏・原田知佳氏

分科会 G 「ベストセラーとなった自己啓発本は読みに値するか」

講師：名城大学外国語学部准教授 堅田義明氏

口頭発表部門：参加校 6 校・発表 11 件（昨年度 参加校 6 校・発表 9 件）＊フォーラム成果発表を除く

講評：名城大学経済学部教授 渋井康弘氏及びフォーラム部門講師

本校からの発表：

国際クラス第1学年グループ発表「生徒主体で作る多文化共生劇～『あいち多文化共生推進プラン 2022』のその先～」

国際クラス第2学年グループ発表「台湾におけるニトリの販売戦略と顧客イメージ」

国際クラス第3学年個人発表 “Better Community Activities for Better Multicultural Society”

国際クラス第3学年個人発表 “Spread of Fair Trade in Japan”

国際クラス第3学年個人発表 “‘Education of Sexual Diversity’ into Compulsory Education”

表 5年間の Meijo Global Festa

	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目
名 称	SGH プレミーティング	SGH ミーティング	Meijo Global Festa		
内 容	グループワーク 成果発表	ディスカッション 成果発表	ディスカッション ポスター発表 成果発表・研究発表 SGH カンファレンス	ディスカッション 成果発表・研究発表	
ファシリテーター 講師 助言者	6 名古屋大学大学院生 国際基督教大学学生 立命館大学学生	11 名城大学教員・研究員 企業	8 名城大学教員	10 名城大学教員	12 名城大学教員
参加校数	1	8	9 (カンファレンス 16)	12	16
参加者数	35	107	145 (実 96)	142 (実 124)	189 (実 173)

6 (2) -6 グローバルパスポート

SGH の諸活動の記録と活動意欲を喚起する一手法として導入。「本校事業」、「プレゼンテーション」、「フィールドワーク」、「学外事業（イベント・研修）」、「学外大会・コンテスト」、「資格試験」の6項目の取り組み状況をマイル化して記録。



【グローバルパスポート概要】

- 1 対象生徒 国際クラス在籍者及び一般進学クラス文系第2学年、第3学年、グローバルサロン参加者
- 2 対象項目・マイル数 (目標マイル 1年修了時 2000, 2年修了時 3150, 3年修了時 4250)
 - (1) 本校事業への参加 (年間目標マイル 500)
 - グローバルサロン (参加 50 マイル)
 - 高大連携講座・ミーティング・フェスタ (参加 50 マイル) ※運営の場合は+50 マイル
 - 指定の名城大学主催のイベント (参加 50 マイル)
 - 海外研修 (参加 100 マイル)
 - (2) 本校プレゼンテーション (年間目標マイル 500)
 - 担当教諭の認めるプレゼンテーションの実施 (1回 50 マイル) ※選抜された場合は+50 マイル
 - (3) 本校フィールドワーク
 - 担当教諭の認めるフィールドワーク (1回 50 マイル)
 - 担当教諭の認める海外研修中のフィールドワーク (1回 50 マイル)
 - (4) 学外事業 (イベント・研修) への参加 (年間目標マイル 500)
 - 指定の学外イベント (1回 50 マイル)
 - 指定の学外研修 (1回 50 マイル)
 - (5) 学外大会・コンテスト (年間目標マイル 300)
 - 指定の大会・コンテストへの作品 (論文・作文・作品等) 応募 (1回 50 マイル) ※入賞等の場合は+100 マイル
 - 指定の大会・コンテストへの出場 (プレゼンテーション等) (1回 50 マイル) ※入賞等の場合は+100 マイル
 - (6) 取得英語資格 (目標マイル 1年修了時 550 2年修了時 1000 3年修了時 2100)

マイル	英 検
1000	1 級
800	準 1 級
350	2 級
150	準 2 級

マイル	TOEIC L&R
1000	945-990
500	830-940
300	730-825
200	650-725
150	550-645
100	470-545
50	380-465

マイル	GTEC・CBT	IELTS	TOEFL iBT
1000	1400	7.0-	95-120
800	1250-1399	5.5-6.5	72-94
350	1000-1249	4.0-5.0	42-71
150	700-999	3.0	

本年度の目標マイルの達成率としては、国際クラス全学年とも100%であった(昨年度の結果は第1学年91.3%, 第2学年93.8%, 第3学年100%)。

第1学年、第2学年においては年を追うごとに獲得マイルが伸びており、早い段階から諸活動に参加したり、英語の資格試験に挑戦したりする成果が見られる。第3学年においては、昨年度よりも平均マイルが低くなっているが、これは英語の資格試験で昨年ほどの結果が出なかったことが原因である。資格試験については課題であるが、その他の諸活動については昨年度以上にマイルを獲得しており、目標値も大きく超えることができた(図1)。

今後ともこの流れを維持できるよう、3年間を見通した活動計画の周知を徹底する。

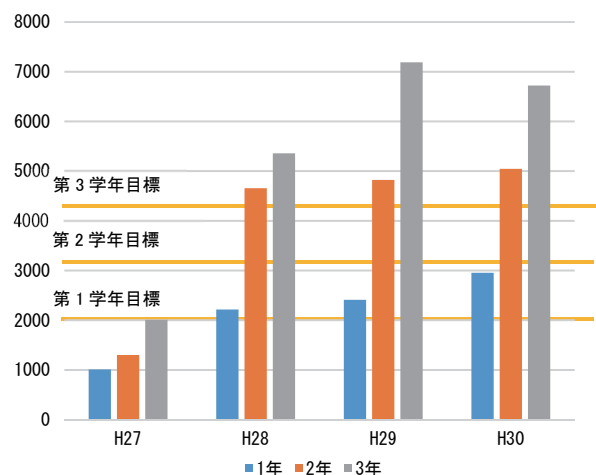


図1 年度毎の平均獲得マイルの推移(国際クラス)

6 (2) -7 グローバルサロン

全校生徒を対象に自由参加方式で実施。(土曜日 10:00~12:00)

計 9 回実施・参加人数合計 541 名。(国際 375 名, 一般進学文系 5 名, その他 161 名)

回	日 時	講 師 ・ テ ー マ
1	4 月 21 日	牧野佳奈子氏 (DiVE.tv 代表・制作ディレクター) 「愛知県の外国人労働者の日本語学習」
2	5 月 19 日	山藤旅間氏 (都立武蔵高等学校教諭・SDGs ファシリテーター) 「SDGs を「知る」から「行動する」ためのデザイン～自分の好きで社会課題の解決を目指す方法～」
3	6 月 16 日	杉藤貴浩氏 (中日新聞社社会部記者) 「子どもの貧困」
4	7 月 7 日	菅谷亮介氏 (Very50 代表) 「世界に羽ばたく高校生が知るべき 3 つのこと」
5	9 月 29 日	杉浦伸氏 (名城大学都市情報学部准教授) 「『意思決定手法』を使ってみよう」
6	10 月 20 日	馬場幸子氏 (トヨタ自動車 (株)・北京オリンピックソフトボール金メダリスト) 「夢に向かう瞬間 (いま) しかない」
7	11 月 10 日	四方善啓氏 (名古屋大学名誉教授) 「インドから西へと流れる学問」
8	12 月 8 日	Jeffery Fritch 氏 (Berlitz 講師・本校非常勤講師) 「Speaking with Confidence」
9	1 月 26 日	田林信哉氏 (総務省職員・元南相馬副市長) 「東日本大震災と原子力発電所の事故, そして復興について～南相馬市の経験から～」

6 (2) -8 グローバルリーダー講座

1 学期と 2 学期にそれぞれ 1 度, 全校生徒を対象に実施する。

回	日 時	講 師 ・ テ ー マ
1	6 月 20 日 (水)	小出宣昭氏 (中日新聞社顧問・主筆) 「モノサシ一本主義を抜け出せ」
2	11 月 21 日 (水)	吉野彰氏 (名城大学理工学研究科教授) 「リチウムイオン電池が拓く未来の社会」

6 (2) -9 SGH 運営指導委員会等の開催

回	日 時	審 議 ・ 報 告 事 項
1	11 月 11 日 (日)	・ SGH 運営指導委員会委員長の選出 ・ 愛知県庁×名城高校×多文化共生セッションの報告 ・ グローバルフィールドワーク (台湾・インドネシア研修) の報告 ・ Meijo Global Festa 2018 ・ 今後の事業展開
2	2 月 22 日 (金)	・ グローバルアクション (カナダ研修) の報告 ・ 第 4 回高校生国際シンポジウム報告 ・ 今後の事業展開

6 (2) -10 成果の公表・普及

・ 研究発表会の開催 (一般公開): 7 回 (その中での発表件数: 計 103 件)

① 国際クラス第 3 学年課題研究発表会 (日本語): 平成 30 年 7 月 2 日 (月)

内 容: 日本語での研究発表

発 表: 国際クラス第 3 学年 29 件 (29 名)

② SGH 探究活動に関する研究会: 平成 30 年 7 月 7 日 (土) 参加 9 校/36 名

内 容: Meijo Global Festa と探究活動についての講演・報告・研究協議

講 演: 「Meijo Global Festa に見る探究型学習の成果と課題」名城大学都市情報学部准教授 杉浦伸氏

報 告: 「Meijo Global Festa が目指すこと」教育開発部 中條健太

事例報告: 「国際クラスにおける探究型学習の実践」教育開発副部長 羽石優子

- ③ 国際クラス第1学年「愛知県庁×名城高校♪多文化共生セッション」発表：平成30年11月13日（火）
 内 容：愛知県多文化共生推進室と連携して、多文化共生の取り組みを提案
 発 表：国際クラス第1学年10件（34名）
- ④ 国際クラス第3学年課題研究発表会（英語）：平成30年11月1日（木）
 内 容：英語での研究発表
 発 表：国際クラス第3学年30件（30名）
- ⑤ Meijo Global Festa 2018：平成30年11月11日（日） 参加16校／223名
 内 容：東海地区を中心とした課題研究に取り組む学校（生徒）による議論・発表
 （詳細は前述「6（2）-5 Meijo Global Festa」p.7を参照）
- ⑥ 教育研究会 2018：平成30年11月22日（木） 参加40団体／102校
 内 容：各教科におけるアクティブ・ラーニング型授業の公開授業と研究協議
 公開授業：各教科（英語・数学・国語・理科・社会）2単位ずつ
- ⑦ 生徒研究発表会：平成31年2月22日（金）
 内 容：全校より選抜で研究発表
 口頭発表：SGH インドネシア研修調査報告1件（第2学年1名）
 国際クラス第3学年課題研究2件（2名）／一般進学クラス文系第3学年1件（1名）
 ポスター発表：国際クラス第3学年6件（6名）／国際クラス第2学年5件（5名）
 グローバルサロン参加者有志1件（2名）
 SGH カナダ研修調査報告1件（6名）
- ・外部研究発表会への参加9回（その中での発表等件数：計23件）
- ① 移民政策学会 2018年度年次大会：平成30年5月27日（日）
 内 容：講演・シンポジウム・自由報告・国際セッション・社会連携セッション
 発 表：国際クラス第3学年3件（3名）
 ・『「新あいち多文化共生推進プラン」への提案』
 ・「愛知県におけるより良い多文化社会に向けた効果的な取り組みの提案」
 ・「外国人集住団地における持続可能なコミュニティの実現への一方策」
- ② Global Link Singapore 2018：平成30年7月20日（金）～22日（日）
 内 容：アジア太平洋における中高生のアイデアコンテスト（社会課題分野）
 発 表：国際クラス第3学年1件（1名）
 “Better Community Activities for a Better Multicultural Society”
- ③ グローバル人材育成教育学会 第6回全国大会：平成30年10月20日（土）・21日（日）
 内 容：講演・シンポジウム・事例紹介・ポスター発表
 ・シンポジウム「産学・高大接続連携からみるグローバル人材育成」：校長 岩崎政次
 ・シンポジウム「高大連携の理想モデルを探る」：教育開発部 伊藤高司
 ・シンポジウム「学生たちが考えるグローバル化」：本校生徒
 ・事例紹介「高等学校におけるグローバル人材育成の取り組み」：教育開発副部長 羽石優子・国際クラス第3学年3名
 ・ポスター発表：国際クラス第3学年1件（1名）
- ④ SGH 全国高校生フォーラム：平成30年12月15日（土）
 内 容：SGH 指定校生徒による課題研究のポスター発表
 ポスター発表：国際クラス第3学年1件（1名）
 “Education of Sexual Diversity’ into Compulsory Education”
- ⑤ 第4回高校生国際シンポジウム：平成31年2月8日（金）・9日（土）
 内 容：課題研究に取り組む国内外の高校生による研究発表コンテスト
 口頭発表：国際クラス第2学年1件（1名）：スライド発表部門優良賞
 「観光戦略における名古屋城木造復元の有効性～バリの観光開発の事例から～」
 ポスター発表：国際クラス第2学年5件（5名）
 「避難所 HUG の学校教育への導入」：ポスター発表部門最優秀賞 他

- ⑥ 課題研究セミナー：平成 31 年 2 月 16 日（土）
内 容：課題研究に関する講演会（主催：新興出版社啓林館）
講 演：教育開発部 山口照由「課題研究 - 全校への普及 -」
- ⑦ 東海地区高校数学セミナー：平成 31 年 3 月 3 日（日）
内 容：新テストに向けて今後求められる数学指導に関する講演会（主催：新興出版社啓林館）
講 演：教務部 宮田隆徳「反転授業とアクティブ・ラーニング」
- ⑧ NEXT Education セミナー 2019：平成 31 年 3 月 16 日（土）
内 容：『探究』はこれからの教育をどう変えるかに関する講演会（主催：株式会社 JTB）
講 演：教育開発副部長 羽石優子「探究活動をどう評価してきたか～育てたい生徒像の実現に向けて～」
- ⑨ SGH 甲子園：平成 31 年 3 月 23 日（土）
内 容：全国 SGH 課題研究発表
ポスター発表：国際クラス第 2 学年 1 名／ディスカッション：国際クラス第 2 学年 2 名

・他校との交流・連絡・普及

他指定校・アソシエイト校の研究発表会を参観：11 校
学会・他指定校・アソシエイト校との合同学習・研究発表会：7 回
本校主催の教員向け研究会：2 回

7 目標の進捗状況、成果、評価

7 (1) 【研究開発目標①】グローバルリーダー養成のための各種プログラムを「グローバルパスポート」制度において 25 件以上実施する。

本校事業としては、海外研修や研究発表会、講座等、32 件実施し、目標を達成できた。

表 5 年間のグローバルパスポートにおける本校プログラムの件数

指 標	指定前	1 年目	2 年目	3 年目	4 年目	5 年目	目標
本校プログラム	0	18	29	48	30	32	25

*4 年目からは、「授業内での大学教授等による講座」を除いて計上

本校事業への各種プログラムへの参加状況は以下の通りである。

国際クラス第 1 学年（34 名）：延べ 523 名、平均約 15 回（昨年約 8 回）

国際クラス第 2 学年（23 名）：延べ 301 名、平均約 13 回（昨年約 9 回）

国際クラス第 3 学年（30 名）：延べ 257 名、平均 9 回（昨年約 3 回）

プログラムの策定が定着したとともに、教員・生徒たちにも周知されており、担任の声かけ等によって、生徒たちのなかにも積極的に参加するのが当たり前という機運が高まっている。

7 (2) 【研究開発目標②】PBL におけるコンフリクト・レゾリューション、ジグソー学習、フリップトクラスルームの各教科における展開例の開発と定着を進める。

本年度は、「SGH 探究活動に関する研究会」、「教育研究会 2018」を開催した。「SGH 探究活動に関する研究会」は、Meijo Global Festa と探究活動の成果検証を趣旨に 9 校 36 名が参加して実践報告や研究協議を行った。「教育研究会 2018」は、SSH や SGH での探究活動での経験をいかしながら、通常の授業での「主体的・対話的で深い学び」につなげられるようなアクティブ・ラーニング型授業の実践研究を趣旨としており、40 団体 102 名（助言者 5 名を含む）の参加の下、英語、数学、国語、理科、地歴・公民で 2 単位ずつの公開授業見学と研究協議を行った。

また、東海地区高校数学セミナーにて、反転授業とアクティブ・ラーニングについて報告した。

7 (3) 【実践目標①】探究型学習を通して、自らネットワークを構築し、協働して問題解決に向かう、スキルとマインドセットを育成する。

本年度の探究型授業は、国際クラスでは第 1 学年で「多文化共生」（2 単位）、第 2 学年では「国際教養」（4 単位）や「課題探究」（2 単位）、第 3 学年では「国際教養」（2 単位）と「課題

探究」(4単位)を行った。そこに連動して、海外研修やフィールドワークが実施される。さらに、国語、数学、公民、英語等においても探究型の授業を積極的に実施している。

これらの探究学習の効果を検証するために、SGT 及び各因子の向上実感調査等を行った。

SGT の結果、国際クラスにおいては、入学時から各因子とも高く、各因子の値は、3.4～4.5 (一般進学クラスは 3.4～3.7) である。各因子の平均値もどの学年も向上している(右表)ことから、国際クラスで実施している探究型学習は、着実に成果を挙げているといえる。

以下に国際クラスの SGT 結果を分析する。

【主対象生：国際クラス第1学年】

- ① 本年度1月時点で、11因子中7因子が4.0を超え、全ての因子の平均は4.1ポイントである。4月の結果から0.3ポイント向上している。
- ② 4月の結果と比較して t 検定を行うと、「ICT (+0.7)」「発見・解決 (+0.6)」で有意差が認められた ($p < .05$)。これは情報教科と連携したグローバル教科「グローバルプロジェクトスタディ」と総合的な学習の時間「多文化共生」の成果だと考えられる。

【主対象生：国際クラス第2学年】

- ① 本年度1月の各因子の平均は4.0ポイントであった。昨年度の1月からほとんど変化はなく、有意差のある因子はなかった。わずかに「多様性 (+0.3)」に差異が見られたが、今後の変化を注視する。
- ② 入学時から比較すると、平均して0.2ポイント向上しており、「行動・発信」以外の全ての因子で向上している。有意差が認められたのは「ICT (+0.6)」の因子であり ($p < .05$)、新たに始まった「課題探究」の授業や校外での発表活動が増えていることが背景にあると考える。

【主対象生：国際クラス第3学年】

- ① 本年度1月の各因子の平均は4.2ポイントであった。また、昨年度1月から「行動・発信」「ID」以外の9因子でポイントが向上しており、 t 検定で、「思考力 (+0.1)」、「ICT (+0.2)」、「発見・解決 (+0.2)」、「失敗耐性 (+0.1)」において有意差が認められた ($p < .05$)。
- ② 入学時から平均して0.3ポイント向上し、「思考力 (+0.6)」、「ICT (+0.7)」、「発見・解決 (+0.4)」、「失敗耐性 (+0.4)」に有意差が見られた ($p < .05$)。課題探究やそれに付随する国内外での活動等、探究活動の取り組みの成果といえる。

表 SGT の各因子の平均ポイント

クラス	1年春	1年冬	2年冬	3年冬
国際クラス第1学年	3.8	4.1		
国際クラス第2学年	3.8	4.0	4.0	
国際クラス第3学年	3.8	3.8	4.0	4.2
一般クラス第1学年	3.6	3.7		
一般クラス文系第2学年	3.8	3.7	3.5	
一般クラス文系第3学年	3.5	3.6	3.6	3.4

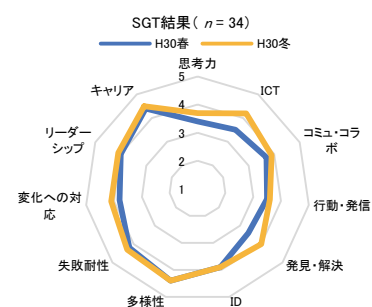


図1 国際クラス第1学年各因子の変化

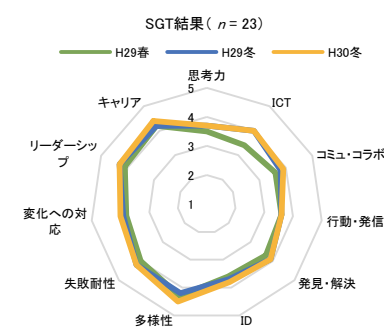


図2 国際クラス第2学年各因子の変化

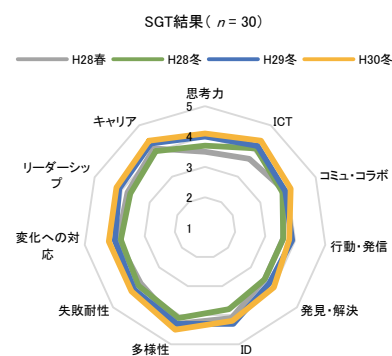


図3 国際クラス第3学年各因子の変化

- 7 (4) 【実践目標②】国内と海外でのフィールドワークを課題研究論文完成までに4回以上実施し、それらの実践的活動を通して、ローカルとグローバルを往還する視座を獲得させる。

国際クラス第2・第3学年の達成率は100%であり、第2学年は入学以降、平均して14.7回、

第3学年は14.5回の実施となった。これらの活動は、生徒の社会課題に対する当事者意識の育成にも繋がっており、探究活動にも大きく作用している。

それを検証すべく、本年度末に、向上実感が得られた5S5M等の因子において、フィールドワークが影響を与えた割合を抽出した。結果、本年度はフィールドワークを行っていない第3学年では目立った結果は出ていないものの、本年度国内外で複数の調査を行った第2学年では、特に「失敗耐性」「探究意欲」「発見・解決」「コミュ・コラボ」の値が高く（図1）、海外の人や社会人を相手に失敗を繰り返しながら調査を行った様子が見られる。また、「ローカルとグローバルを往還する視座」を意識して学習を進めた結果、インドネシアでのフィールドワークをもとに、バリの観光開発の事例と名古屋における観光戦略を比較検討した生徒は、「第4回高校生国際シンポジウム」における口頭発表で優良賞を受賞した。こうした面からも、一連のフィールドワーク活動が「ローカルとグローバルを往還し、問題発見する力・課題を解決する力」を高める要素となっていることがわかる。

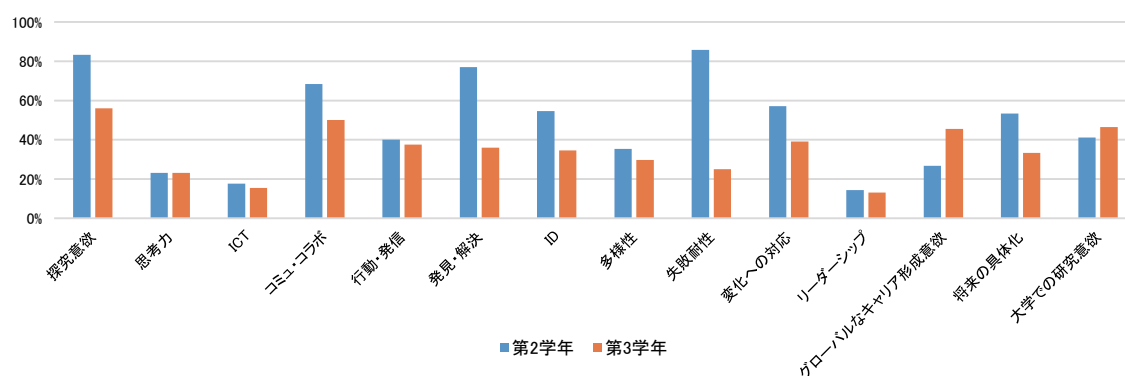


図1 フィールドワークが各因子の向上実感に影響を与えた割合(国際クラス)

7 (5) 【実践目標③】国内外の研修、大会及び社会活動に年間3回以上参加させる。

国内外の研修、大会及び社会活動に年間3回以上参加した生徒の割合は、国際クラス全体で92.0%（昨年度87%）であり、

表 国内外の研修、大会及び社会活動に参加した数

学 年	応募・参加数	1人あたりの平均参加数	目標達成割合
国際クラス第1学年	530	15.6	100%
国際クラス第2学年	322	14.9	100%
国際クラス第3学年	149	5.0	76.7%

国際クラス第1学年及び第2学年については昨年度と同様100%達成できた。第3学年の達成割合は76.7%にとどまったが、昨年度の56.8%に比べると大きく向上した。

上級生や意欲の高い数名が核となり、彼らが校外で積んだ経験を他の生徒が見聞きするうちに、次第に全体が影響を受けていく、というのが例年の形であったが、本年度の第1学年に関しては、早い時点から意欲的に動き、周囲を巻き込んでいく生徒が多く見られた。数値にもそれが表れており、全学年において研修や大会に参加する機運が定着してきている。

また、教員が率先して関わり、外部との人脈を構築したことも大きな成果である。

7 (6) 【実践目標④】プレゼンテーションを、国際クラスの生徒は年間12回以上実施する。

第1学年が17～20回、第2学年が16～24回、第3学年が18～23回実施し、全学年で達成できた（校外の実施分は含まず）。

例年通り、第1学年の「English Presentation」でプレゼンテーションの基本技能を段階的に指導し、その後の様々な発表時にはその理論を応用して実践しているが、それ以外にも上級生からの影響が少なくない。入学時に上級生によるガイダンス等を受けたり、上級生の研究発表を視聴したりすることを通して、早い段階からプレゼンテーションに対するモチベーションを高めている。

一方、第3学年の生徒についても、下級生の前で発表することでよい影響が生まれている。第3学年の生徒を対象に3年間でついた力について書かせたところ、多くの生徒が「人前で自信をもって発表ができるようになった」、「人に教えたり、人の役に立ったりすることが楽しくなった」と答えていることから、自己肯定感の向上にも寄与していると考えられる。

他クラスにおいても年間に数回はプレゼンテーションを経験させることが定着してきており、全校を対象にした生徒研究発表会等で成果が共有されている。

以上の理由から、今後も上級生と下級生の学び合い、教え合いの機会を継続することが重要であり、そのために、各授業でそれぞれ行われるプレゼンテーションをある程度管理し、他学年の視聴ができるよう、担当者間の連携を進める調整役が必要である。

7 (7) 【実践目標⑤】卒業時における CEFR の B2 レベル到達率を国際クラスの生徒は 100%とする。

英検準1級、TOEIC Listening & Reading（以後、TOEIC L&R）785点をもって CEFR の B2 レベルと読み替える。結果として第3学年では英検で見ると、準1級合格率が20%（昨年度43%）（図1）、TOEIC L & R の785点以上の取得率が8%（昨年度35%）であった。昨年度に比較すると、どちらも低下しているが、本年度は授業の内外で「英語での発表」と「質疑応答」に力を入れて指導した。その成果もあって、本年度は校外の研究大会において英語で発表する生徒が多かった。

英検2級で見ると、1名を除く97%が達成しており（図1）、TOEIC L & R のクラス平均スコアの推移を見ると、第1学年前期の326点から第3学年後期の620点へと294点伸びた（図2）。

昨年度の課題であった「即時的に英語で時事問題や社会問題等について話す」を克服するために、本年度は第3学年の「国際教養」（2単位）の授業で、統計データを用いながら、英語でエッセイを書いたり議論したりする活動を取り入れた。生徒たちは、データを批判的に捉えながら、英語で意見を表出することに慣れてきた様子である。現状の課題としては、少人数グループで議論を行う際に、中心的に発言する生徒が限られてしまい、メンバー全員が十分に活発な意見を交わすことができていないことが挙げられる。議論に必要な各トピックの背景知識が不十分であることも考えられるが、日本語話者のクラスメイトと英語で会話をするためのマインドセットが身についていないことも要因である。この課題は他学年においても同様であるため、今後は、英語での日常的な発話力を高めることに焦点を当てた活動を多く取り入れていく必要がある。そのために、Can Do リストを提示しつつ、B2 レベルの項目を基準として指導を進める。

表 本校教員が作成した Can Do リスト B2 レベル

話すこと（やり取り）	話すこと（発表）	聞くこと	読むこと	書くこと
時事問題や社会問題等について、即時的に自分の考えを論理的に述べることができる。	時事問題や社会課題等について、客観的事実と自分の考えを用い、聞き手に伝わるように工夫しながら、15分程度の発表をすることができる。また、質疑応答では即時的に質問者の質問に答えることができる。	時事問題等、幅広く社会に関係した内容についての情報や説明を聞いて、要点を正確に理解することができる。英語母語話者の演説を聞き取り、内容を理解することができる。	論理性のある説明文等を中心に専門的な分野の英文を初見で読んで、大筋の内容を正しく理解できる。自分の必要とする情報を英文の中から短い時間で的確に探しだすことができる。	時事問題等幅広く社会に関係した内容について自分の考えを論理的な段落構成を意識しながら、150語程度で書くことができる。

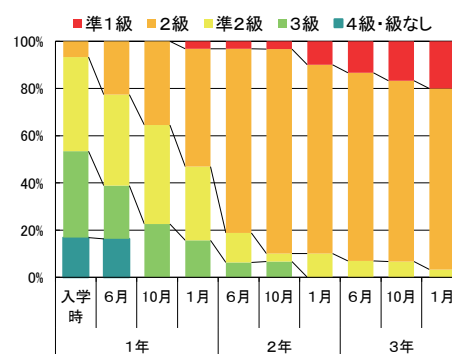


図1 英検取得率推移

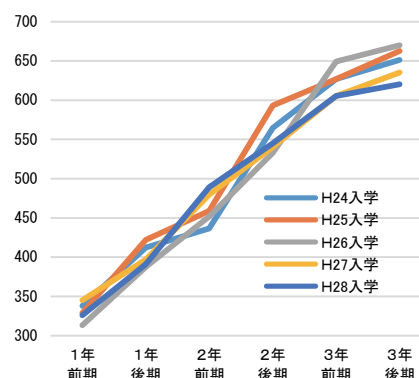


図2 TOEIC L&Rスコア推移

7 (8) 【実践目標⑥】国際化を進める国内や海外の大学等，課題研究を生かした研究ができる大学へ進学する生徒を育成する。

国際クラス第3学年においては，スーパーグローバル大学創成支援事業の採択校(以下，SGU)である，上智大学，立教大学，立命館大学，関西学院大学等への進学が決定している。

「探究を深めることのできるグローバルな大学への進学意欲」と「グローバルなキャリア形成への意欲」について調査を行ったところ，意欲の高い(「非常に高い」と「高い」)生徒の割合は，「探究を深めることのできるグローバルな大学への進学」が，第1学年で77%，第2学年では83%，第3学年で93%，「グローバルなキャリア形成」は，第1学年76%，第2学年65%，第3学年73%で，キャリア形成はまだ不明であるものの，探究を深めることのできるグローバルな大学への進学意欲はより高まっていることが分かった。

これらの意欲を喚起した要素を調査したところ，「探究を深めることのできるグローバルな大学への進学」では「海外研修(80%)」，「探究型授業(78%)」，「語学力(49%)」，「フィールドワーク(47%)」の順で多く，「グローバルなキャリア形成」では，「海外研修(73%)」，「探究型授業(66%)」，「フィールドワーク(44%)」，「外部講師(42%)」の順で多かった(「海外研修」未実施の第1学年を除いた平均，他は全学年の平均で算出)。つまり，「グローバルな大学への進学意欲」「グローバルなキャリア形成への意欲」の向上のためには，探究型学習での学びとともに社会との接点を持たせることが必要である。

8 5年間の研究開発を終えて

8 (1) 教育課程の研究開発の状況について

主対象である普通科国際クラスでは，第3年次から，第3学年と第2学年の「課題探究」を合同とし，研究領域別のゼミ制で実施している。これにより，学年を越えた生徒間での教え合い・学び合いを進め，授業内でも多様性への共感やリーダーシップへの意欲等，スキルやマインドセットを育成する仕組みを模索した。

第3年次からは，本校で最も規模の大きい普通科一般進学クラス第1学年に「探究基礎」，一般進学クラス文系第2学年に「グローバル概論」を導入し，第4年次には普通科一般進学クラス文系第3学年に選択制で「課題探究」を導入した。

8 (2) 高大接続の状況について

名城大学とは，授業，海外研修，研究発表，グローバルサロン，Meijo Global Festa等の，講師派遣やプログラム開発において連携を深めてきた。特に当初は講師派遣を中心とした接続であったが，次第に探究活動や研究会での助言，海外研修のプログラム開発等，より深い接続ができるようになった。また，大学教員より各種学会の案内を受け，教員・生徒共に参加・発表する機会が増えており，本校教員の資質向上にも役立っている。

単位履修制度については，SGH 事業指定前に主対象クラスである国際クラスが，2004年度～2014年度まで名城大学人間学部の講義の履修・認定(6単位分)を行っていたが，柔軟に運用できるよう，本校での授業に講師を招聘する形へと変更した経緯がある。結果として，大学教員及び学生の課題探究活動への参加は，指定前の20名から189名となり，様々な専門分野を持った講師を継続して招聘することができた。

表 課題研究と外部との連携

指標	指定前	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	目標
課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)	20	43	90	134	154	189	192
課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)	8	49	141	168	173	175	35

8 (3) 生徒の変化について

・国際クラス入学生の変化

指定1年目の国際クラス入学生（36名）と、5年目となる本年度の入学生（34名）の4月時点のSGTを比較した（図1）。「コミュ・コラボ」や「行動・発信」については、SGH指定以前から当該クラスの特徴として広報していた因子であるため、変容は見られないが、「多様性（+1.0）」、「キャリア（+1.0）」、「リーダーシップ（+0.7）」、「ID（+0.5）」、「失敗耐性（+0.5）」、「発見・解決（+0.4）」は、上昇している。これは、本事業が認知され、意欲の高い生徒が入学していることが原因と推察される。

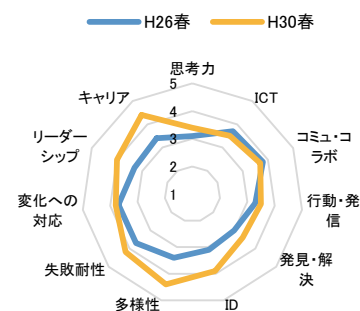


図1 指定後1年目の入学生と5年目の入学生の1年時春のSGT

・グローバルアクション カナダ研修参加生徒の変化（追跡調査）

昨年度のカナダ研修に参加した一般クラス第1学年の生徒（Yさん）のSGT結果を追跡したところ変容が見られた。

カナダ研修の参加者は全校から選抜されるが、昨年度は、当該生徒以外はSGH事業の主対象である国際クラスの第2、第3学年であった。すなわち、当該生徒は探究活動を日ごろから精力的に実施している上級生に交じって参加した状況にあった。結果、研修の事前に行ったSGTに比べ、事後は多くの因子が低い値を示し（図2）、リフレクションシートには、「自分の力不足を感じ、思うように行動できなかった」と悔しさが著されていた（第4年次の研究報告書p.33を参照）。

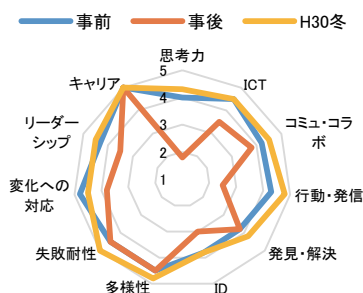


図2 カナダ研修参加者YさんのSGTの推移

帰国後、積極的に本校のSGH諸活動に参加するとともに、第2学年では授業「グローバル概論」での探究活動に取り組むなかで、本年度の1月にはほとんどの因子において、カナダ研修前の自信を取り戻し、さらに向上している様子が見て取れる。この結果は、本校のSGH事業の開発に一定の成果があったことを示している。

・生徒の学びの姿勢とキャリア意識の変化

第3学年が作成した「課題研究学びの軌跡」の以下の文面から、本稿での課題探究活動を元に大学での学びへの視点や課題を明確化させ、将来を具体化させている様子がうかがえる。

- ・以前は漠然としか将来を考えてなかったが、3年間の課題探究を通じた学習と経験を重ねるうち、教育の重要性和マイノリティへの支援の必要に目が向いた。課題探究ではマイノリティの子どもの現状と課題を研究したことで、将来は子どもが抱える問題に携わりたいと考えている。そのため、大学では児童心理を研究し、留学などしてそれに関する先進的な研究を学びたい。（国際クラス第3学年）
- ・国際クラスで授業を受けているうちに、英語を話すことがゴールではなく、それをどう生かすかが重要であると感じた。さらに、海外研修などで他国の課題や現状に触れ、公民や課題探究などの授業で、貧困や移民、外国人労働など様々な題材について議論したり、発表したりしているうちに視野が広がり、英語圏だけでなくアジア地域に興味を持つようになった。そのため、大学ではアジア研究を先行することができる上智大学に進学し、アジアの文化や歴史を学び、日本の外国人労働者受け入れについて関わる仕事に就きたい。（国際クラス第3学年）

また、下表の通り、年度を経るごとに意欲が高まり活動が活発になる様子が見受けられる。

表 課題研究及びグローバルなキャリア形成への意欲（1～5は全校生徒を対象、6は国際クラス生徒を対象）

指標	指定前	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	目標
1 自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数	50	97	90	99	89	118	120
2 自主的に留学又は海外研修に行く生徒数	33	21	27	47	53	62	30
3 課題研究に関する国外の研修参加者数	10	41	55	60	48	80	50
4 課題研究に関する国内の研修参加者数	20	78	74	89	90	102	120
5 グローバルな課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数	42	390	399	514	790	974	80
6 将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合	11.2%	80.8%	82.6%	87.9%	95.6%	95.4%	100%

8 (4) 教師の変化について

- ・総合的な学習の時間「課題探究」の担当者（5年間：実25名 延べ88名）の変化
 - ・大学での研究経験を生徒に還元することができた【社会】
 - ・改めて自分が大学での研究経験を振り返り、蓄積がなされていることを確認できた【社会】
 - ・5S5Mの各段階や習得の過程を分解して考え、実践することが、教科教育に対する考え方や指導法にも生かされた。【国語】
 - ・科目横断的な学習領域を指導することにより、技術のみを指導するOffJTの学習から、探究的視点を持ったOJTの学習に切り替える契機となった。【情報】
 - ・各教員それぞれの強みを生かせるとともに、その指導法を共有・学習できる機会となった。【複数】
 - ・教科指導だけでなく、育てたい生徒像やその資質について改めて考え、明確化した。【複数】

・関わる教員数の増加

本事業に際して中心的に機能している組織は、管理職が委員長となり組織する「SGH実行委員会」、校務分掌として実働を担う「教育開発部」、総合的な学習の時間等、SGHの探究型授業を統括する「グローバル教科」、主対象である国際クラスの「担任団」の4つであるが、それらに関わる教員数は年々増えている（図1）。結果としてその割合は全専任教諭の39%となり、第1年次の18%から大きく伸びている。

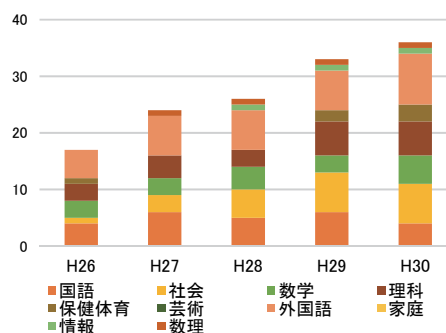


図1 SGH事業に関わる教員数

8 (5) 学校における他の要素の変化について（授業、保護者等の状況について）

・保護者の変化

SGH事業の主対象である国際クラスの第1学年の保護者にむけたアンケートによると、本校への進学理由に「本校独自のカリキュラム」を挙げた回答は、平成25年度時点は25%であったのに対し、平成27年度は41.4%、平成29年度は71.4%と飛躍的に上昇している（図1）。これは、中学校や保護者にもSGHの諸活動が浸透してきた結果と言える。

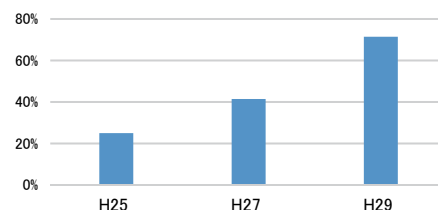


図1 「本校独自のカリキュラム」を進学理由と回答した保護者の割合(国際クラス)

・教育研究会等の開催

本年度は、「SGH探究活動に関する研究会」と「教育研究会2018」の2回、他校教員に向けた研究会を開催した。「SGH探究活動に関する研究会」は9団体36名、「教育研究会2018」は40団体97名の参加者を迎え、本校教員が実践報告・授業実践を行い、大学教員からの助言をもとに他校教員と協議する形式で実施した。

「教育研究会2018」を主管したアクティブ・ラーニング研究会はSGH指定後の平成28年に組織され、「SSHやSGHでの探究活動での経験をいかしながら、学校全体として、通常の授業でも『主体的・対話的で深い学び』につなげられるようなアクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業を実施するよう研究を行う」ことを目的としている。これまで、他校教員を対象にした公開授業や実践報告を本校が主催したことはなかったが、これらの研究会では英語科・数学科・国語科・理科・社会科から合わせて12名が探究活動や授業内でのアクティブ・ラーニングの手法等について報告・発表を行うことができ、校内に、探究活動を重視し、各教科での展開を実践する基盤ができたといえる。

・生徒研究発表会の変化

本校ではSSHの指定を受けた平成18年度より「SSH生徒研究発表会」を開催し、20年度からは、「生徒研究発表会」と改称して全校生徒の研究発表の場を設定している。SGH指定前までは、SSHの研究発表を軸に、国際クラスの課題研究、総合学科の活動と発表の枠を広げて

きたが、SGH 指定後は更に一般進学クラス文系や特別進学クラス等、発表を行うクラス・コースが広がっている。これは SSH とともに SGH が本校の探究活動の軸となり、全校規模での探究活動が行われつつあることを示している。

8 (6) 課題や問題点について

・校内・他校への成果の普及の不足

「Meijo Global Festa」, 「SGH 探究活動に関する研究会」, 「教育研究会 2018」などにより、本校の体系的な教育課程や PBL の教育課程の普及を目指してきたが、十分であったか、という点が課題である。

校内、他校への普及のポイントは協働である。教員・生徒とも協働の有効性については理解できている。研究実践目標②④の成果・評価、今後の改善点であげたように、プレゼン作成、発表において上級生・下級生の学び合い、教え合いの機会が重要であること、研修・大会において意欲ある上級生から下級生に良い影響あること、フィールドワークについて教員が情報共有し、生徒の指導にあたる体制作りの重要性が挙げられている。他校との協働についても、Meijo Global Festa での他校生徒との議論・協働の有効性が指摘されている。

・「自ら新たなネットワークを構築する経験」の創出における指導・支援の在り方

グローバルシチズンシップの獲得に向けて、本事業では、生徒たちの A「世界の現状と課題に触れる経験」、B「自らの意見を発表し、他者と対話・議論する経験」、C「自ら新たなネットワークを構築する経験」を重視してきた。A・Bについては、ある程度達成できたが、Cについては、意欲はあるものの、ネットワーク構築に向けて動き出した生徒がいる段階である。

本校では、課題解決に向けた活動として、ボランティア活動やアドボカシー活動等に取り組むとしている（前述「スーパーグローバルの構想の概要」p.3を参照）。それらやフィールドワークを通して、生徒たちが課題を「自分ごと」と捉えることができるようになってきたことから、C「自ら新たなネットワークを構築する経験」をどう作り出していくかが課題と言える。

・高大連携・産学協働のための部署（組織）の整備

SGH 担当教員の個人的な働きかけのなかで、それぞれ連携、協働を図ってきた部分が大きかったことは否めない。組織的な連携、協働を推進する部署が整備され、活発化すれば、授業に大学教員や企業、県、NPO などとの協働による授業、諸活動をより機能的に設計できたのではないかと考える。

・外部人材（総合アドバイザー、コーディネーター）の必要

運営指導委員会を年 2 回開催し、指導委員からの助言を生かし、本校のプログラムの見直しを図ってきたが、大きく変化する社会情勢の中では、スピード感のあるプログラムの改変、取捨選択が必要である。研究開発の概要にある高大連携、産学協働の探究活動等を進展させるためには、本校の研究開発を総合的に見る外部人材（総合アドバイザー）が必要であったかもしれない。

8 (7) 今後の持続可能性について

本校及び管理機関は SGH 事業の有用性を認めており、SGH 指定期間終了後も継続して事業運営を行うことを決定した。したがって、海外研修の一部は修正する必要があるものの、国内での探究活動・発表活動等は従来通り継続し、主対象である普通科国際クラスだけでなく、普通科一般進学クラス、普通科特別進学クラス、総合学科と、全校規模で探究活動を深め、本校の教育の大きな軸とする。そのため、今後は SGH 事業から「Liberal Arts Meijo Program : LAMP」（仮称）へと名称を変更して、校務分掌の教育開発部を中心に探究活動を推進してことが検討されている。

実施報告書

1 研究開発名

高大協働による愛知県産業を基盤にしたグローバルビジネス課題の探究

2 平成 30 年度（第 5 年次）の研究開発実施計画

他校に対しては、研究発表会や Meijo Global Festa の開催、グローバルサロンの公開、外部の研究発表会への参加、グローバルパスポートの配布、相談・連携等を行い、普及を進める。また、新たに、中学校に対しても、Meijo Global Festa 及びグローバルサロンを公開する。校内に対しては、引き続きグローバルサロンやグローバルリーダー講座の実施や研究発表会の開催等を行う。

評価は、国際クラス第 3 学年では研究論文の外部評価（大会への参加と表彰等）、大学進学結果、資格試験の達成度、アンケート調査による自己評価により行う。一般進学クラス文系コースでは、アンケート調査及び課外の SGH 活動への参加率等によって行う。

卒業生について、SGH 事業指定前の卒業生と進路先等の変容について調査する。

最終年度となることを踏まえ、3 年間を通した学びの体系となるよう編成したカリキュラム内容を検証しつつ、事業の改善を行う。あわせて平成 31 年度入学生の教育課程を編成する。

平成 30 年度の海外研修は、以下の 4 つのプログラムである。

- (1) 国際クラス第 1 学年を対象とした「グローバルレクチャー」として、3 月にニュージーランド研修を実施する。多様な人々との協働・共生や企業の CSR 活動の現状を学ぶ。
- (2) 国際クラス第 2 学年を対象とした「グローバルフィールドワーク」として、10 月に台湾とインドネシアに分かれて研修を実施する。台湾では主に「日系企業の海外進出」、インドネシアでは主に「観光と開発」、「伝統とグローバル化」に焦点を当て、グローバル化における課題と可能性について、フィールドワークの基礎的活動を通して学ぶものとする。
- (3) グローバルアクションとして、課題研究活動を行った生徒から募集し、選抜のうえ、カナダで実施する。主なテーマは「移民社会の現状と課題」とする。平成 30 年度以降は平成 29 年度の実績を踏まえて訪問先・時期等について検討する。
- (4) Global Link Singapore 2018 への推薦参加の権利が与えられたのに伴って、7 月にシンガポールで開かれる同大会の社会課題分野に参加する。

学年	第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年
重点事項	グローバルサロン 海外研修（ニュージーランド）	課題研究活動 Meijo Global Festa グローバルサロン 海外研修（台湾・インドネシア） 海外研修（カナダ・選抜） 外部研究発表会への出場	課題研究活動 グローバルサロン 海外研修（カナダ・選抜）
次年度準備	Meijo Global Festa 個別課題研究の導入	課題研究論文発表	

3 研究開発の実績

本校では「スキルとマインドセットの育成は、グローバルシチズンシップの獲得に有効である」との仮説をもとに研究開発を実施している。

そのため、本章・次章においては、5つのスキルと5つのマインドセット（以下、5S5M）を中心に、各因子における達成度や意欲等のデータを用いて成果や課題を記載した（下図）。

5S5Mの各因子は以下の通りである。

5つのスキル（5S）

- ① 論理的・批判的思考力【思考力】
- ② ICT活用能力【ICT】
- ③ コミュニケーション力・コラボレーション力【コミュ・コラボ】
- ④ 行動力・発信力【行動・発信】
- ⑤ 課題発見力・課題解決力【発見・解決】

5つのマインドセット（5M）

- ① アイデンティティを確立する意欲を持つ【ID】
- ② 多様性を認め共感する気持ちを持つ【多様性】
- ③ 批判・摩擦・失敗を恐れない【失敗耐性】
- ④ 変化に対応する意欲を持つ【変化への対応】
- ⑤ リーダーシップを発揮する意欲を持つ【リーダーシップ】

（以後の5M5Sの各因子名は、カッコ【】内の表記）



3 (1) 事業の評価

本校の事業については、生徒の変容を中心に、研究開発目標、実践目標の進捗状況をもって評価する。

生徒の評価に関しては、対象生徒全員が春と冬にSGTを実施し、それをもとに事業の評価を試みた。SGTの質問項目は、本校が設定した「グローバルシチズンシップを獲得するために必要なスキルとマインドセット」をもとにした5S5Mの10の因子とグローバルなキャリア設計に関する因子を取り入れ設計した。

しかし、SGTはその時点での各項目における達成度を自己評価するものであり、各項目における具体的目標は生徒それぞれで異なっている。そのため調査を補足し、適宜事業の評価とした。本年度行った調査は以下の通りである。

- ①SGT（スキルとマインドセットの各因子における到達度調査）
- ②スキルとマインドセット等の各因子における向上実感とその要因
- ③各因子における目標設定の変更状況と理由
- ④次年度の活動意欲
- ⑤スキルとマインドセット、アクションプランをもとにしたリフレクションシート

①SGTの因子と質問は以下の通りである。選択肢には5段階の順序尺度を用いた。

因子： 論理的・批判的な思考力

1	物事を理解するときには、法則を見出す・比較する・関連付ける等しながら体系的に考えるようにしている。
2	日頃から筋道を立てて考えを整理するようにしている。
3	1つではなく複数の情報源をもとにいろいろな視点・立場から考えるようにしている。
4	相手の話を聞きながら並行して自分の考えや質問をまとめるようにしている。

因子： ICT活用能力

5	社会で生きていくうえで、コンピュータを活用することは効果的である。
6	インターネットを活用して必要な情報を収集できる。
7	わかりやすくまとめることを意識して、コンピュータを使って文章や表やグラフを作成できる。

8	わかりやすく説明したり効果的に表現したりすることを意識して、コンピュータやプレゼンソフトを活用できる。
因子：コミュニケーション力・コラボレーション力	
9	主張するときには、相手に自分の意見や立場を受け入れてもらえるように工夫して主張するようにしている。
10	相手の伝えたい気持ちや意見を引き出して聞くようにしている。
11	うまくコミュニケーションが進まないときは、新しい方法を取り入れたり工夫したりして接するようにしている。
12	仲のいい友達だけでなく、多くの人と力を合わせることに価値を感じる。
13	日頃からグループの中で自分がどのような役割をとればよいかを考えて行動するようにしている。
14	意見が一致しない時には、誰かの意見を全面的に採用するのではなく、相手も自分もどちらもを生かすよう行動する。
(海外研修時の追加質問)	
●	海外の人にも積極的にコミュニケーションを取りに行く (いった)。
●	海外に会いたい人や友人ができるだろうと思う (できた)。
因子：発信力・行動力	
15	自分の主張を誰かに発信したり、発表したりすることにやりがいを感じる。
16	初めて会う人とも繋がりを作るようにしている。
17	やりたいことを実現するためには、いろいろな人を巻き込んで仲間を増やすようにしている。
18	目標達成や課題解決のためには、何をすればよいかを具体的に行動するようにしている。
因子：課題発見力・課題解決力	
19	普段見過ごしがちなことにも疑問を持ち、様々な場面から問題を見つけるようにしている。
20	なんらかの課題に気づいたときは、なんとか対処しようと思う。
21	問題に取り組むときは、「何が問題なのか」を明確にして取り組むようにしている。
22	正解、不正解がはっきりしない問題に対しても解決策を考えようとする。
因子：アイデンティティの確立	
23	自分自身やそのルーツとなるものについて考えることがある。
24	自分の国や世界のことに正しく知りたと思う。
25	他の人と比べたり、他の人よりも劣っていると感じたりすることがあっても、自分の良いところを知っている。
26	自分の将来に希望を持っている。
因子：多様性の理解と共感	
27	自分が普段「当たり前」と思っているのとは違う考え方や習慣について興味がある。
28	直接関わりのないような他人のことやよその国のことであっても、どこかで自分にもつながっていると思う。
29	自分とは違うグループの人たちの考え方を認めることは大切だと思う。
30	自分とは違うグループの人たちと関係を持つことは大切だと思う。
因子：批判・摩擦・失敗に対する姿勢	
31	他の人と考えが違ったり、意見が対立したりしても、自分の意見を主張することは大切だと思う。
32	行き詰ったから、粘り強く努力や工夫をし続けようと思う。
33	成功するかわからなくても、新しいことや少し難しいこと等、色々取り組んでみようと思う。
34	過程や結果から、よかったところ、よくなかったところを次に生かせるように分析することは重要だと思う。
因子：変化に対する姿勢 (対応力)	
35	想定外のことに對しても、自分なりに対処しようと思う。
36	うまくいかないときは、それまでの考え方ややり方にこだわらず、新たな方法を取り入れてみようと思う。
37	見知らぬ人や見知らぬ土地のなかでも、積極的に活動していけるように思う。
38	はじめての事態や困難な問題にも、しっかり取り組みれば対処できるように思う。
因子：リーダーシップ	
39	グループで活動するときは、周りの人に呼びかけたり働きかけたりしようと思う。
40	困難にぶつかったり、行き詰った時に前向きな提案をするように心がけている。
41	交渉やグループ活動では、着地点 (妥協点) を見だし、それに向かう見通しを立てながら、調整するよう心がけている。
42	目標達成や課題解決の為に、メンバー全員が意欲を高くしたり、目標・課題を共有したりすることが重要だと思う。
因子：グローバルなキャリア設計への意欲	
43	将来、日本にいても海外にいても、世界の色々な問題や状況につながって生きていきたいと思う。
44	探究型学習は、自分の将来や進路を考えるうえで重要だと思う。
45	習ったことや得た知識を日常の状況に当てはめて考え、実際に活用してみようと思う。
46	世界や社会に対して自分が貢献できることは何かを考える。

②の 5S5M 等の各因子における向上実感調査については 5 段階の順序尺度で尋ね、向上実感を「強く感じる」もしくは「感じる」と回答した生徒に、その回答を導くことになった要素を複数選択で聞いた。要素群は以下の 8 項目である。(以後の各要素名はカッコ【】内の表記)

- 1 探究型学習を行う授業の経験や成果【探究型授業】
- 2 海外研修の経験や成果【海外研修】
- 3 フィールドワークの活動経験や成果【フィールドワーク】
- 4 サロンや授業等での外部講師との交流経験【外部講師】

- 5 知識伝達型授業の経験や成果【知識伝達型授業】
- 6 語学力の向上【語学力】
- 7 学外での研修や大会等への参加経験【外部研修・大会等】
- 8 他校生徒との協働学習の経験【他校生徒の活動】

なお、本稿では、要素 1～3 を含めて「探究活動」として捉えている。

③の各因子における目標設定の変更状況と理由については、5S5M の各因子の到達目標の変化を 3 段階の順序尺度で尋ね、その変化の要因を記述させた。

④の次年度の活動意欲についての調査は、探究活動、グローバルキャリアの設計、SGH 諸活動等にむけた今後の意欲について「とても高い」から「高くない」までの 5 段階の順序尺度で尋ねた。

⑤のスキルとマインドセット、アクションプランをもとにしたリフレクションは、定量的に測定することのできない心の変容を捉えるべく、②の向上実感調査において、向上したと感じたきっかけやその時の自分の行動・思考をまとめるとともに、アクションプランを実行する際の状況・行動・気持ちの変容を記載させた。

3 (2) 探究学習に関わる授業

本校の SGH 事業の目的は、5S5M の因子を向上させることによって、「地球に生きる一市民として、世界（社会）のどこにいても、社会や世界の諸問題について当事者意識をもって捉え、他者と協働して解決しようとする」意欲を持った生徒を育てることとしている。

そのため、本校では、「ものづくりの拠点であり外国人労働者の多い愛知県」の特性を生かして、ビジネスの領域を軸にグローバル課題を探究するが、特に総合的な学習の時間における「課題探究」では、愛知県産業を次の 4 つの領域から学習・研究する（右図）。

- ①協働
- ②共生
- ③海外への発信・展開
- ④国際貢献・社会貢献



また、探究学習に関わる授業に共通することとして、作成されたレポートやプレゼンテーションは、ルーブリックを使用し、生徒による自己評価や相互評価も一部取り入れ評価する。各授業の目指す目的によって適宜変更して使用しているが、基本的なルーブリックを以下に記載する。

リサーチトピックにおけるルーブリック				
	4	3	2	1
リサーチトピック	どのような現象や問題を研究するのか明確である。	どのような現象や問題を研究するのか明確である。(標準)	どのような現象や問題を研究するのかはある程度明確である。	どのような現象や問題を研究するのかが明確でない。
研究テーマの背景	そのトピックを取り上げる社会的意義を多面的に認識できており、関連事項への理解も深い。	社会的意義を認識できており、それについての理解もある。	社会的意義は認識できているが、理解が薄い。	社会的意義がない。
リサーチクエスション	トピックの中から、実現可能な具体的な研究内容を設定しており、設定に工夫が見られる。	トピックの中から実現可能な具体的な研究内容は設定している。(標準)	トピックの中から具体的内容を設定しているが、漠然としたものである。	トピックの中から具体的内容を設定できていない。
先行研究	研究テーマの背景・リサーチクエスションに関連する文献・論文を確認できている。多角的に、賛成・反対両面の主張を確認できている。	研究テーマの背景・リサーチクエスションに関連する文献・論文を確認できている。	不十分ではあるが、テーマに関連する文献・論文を確認できている。	関連する文献・論文を確認できていない。
研究計画	研究の全体像を理解しており、研究項目(先行研究収集・分析・調査)の見通しがある。	研究の全体像をある程度理解している。必要な研究項目に対してある程度の見通しがある。	研究項目があいまいで、研究の全体像が見えにくい。	研究項目の計画がない。
調査	観察・ドキュメント・インタビュー・アンケート等の具体的な調査を自分の研究に関連付けて計画し、対象・期間・内容も想定できている。	具体的な調査を計画し、対象・期間・内容もある程度想定している。	調査を計画しているが、対象・期間・内容については想定できていない。	調査計画がない。
思考の展開	トピックやクエスションについて、多面的・多角的に捉えることができ、視点を柔軟に変えることができる。	トピックやクエスションについて、ある程度多面的・多角的に捉えることができ、指導すれば視点を変えることができる。	トピックやクエスションについて、多面的・多角的に捉えようとしているが、理解が薄い。	トピックやクエスションについて、多面的・多角的に捉えることができていない。

レポート・課題研究論文評価におけるルーブリック				
	4	3	2	1
論理展開	客観性のあるデータに基づいて論理展開を明確にできている。内容は正確で間違いがない。	大方は客観性のあるデータに基づいて展開している。内容はほぼ正確であるが不正確なものも含まれる。	内容は大部分が正確であるが、客観性のないデータを利用しており、論理展開に矛盾が見られる。	データがなく論理展開が矛盾している。大切な情報が不足し、内容は間違っただけのものや不正確なものも含まれる。
文章表現	誤字・脱字がなく、適切な表現が使われている。文のつながりも明瞭で読みやすく、展開をスムーズに理解できる。	誤字・脱字はほとんどなく、適切な表現が使われている。文のつながりはある程度スムーズに理解でき読みやすい。	誤字・脱字がある。適切な表現が使われているが、文のつながりが不明瞭な箇所がある。	誤字・脱字が多く、表現が不適切な箇所がある。文のつながりも不明瞭で読みにくい。
書式・レイアウト	規定の書式設定に全て当てはまり、目次・脚注・出典・図表の整理も適切に行われている。	大方は規定の書式設定に当てはまる。目次・脚注・出典・図表の整理は、適切でない部分がある。	規定の書式設定と異なる部分が目立つ。目次・脚注・出典・図表の整理は、適切でない部分がある。	規定の書式設定と異なる。目次・脚注・出典・図表も整理されていない。
先行研究・調査・分析	5 つ以上先行研究を分析しており、そのうえで足を使った調査をしている。調査の手続き・分析も適切である。	3 つ以上先行研究を分析しており、そのうえで足を使った調査をしている。調査の手続き・分析は一部不明瞭な点もある。	1 つ以上先行研究を分析し、調査している。調査の手続き・分析は不明瞭な点もある。	文献による先行研究の分析がされておらず、調査も実施していない。

プレゼンテーションのルーブリック				
	4	3	2	1
内容の適切さ	十分に調べられており、必要な情報はすべて含まれている。内容はすべてテーマにそっており、正確で間違いがない。	調べた結果が見られ、一部不正確な情報があるものの、必要な情報は大方含まれている。内容の大半はテーマにそっている。	調べが不十分であり、いくつかの必要な情報が不足していたり、間違っていたりする。もしくは、テーマに沿っていない内容が目につく。	調べが不十分であり、間違っただけの情報も多い。内容はテーマの主要な部分を踏まえておらず、テーマにそっていない。
構成の論理性	情報は正しく分類され論理的に並べられている。内容を理解しやすい展開となっている。	大部分の情報は正しく分類され論理的に並べられている。内容を理解しやすいような展開を試みていることがわかる。	いくつかの情報は論理的に並べられている。しかし、分類が不適切で、関連が不明確な情報が半分程度見られる。	情報の並べ方に論理性が不足している。情報の分類がなされていない。
スライド・ポスターのわかりやすさ	文字の色、大きさ、全ての絵や図のレイアウトは適切でわかりやすく、発表内容の理解のために効果的である。	文字の色、大きさ、絵や図はおおよそわかりやすいが、更なる工夫の余地がある。内容に合わせたレイアウトはなされている。	文字の色、大きさ、絵や図はややわかりにくく、不足している部分も見られる。	文字の色、大きさ、絵や図がわかりにくく、不足が多い。発表内容の理解を助けていない。
発表技術	姿勢よく、落ち着いて堂々と発表している。聴衆に視線をむけ、自分の言葉で発表している。発表全体を通じて、十分な音量がある。	姿勢よく、聴衆に視線をむけているが、自分の言葉で伝えていない部分がある。発表時間の少なくとも 80%は、十分な音量がある。	姿勢に気が回らず、発表時間の半分程度は、聴衆に視線を向けていない。スクリプトに頼りがちで自分の言葉で伝えていない。発表時間の半分程度は、十分な音量がある。	姿勢が悪い。あるいは、発表中の聴衆に視線を向けていない。スクリプトに頼っている。しばしば音量が小さすぎて、全ての聴衆が聞き取れていない。

3 (2) -1 総合的な学習の時間：多文化共生（国際クラス第1学年・2単位）

目 的： 課題探究に向かう入門科目と位置づけ、思考や探究の「型」とともに問題解決に向かう道筋を意識させる。また、PBLで議論やプレゼンテーションを経験させ、コミュニケーション力やコラボレーション力の育成を図る。それらを通して海外研修への意欲を高める。



内 容： ワークショップやフィールドワークを織り交ぜながら、探究活動の基礎となる思考・知識・技術について習得させる。特に、各課題における問題の背景や構造等を多面的に理解することや多様性の認識と共感を育むことに留意して実施した。

また、本年度は新たに愛知県庁多文化共生推進室との連携授業を行った。これは昨年度の2年生が実施したものを受け継いでおり、『あいち多文化共生推進プラン2022』に基づき多文化共生を進めるための取り組みを考え、発表を行った。データや証言に基づき、多面的に問題を捉え、課題を発見しその解決策の提案を行った。

区 分	内 容
アカデミックスキルズ	(1) アイデア・思考の出し方：ブレインストーミング (2) アイデア・思考の整理の仕方：マインドマップ (3) 情報のまとめ方：レジューメ作成、新聞記事スクラップと要約 (4) 発表の仕方・プレゼンテーションの構成の考え方
多文化共生プログラム	(1) マインドマップによる自己理解 (2) 他者紹介記事「この人」作成 (3) テキスト「現代を知る」による現代の諸課題の学習 (4) 多文化理解ワークショップ（「レバ・アンブラー」、「貿易ゲーム」）
フィールドワーク	(1) JICA 中部 (2) 必要に応じて個別に実施
愛知県庁×名城高校♪多文化共生セッション	愛知県多文化共生推進室と協働で講義や意見交換、ワークショップ等を実施（計5回） (1) 『愛知県の外国人県民の状況と県の取組』 (2) 『外国人支援者や当事者との意見交換』 (3) 「多文化共生を進めるための取組」プランを作成 (4) 中間発表、愛知県職員から助言をもらう (5) 成果発表（副知事の視察および一般公開）副知事より講評をもらう
南山大学連携講座	南山大学人類学博物館（黒沢浩教授）との連携授業を実施（計4回） 論理的思考力の育成：博物館資料から情報を読み解く
ニュージーランド研修プログラム	(1) ニュージーランド研究発表（「English Presentation」と連携） (2) 現地調査 (3) 調査レポート作成・プレゼンテーション

成 果： 平成31年1月に実施した「5S5M等の各因子における向上実感調査」から、本授業の目的にある「コミュ・コラボ」の項目と、昨年度に引き続き、一昨年度に課題とした「思考力」と「多様性」因子（第3年次の研究報告書 p.21 を参照）を検証した（図1）。

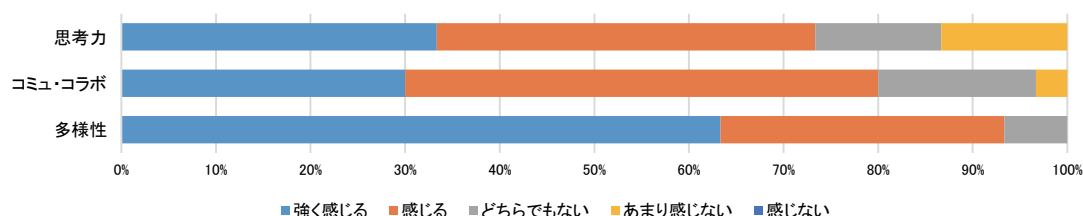


図1 「思考力」「コミュ・コラボ」「多様性」因子における向上実感（n=34）

各項目において、「強く感じる」「感じる」と答えた生徒は、「思考力」で73%（昨年度65%）、「コミュ・コラボ」で80%（65%）、「多様性」で93%（74%）であった。昨年度と比較すると、どの因子に関しても大幅に向上している。

こうした向上実感の要因についてどのように捉えているかについても調査すべく、図1において「強く感じる」もしくは「感じる」と答えた生徒に、その回答を導くことになった要素を複数選択で聞いた（図2）。

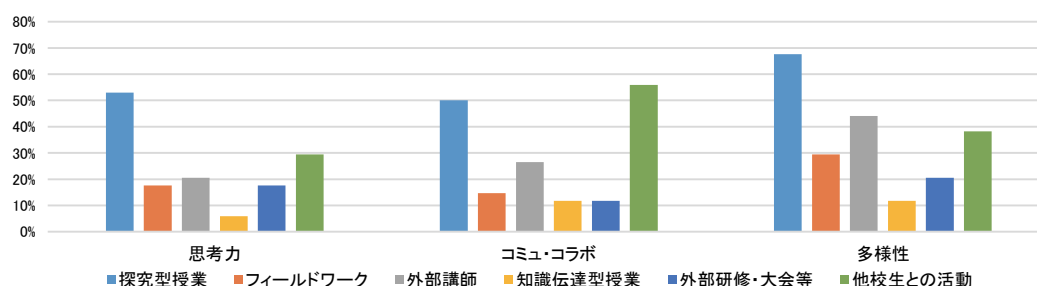


図2 各因子の向上実感に影響したと考える要素（ $n=34$ 複数回答）

結果、どの因子においても「探究型授業」の回答は多く、「探究型授業」に当てはまる本科目はある程度の成果があると考えられる。また、実施内容の表にもあるように、JICA 中部への「フィールドワーク」や、「外部講師」を迎えての授業も「多文化共生」の授業で実施しているため、それらも関連しての選択となっていると考える。

昨年度の課題として、連携授業の回数見直しと効果的な指導内容が挙げられていた。本年度は、1 学期はテキスト学習や多文化理解ワークショップ、JICA 中部へのフィールドワークを通じて現代社会の現状と課題を概観し、2 学期にはローカルに視点を切り替え、愛知県の多文化共生の現状を考えることで、世界的な問題と地域の問題を横断的に捉えることができる視点を養う授業展開とした。3 学期はニュージーランドへの海外研修を見据え、南山大学との連携授業や現地調査計画の作成を通し、ものの見方・フィールドワークの手法を学んだ。1 年間を通して「課題探究」へ向かう入門科目としての目的を達成することができた。

5 年間の教師生徒の変化：

5 年間で約 10 名の教員が担当者として授業に関わった。科目の特性上、講師の招聘や連携授業の計画・実施など外部との折衝が欠かせない。この授業を通して得た繋がりを他の事業・授業にも活かすことができるなど、大きな財産となった。

生徒の変化としては、この授業は探究活動の基礎的な知識・技能を身につけることを目標としてきたが、年度を追うごとに授業内容も精査され、生徒の学びも確実なものとなってきた。本授業の目的である「コミュ・コラボ」の向上実感を直近の 3 年間で比較すると、平成 28 年度 74.0%、平成 29 年度 69.6%、平成 30 年度 80.0%と概ね 7 割強の生徒が「感じる」「強く感じる」と答えている。また、平成 28 年度からの留意事項である「多様性」については平成 28 年度 54.0%、平成 29 年度 73.9%、平成 30 年度 93%の生徒が「感じる」「強く感じる」と答えた。これらの向上実感からも、生徒の学びが確実なものとなってきたことがうかがえる。

今後に向けた改善点：

昨年度課題として挙げられた連携授業の回数の見直しに取り組んだ結果、全体的な向上実感の上昇が見られ、その成果を得ることができたと考える。一方で、第 2 学年で行う「課題探究」やグローバルフィールドワークとの連続性については、まだ十分な成果が得られていないと考える。特に 3 学期以降の指導内容は第 2 学年へ直結するため、より効果的な指導内容となるよう更なる検討が求められる。

3 (2) -2 総合的な学習の時間：課題探究（国際クラス第2学年・2単位）

目的： 広く問題意識を持ちながら課題について理解を深め、当事者意識を持って探究活動を行うことを目的とする。また、議論を通して、他者との摩擦に対する耐性及びリーダーシップを育み、調査や有識者からの講義を通して、論理的思考力を育むことを目指す。



内容： 「多文化共生」の上位科目として個人研究活動の導入を行うとともに、国内外のフィールドワークを支える。第3学年と合同ゼミの形式をとっているが、研究課題についての理解を深めるため、適宜第3学年とは別の講義やワークショップを行う。また、昨年度の課題であった、論文執筆を早めることにより、研究内容の検討が不十分であった点を改善し、本年度は、A4で4ページ程度の研究の要旨とスライドを使ったアウトラインを作成することにとどめた。それにより、各ゼミでより内容に踏み込んだ検討と整理を行った。

区 分	内 容
ニュージーランド研修プログラム	第1学年3月のニュージーランド研修を踏まえ、ポスターやレジュメ等を作成
台湾・インドネシア研修プログラム	(1) 台湾・インドネシア地域研究 (2) 現地講義受講 (3) プレゼン作成（選抜生徒が Meijo Global Festa・生徒研究発表会において発表）
研究者講義	(1) 名城大学経営学部 田中武憲教授 台湾研修についての事前学習 (2) 立命館大学国際関係学部 井澤友美助教 インドネシア研修についての事前研修
課題研究論文	(1) 課題研究のガイドライン (2) リサーチトピック作成 (3) 先行研究分析 (4) アウトラインの設定 (5) 調査手法の検討 (6) 各自フィールドワークの実施 (7) 研究内容のレジュメ作成 (8) ディスカッション

成果： 1月に実施した「5S5M等の各因子における向上実感と要因」について尋ねるアンケート調査より、本授業の目的にある「思考力」「失敗耐性」「リーダーシップ」の3項目について分析を行った。結果、向上実感を「強く感じる」もしくは「感じる」と答えた生徒は、それぞれ59%、32%、64%であった（図1）。

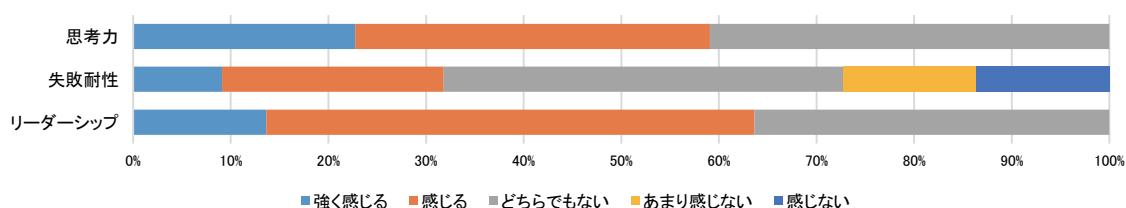


図1 「思考力」「失敗耐性」「リーダーシップ」因子における向上実感（ $n=23$ ）

それらの向上実感の高群（「強く感じる」もしくは「感じる」）を選択した生徒に、その回答を導くことになった要素を尋ねたところ、「思考力」においては探究型授業が影響したと答える生徒が圧倒的に多く（92%）、海外研修や外部研修・大会、他校生徒の活動においても影響を受けている様子が見られた。一方、「失敗耐性」については海外研修やフィールドワーク等、校外で社会人と対面する機会が影響することが見て取れる。「リーダーシップ」は海外研修に加えて他校生徒の活動との回答が多く、海外研修での市内調査や日直制度、Meijo Global Festaでのグループディスカッション等で他校生徒と協働するなかで向上したと考えられる（図2）。

探究活動や海外研修、フィールドワークは本授業の中心となる内容であり、その延長に、外部研修や大会、他校生徒の活動がある。それらを合わせた要素の値は、総じて高いことから、本授業は一定の成果をあげているといえる。

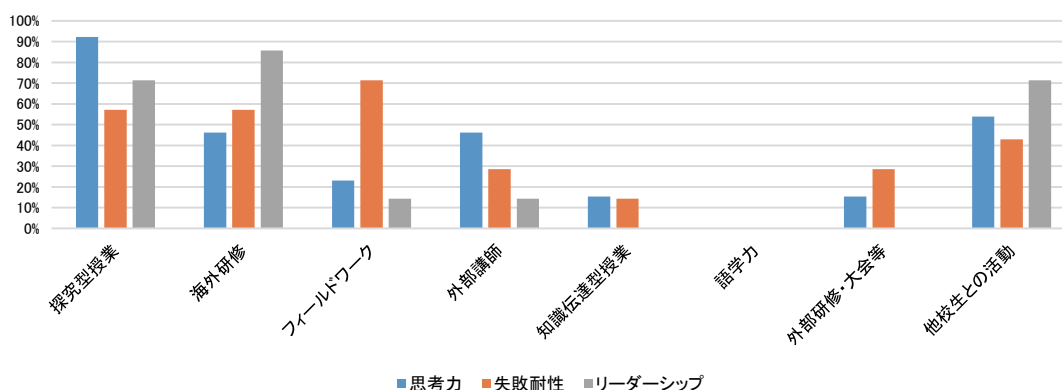


図2 各因子の向上実感に影響したと考える要素 (n=23 複数回答)

5年間の教師生徒の変化：

大きな変化として、第3学年とのゼミ形式による合同授業を実施するようになったことが挙げられる。これにより、ロールモデルが身近にいることになり、どの時期にどのようなことをすればいいのかを生徒たちが把握しやすくなった。また、研究を進める上で必要なフィールドワークに赴く回数が増えてきている。国際クラスの生徒が実施したフィールドワーク件数は、平成27年度は35件（うち第2学年は5件）、平成28年度は56件（うち第2学年は2件）、平成29年度は65件（うち第2学年は46件）、平成30年度は71件（うち第2学年は62件）であった。この状況から、生徒たちはより強い当事者意識をもって探究活動に取り組むことができている。さらに、年度をまたいで担当者間でフィールドワーク先の情報やネットワークを共有することで、年々、研究内容の広がりが出てきている。

今後に向けた改善点：

第2・第3学年で合同のゼミを組織し、上級生からの指導を生かした学びの場を目指していたが、テーマの設定に時間がかかり、第3学年との協働がうまくできない面があった。次年度は、スケジュールを再考し、担当教員の役割分担を明確にして取り組む。

また、アンケート項目の作成やインタビューの技法など、フィールドワーク実施時に必要となるスキルの習得に生徒間でばらつきが大きかった。授業内で指導していても、身につけていないことが見受けられたため、それらのスキルが定着するような、段階的・体系的な指導を検討しなおすとともに、生徒同士の教え合い、学び合いの機会を創出する。

3 (2) -3 総合的な学習の時間：課題探究（国際クラス第3学年・4単位）

目 的： 課題研究論文を作成し、その社会課題の解決に向かって周囲に働きかけながら、解決に向けたアクションを模索することを目的とする。その結果、論理力や表現力が鍛えられるとともに、問題解決能力の伸長が見込まれる。



内 容： 先行研究の分析とフィールドワークを通じた調査を行い、自らが設定した研究課題について研究を進める。研究成果は 10,000 字程度の研究論文として執筆し、本校主催の Meijo Global Festa や生徒研究発表会等で発表する。

区 分	内 容
ガイダンス	作文と論文の違いを知る
リサーチトピックの設定	(1) 問題意識・問題の焦点を設定する (2) 問題の背景（先行研究を踏まえる）を考える (3) 調査の重要性を知る (4) 分析の方法を学ぶ・なぜその方法で分析するのかを検討する
先行研究分析	(1) 図書館を使いこなす (2) 情報検索ツールを使う
アウトラインの設定	研究の手順、方向を描く
調査手法の検討	調査の手法・分析方法を検討する
課題研究論文執筆 スライド作成	(1) 10,000 字程度の論文を作成する (2) 表紙・目次・引用等の書式を整えて提出する (3) 英語によるレジュメ・スライド・ポスターを作成する
課題研究発表会	(1) 日本語・・・平成 30 年 7 月 2 日（月） (2) 英語・・・平成 30 年 11 月 1 日（木）

成 果： 一昨年度より大きな成果を上げたゼミ形式を継続し、4 単位中 2 単位を国際クラス第 2 学年と合同で実施することにより、研究の継続性を担保した。全員が調査をもとに個人研究を行い、課題研究論文を執筆、英語でのレジュメ、スライド、ポスターを作成し、日本語と英語でそれぞれ発表した。レジュメ、スライド、ポスターに関しては、日本語で作成したものを単純に英語に翻訳するのではなく、英語で考えて構成するという目的の下に、全て英語で作成した。

本年度は、前年に執筆した論文をブラッシュアップし、それをもとにポスターやプレゼンテーションを作成し、国内外の大会等で成果を発表した（Global Link Singapore 2018, 移民政策学会、グローバル人材育成教育学会など）。

3 年間の課題研究活動を通して「思考力」「コミュ・コラボ」「発見・解決」「探究意欲」「グローバルなキャリア」についてみると、全ての項目とも意欲が高い生徒の割合が顕著であった（図 1）。

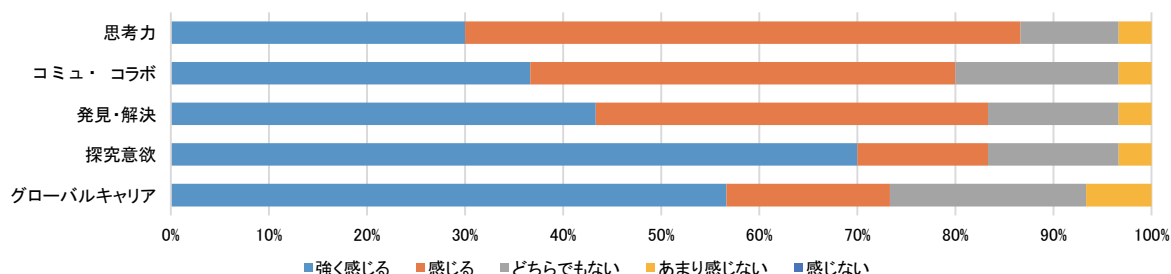


図 1 各因子における向上実感 (n = 30)

また各因子の向上実感に影響したと考えられる要素をたずねたところ、「探究型授業」「海外研修」「フィールドワーク」が高い値を示した。これらは探究活動の一環となる要素であり、探究活動がこれらの向上実感に影響したといえる（図 2）。

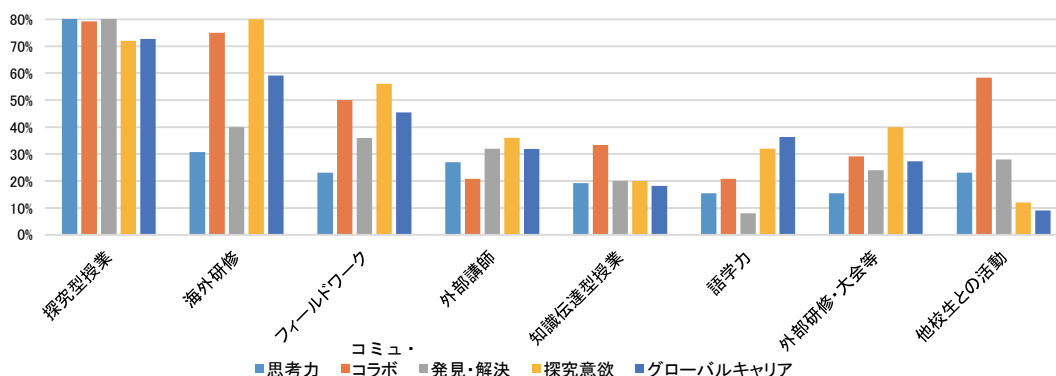


図 2 各因子の向上実感に影響したと考える要素 (n = 30 複数回答)

5 年間の教師生徒の変化 :

平成 28 年度より第 2 学年とのゼミ形式による合同授業を実施していることもあり、ゼミ形式導入前に比べると、担当教員数が 5 名から 8～9 名に増えた (表 1)。

表 1 「課題探究」(国際クラス第 3 学年)の担当教員教員

H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度
5名	5名	9名	9名	8名

また大きな変化として、課題探究に取り組む時期を第 3 学年から、第 2 学年に早めた。平成 28 年度までは第 3 学年の間に研究を完成させていたが、平成 29 年度は第 2 学年で研究を始め第 3 学年 1 学期終了時まで論文を書き上げた。それ以降は第 2 学年修了時に研究の大筋となるアウトラインを固め、ポスターやスライドや論文にまとめるというスタイルに変化した。研究に取り組む時期を早めたことにより、成果を外部で発表する機会を多く得ることができたこと、自分の研究を進路選択やキャリア設計に反映させられることができるようになったことが生徒に関する変化と考えられる。

図 2 に関連して、「思考力」「コミュ・コラボ」「発見・解決」「探究意欲」「グローバルなキャリア」の各因子において「探究型授業」が向上実感に貢献したと答えた第 3 学年の生徒の割合を、過去 3 年を遡ってまとめた (図 3)。年度により多少のばらつきがあるものの、課題探究で行う「探究型授業」が一定の成果をあげたことが見て取れる。

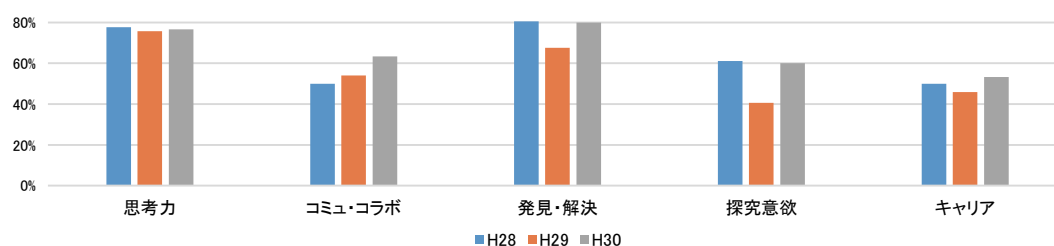


図 3 各因子の向上実感に「探究型授業」をあげた生徒の比率 (国際クラス第 3 学年における変化)

今後に向けた改善点 :

例年課題としてきた、①複式授業で実施するゼミをより効果的に運営し、上級生と下級生の協働学習をより発展させること、②生徒一人ひとりの研究活動を深められるよう、効果的な指導内容・手順を策定すること、③どの教員でも担当できる形にシラバスを整備することのうち、②・③に関してはまだまだ体系化の思索段階である。国際クラスでは SGH 指定の 5 年間で一定の成果をあげられたが、複数のクラスでより多くの生徒が課題探究に取り組むには、これらが問題点といえる。

3 (2) -4 総合的な学習の時間：探究基礎（一般進学クラス第1学年・1単位）

目 的： 探究型学習のエッセンスを広く知る科目である。探究の基礎を支える、話す・聞く・書く・読む等のベーススキルを、新聞等を利用して学ぶ。生涯にわたって学び続けるために、主体的な行動力とメディアリテラシーを身につけて、考える力を育むことを目指す。その結果、論理的思考力やコミュニケーション力をつけるとともに、多様な価値観を知ることが期待される。



内 容： 9クラスを2分割し、5クラスと4クラスそれぞれ合同で以下の内容を実施した。

区 分	内 容
考える・書く	マインドマップを用いて自己紹介を作成する。講演者へのお礼の手紙を書く
話す・聞く	他者紹介文を作成する マインドマップを利用して「この人（インタビュー記事）」を作成する
情報を集める	新聞から考える：興味、関心に沿った記事を集める
情報を深める	新聞から考える：集めた記事の中から研究テーマを選ぶ
まとめる・整理する	新聞から考える：新聞切り抜き作品を作成する（2回）
発表する	新聞から考える：切り抜き作品の内容をプレゼンテーションする
将来を考える1	職業について考える：新聞記事を利用し、ワークシートを作成した上で発表する
将来を考える2	講演「キャリアと私 働く上で大切なこと」を傾聴する（4回）
将来を考える3	「15年後の自分」：新聞記事から将来及び将来の自分を想像し可視化していく

成 果： 新聞切り抜き作品は、各自が9月と1月の計2回作成したが、それらの作品の内容を比較したところ、9月は、社会的な問題について探究するというよりは、各々の興味・関心のある出来事を列挙したもの、直近の出来事を題材にしたものが目立った。しかし、1月の作品では事前にSDGsについて触れたうえで、その17のゴールをシールにしたものを配布した。そして、選んだ記事に関連すると思われるシールを貼らせた。そうすることにより、興味・関心という枠を超えて、「日本の外国人労働者の抱える課題」「再生可能エネルギー」「入管法改正案」等、より社会的な問題について探究したものが増加した。到達目標と年限が決められているSDGsの視点を持つことにより、個々の記事内容に対する様々な見解、記事内容から派生する事柄について、他人事ではなく自分に関わるものとして考えを多少なりとも表現することができるようになってきたと考えられる。



Mさん（9月作成作品事例）



Mさん（1月作成作品事例）

また、社会人講話、インタビュー記事「この人」作成、新聞を利用した「職業研究」を通じてコミュニケーション能力の大切さと積極的に動くことによって道を切り開くことに対するマインドセットへの働きかけができるようになった。さらに、マインドマップを利用した「自己紹介」、「15年後の自分」の作成や、新聞を利用した発表を通じて、コミュニケーションの基礎となる“自分自身を知る”こと、“多様な価値観を認め合う”姿勢も徐々に定着してきた。

5 年間の教師生徒の変化：

本科目は以前展開していた「SSI」という探究系の授業を発展させた科目であり本年度で3年目となる。外部講師の講演機会があることから学年全体を2グループに分けて、担任の他、探究系の授業経験が豊富な教員が中心となり展開してきた。それによりややもすれば、他の教員が他力本願的になる部分が散見された。しかし、ホームルーム単位で実施できることを少しずつ増やしていき、授業展開の中で、教員の主体性にある程度委ねる範囲を広げていったところ、自分なりの解釈を加えて生徒に提示できる場面が増えていった。

生徒については5年で劇的な変化があったと言うことは難しいが、本年度のSGTでは「思考力」「ICT」「発信・行動」が向上し、「キャリア」は低下しており、 t 検定をした結果も有意な差であった(図1)。向上した項目からは、この授業が一定の成果を表していることが垣間見られる。一方、気になるのは将来に対して前向きになり切れない生徒の割合が高いことである。また個別の質問を見ると、他者とのかかわりについて積極的になれない生徒の割合も比較的高い。これらは探究的な活動を進める上で欠かせないマインドセットであるが、授業を通じてそのようなマインドを作り出すことの難しさを改めて実感した。

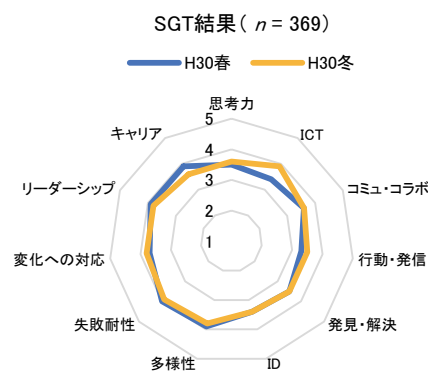


図1 各因子の変化

今後に向けた改善点： 1 単位の授業では、本科目の目的にある「探究型学習のエッセンスを広く知る」という段階に到達させるのは難しい。他教科と連携しながら、話す・聞く・書く・読む等の探究のベーススキルを高めていくことが必要である。また、キャリア意識を育むためには、ホームルーム活動との連携が必要である。

3 (2) -5 総合的な学習の時間：グローバル概論（一般進学クラス文系第2学年・2単位）

目 的： 幅広い教養の習得と課題探究力、プレゼンテーション力、コミュニケーション力の向上を目的とする。現実に行っている世界的な諸課題を有識者から直接聞くことで、当事者意識や主体性を高める。一般進学クラス文系（以下、一般進学クラス）の生徒を対象に実施することで、SGH の取り組みを校内に普及させる。



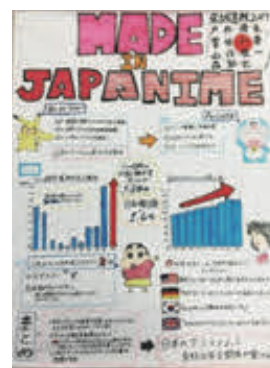
内 容： 主に次の2点を中心に探究活動を実施した。①現実に行っている世界的な諸問題を日本国内から、または国外からの視点で考察し、探究活動を行い、ポスターにまとめてプレゼンテーションを行う。②研究者や専門家などから講義を受け、グローバル課題について学ぶ。以下②にあたる内容について記す。

外部講師 一覧	
アーナンダクマール氏（名城大学外国語学部教授）	外国人から見た日本とその現状、日本人の学習姿勢
藤原 康弘氏（名城大学外国語学部准教授）	「グローバル時代」の英語を考えよう
伊川 正樹氏（名城大学法学部教授）	課題を見つけ、調べ、まとめ、発表すること
洪井 康弘氏（名城大学経済学部教授）	グローバル化と共感の輪
黒沢 浩氏（南山大学人文学部教授）	南山大学人類学博物館ワークショップ
JICA 中部	JICA 中部 なごや地球ひろばプログラム
Sarah Qureshi 氏（名古屋モスク）	イスラーム文化を知る
近藤 千華氏（UNDP 駐日代表事務所）	SDGs、アフリカ開発と TICAD、国連機関でのキャリアについて

成 果： ①については、『現代を知る plus』（第一学習社）を参考にして、社会における課題について問題意識を持ち、解決策をグループで検討した。さらに本年度は修学旅行先の1つである立命館アジア太平洋大学において Global village for students プログラムを企画し、ポスターセッション、留学生との交流活動を想定していたため「One of the most valuable things in Japan」というテーマでポスター作成、プレゼンテーションを行った。校内においては日本語でのプレゼンテーションを行ったが、立命館アジア太平洋大学では留学生に対して説明をするため、英語でプレゼンテーションを実施した。英語が苦手な生徒でも、プログラムを実施する中で徐々に円滑なプレゼンテーションができるようになっていった。



②については、名城大学連携講座を中心に、多様な分野の外部講師を招聘することができ、また校内だけでなく南山大学や JICA 中部などへの校外学習を実施できた。特に名古屋モスクの Sarah 氏の講演は事前学習として、地歴公民分野の学習を再確認していたこともあり、宗教、文化、日本文化との違いなどが非常に理解しやすく、生徒の異文化に対するイメージを変えたと思われる。そして UNDP 駐日代表事務所の近藤千華氏の講演では、直前に JICA 中部へ訪問し、SDGs について理解を深め、海外ボランティアの体験談を聞いていたため、今まで SDGs のことを知っていた生徒でも、アフリカにおいて具体的にどんな活動がなされているのかを深く学ぶことができた。どの講演、施設においても大変貴重な体験をすることができ、今後の探究活動やキャリアについて考えさせる良い機会となった。



5 年間の教師生徒の変化：

本科目は「総合的な学習の時間」を利用した探究型授業であり本年度で 3 年目となる。普通科文系クラス 3 クラスがまとまって授業を受ける唯一の時間である。昨年度は SGH 甲子園への参加が大きな目標にあった為にポスター作成に多くの時間を費やしたが、本年度は名城大学連携講座として名城大学の教員を始めとする外部講師による講演を積極的に取り入れた。そのことによって本校の教員にとっては講演者とのつながりができ、また講演を生徒と共に聴講することにより担当教科以外の知識が深まったと思われる。特に修学旅行のプログラムの 1 つである立命館アジア太平洋大学における活動は、日々の生徒の様子とは異なった様子を見ることができ、生徒の意外な側面も観察することができた。

生徒については、この 5 年間で徐々にではあるが自らグローバル課題を考え、積極的に取り組む生徒が現れ、ある生徒はグローバルサロンを継続して受け、授業外で JICA 中部の研修を受けることで刺激を受け、SDGs について仲間と共に同好会設立まで考えるに至った。一方でいまだに、その意義を捉えきれずに何となく作業をする生徒も少なからず見受けられたことが課題である。昨年度の「探究基礎」において個人活動を中心に行っていたが、2 年生ではグループでの活動にシフトしていった。グループ内でリーダーシップを発揮し、他人の意見を取り入れることは大切な事ではあるが、まだ成長過程である生徒にとっては難しいと感じる場面があったようだ。

これらの活動を通して、これまであまり探究活動に積極的でなかった生徒たちも、意欲を示しつつあることがわかる（図 1）。特に昨年度の結果（図 2）と比較すると、一部に「高くない」と答える生徒はいるものの、総じて意欲が向上している様子がわかる。

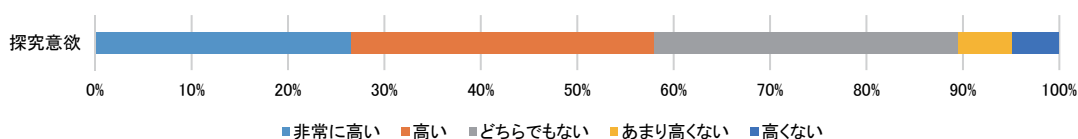


図 1 次年度以降の探究活動に対する意欲 (H30 年度 一般進学クラス第 2 学年 (n = 127))

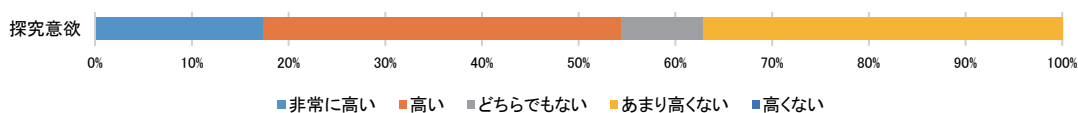


図 2 次年度以降の探究活動に対する意欲 (H29 年度 一般進学クラス第 2 学年 (n = 115))

今後に向けた改善点： グローバル概論は、3 年目の活動であり、昨年度の反省を踏まえて若干方法を変更して実施しているため、SGT の結果や生徒の変容を昨年度の結果と単純に比較することはできない。本年度の結果については次年度以降の実施状況を合わせて改めて考える必要がある。

また、当該クラスにおける第 3 学年での探究活動は、総合的な学習の時間「課題探究」(2 単位)であり、個人で探究活動を行いレポートにまとめる計画である。当該授業は「地歴演習」との選択科目として実施するが、「課題探究」を選択した生徒は 31 名であり、昨年度の 25 名と比較して微増となった。これは授業内容の変更の結果、探究活動に対する関心を高められた成果であると考えられる。「課題探究」を選択しなかった理由としては、昨年度同様に「地歴の学習が不十分のためや、他の受験生と学力差がつくことが心配。」との声が聞かれたが、改めて探究型学習の意義と進学における有用性について理解を深めることが求められる。

3 (2) -6 総合的な学習の時間：課題探究（一般進学クラス文系第3学年・2単位）

目 的： 課題研究レポートを作成し、周囲に働きかけながらその社会課題の解決に向けたアクションを模索することを目的とする。その結果、論理力や表現力が鍛えられるとともに、課題解決能力の伸長が見込まれる。



プレゼンテーションの様子

内 容： 第2学年で実施したグローバル概論の内容を、更に発展させる位置付けとして、個人研究を行う。類似した研究分野の生徒同士で話し合いながら、仮説を立てた上で現地調査を行う。研究成果は10,000字程度にまとめ、本校主催のMeijo Global Festaや生徒研究発表会等に参加する。テキストは『課題研究メソッド』（啓林館）を使用。活動計画を作成し授業を進めた。

区 分	内 容
ガイダンス	課題探究とは何か、テキストや先輩の論文を読み考える
リサーチトピックの設定	(1) 問題意識・問題の焦点を設定する (2) 問題の背景（先行研究を踏まえる）を考える (3) 新聞からの研究題材収集 (4) インターネットからの研究題材収集
先行研究分析	(1) トピックに関連する研究内容の横断的分析 (2) 情報検索ツールを使う
アウトラインの設定	論文作成の手順、方向を描く
内容共有	(1) 類似したトピックグループの作成・情報共有 (2) 全体での内容共有
課題研究論文執筆 スライド作成	(1) 10,000字程度の論文作成 (2) トピックが視覚からわかるポンチ絵の作成 (3) 表紙・目次・引用等の書式を整えて提出 (4) レジюме・スライドの作成
平成31年2月22日（金） 生徒研究発表会	

成 果： 本科目は、「グローバル概論」の上位科目として設定された選択科目であり、2年目の取り組みとなる。希望制で選択するが、前年度の選択者が全体の約7%であったのに対し、本年度は約22%の生徒が受講を希望した。このことは、グローバル概論や本科目等で行う、探究活動に興味を持つ生徒が増えてきたことを意味し、SGH活動が一般進学クラス文系にも普及した成果と考えられる。

本年度も個人研究を基本として行ったが、新たな取り組みとしては、論文の内容が一目でわかるようポンチ絵（図1、2）を作成させることを徹底した。このようにモデル化することで、研究を行う生徒自身も探究内容を整理することができ、発表においても内容をよりわかりやすく説明できるようになった。

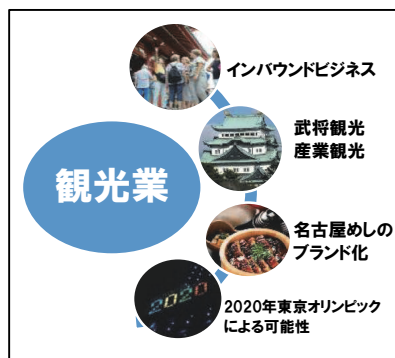


図1 産業構造の変化と経済成長(Aさん) 図2 愛知県におけるインバウンド観光の現状と課題(Uさん)

また、研究課題についての現地調査を積極的に行った。例えば、2020年東京オリンピック開催に伴い、外国人観光客が増加すると考えた生徒は、電車などの公共交通機関の言語表記に注目した。東京等にも調査に訪れ、駅の言語表記を確認し、そのわかりやすさについて街頭インタビューを行った。

ある生徒は、「外国人観光客を増やすには」という内容で研究を進めており、外国人の日本旅館の利用数が少ないことに着目し、東京の旅館で外国人観光客が大勢宿泊する「澤の屋」を訪れインタビューを行った。このように、論文を作成するにあたって、自ら積極的にフィールドワークに出向いていた。

これらの研究論文の中で、特に優れたものはサマリーを作成し、2月に行われた生徒研究発表会で成果を披露した。

また、SGTの結果からも、有意差は出なかったものの、本年度特に力を入れて取り組んだ、フィールドワークや発表活動に関わる「行動・発信」因子（+0.2）や、探究活動の姿勢に関わる「発見・解決」の因子（+0.2）の伸長が見られる（図3）。

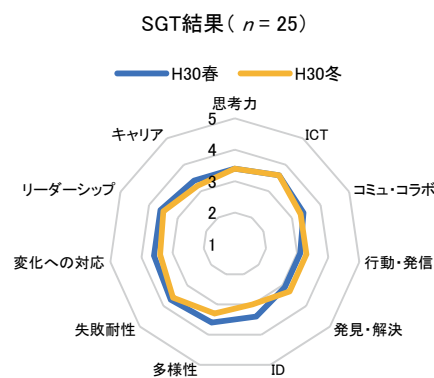


図3 各因子の変化

5年間の教師生徒の変化：

生徒25人に対して教員2人で指導に当たるため、一人ひとりの生徒に対してきめ細かく対応することができた。また、生徒の論文作成に向けての進捗状況や共通の問題点を確認して、教員間で話し合い、全体での指導を的確に行うことができた。このような生徒の理解・進捗分析をしながら教員間で協議し連携をもって授業を構築していく経験は貴重である。本科目は2年目ではあるが、国際クラスの「課題探究」の流れを汲んで、生徒と教員、教員と教員がコミュニケーションをとるなかで指導を進めており、教員の授業に対する意識やスキルを向上させる契機となっている。

生徒も、第2学年でのグローバル概論で探究意欲を高めた生徒が、継続して課題探究を履修したことで、活動的にフィールドワークに参加し、主体性を伸ばすことができた。

今後に向けた改善点：

昨年度に挙げた、インターネットによる知識・情報の収集だけでなく、先行研究やフィールドワークから得る知識を増やすという課題は、改善されつつある。今後は、それらを論理的に分析する力を養う指導を継続する必要がある。

文系クラス単独で本授業を展開するのは初の試みであり、国際クラスでの「課題探究」を参考にしながら授業を行ったが、今後は、文系クラス独自の授業の枠組みを考えることで、文系クラス生徒により適合した展開ができると考える。

また、一般進学クラスの探究活動である、第1学年の「探究基礎」、第2学年の「グローバル概論」と本科目の担当者で3年間を見通した内容の構成を検討することで、次年度以降の担当者にも引継ぎやすくなり、探究活動の深化・定着が期待できる。

3 (3) 海外研修

本年度のグローバルプログラム（海外研修）は3回行った。

第1学年の「グローバルレクチャー」、第2学年の「グローバルフィールドワーク」、全校から選抜で行う「グローバルアクション」である。第1学年の「グローバルレクチャー」は3月に実施しており、本報告書への記載が間に合わないため、昨年度の3月に実施したものを記載する。

本年度末に行った向上実感調査において、海外研修が各因子の向上実感に影響を与えた割合を調査したところ、特に第2学年において高い結果が出ており（図1）、海外研修の時期から第2学年の方がより強くその影響を感じていることがわかる。また、両学年とも探究活動や進路選択において重要な要素となっていることがうかがえる。

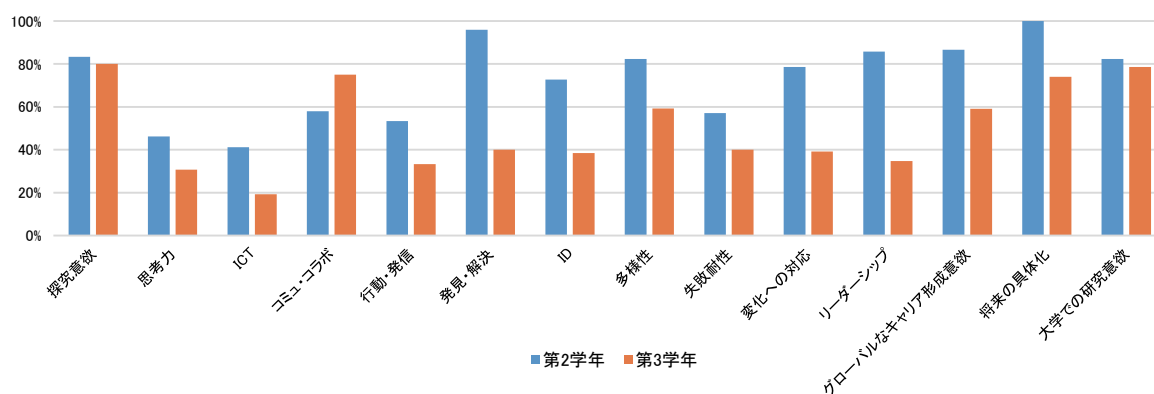


図1 海外研修が各因子の向上実感に影響を与えた割合

グローバルプログラム（海外研修）の目的：

本校が目指すグローバルリーダー像は「地球に生きる一市民として、社会や世界の諸問題を当事者としての意識をもって捉え、他者との協働を通して解決に向かう意欲あふれる人材」とし、グローバルシチズンシップ（地球市民性）をもって行動する人物を想定している。

その育成のために、①世界の現状と課題に触れる経験、②海外の同世代と対話・議論する経験、③ネットワークを構築する経験の3点を重視して研究開発を行っている。

「グローバルレクチャー」は、上記3点のうち、①を主に担う。また、海外に身を置くことで自らの壁を破り、グローバルな視野をもって自己を客観視すること、異文化との相違点や共通点を知り自己のアイデンティティを再確認することも目的とする。

「グローバルフィールドワーク」は、①②とともに各自の研究課題に関連する分野において学習を深め、調査を実施することを目指す。

「グローバルアクション」としては、②③を主眼として、探究活動の成果を公表することを目指す。

実施の流れ：

計画は本実施をはさんで事前及び事後学習を一連の取り組みとして構成し、「総合的な学習の時間」及び教科「グローバル」の授業を中心に、グローバルサロンや自主学習も併せて実施する。事前学習では、現地の歴史・産業等の概要、現地での調査テーマ、日本と当該国の関係等について学習し、レポートやワークシートを作成する。また、現地での訪問先には事前に質問事項を送付するとともに、現地で行う行動計画を作成して準備する。

本実施では、現地で体験的に学ぶことによって、各課題を多面的に理解できるよう設計する。

事後学習では、ポスターやレポートを作成し発表する等、研修内容を振り返る機会をつくる。また、学校全体への普及の観点から、Meijo Global Festaや生徒研究発表会等にて研修成果を発表する。

3 (3) -1 ニュージーランド研修「グローバルレクチャー」

研修の特色： 当該国は、先住民マオリと移民の歴史や、周辺の島国やアジア各地から多様な民族が集まる近年の状況から、エスニックダイバーシティを確立しつつある国である。また、世界で最も早く女性の参政権を認め、女性の社会参加率・活動率も高い。現地では、主に多様な雇用・多文化共生・日系企業の海外進出・ソーシャルビジネスについて学習する。

対 象： 国際クラス第1学年 23名 14泊15日

実施時期： 平成30年3月17日（土）～3月31日（土）

費用（概算）： 1名につき約40万円（修学旅行費用を含める）

内 容：

区 分	場 所	内 容
事前学習	本 校	・ニュージーランド概要について調査・発表 （英語発表はEnglish Presentationで実施） ・研修先に関するテーマ学習
現地研修	ウェリントン	・現地講師による学習活動 「NZの歴史・文化」「NZの協働・共生」 「グローバルビジネスと地域」「ニュージーランドの企業活動と社会貢献」 ・国立博物館 Te Papa 訪問 フィールドワーク ・三菱自動車訪問 NZ法人社長 Warren Brown氏による講義 ・ウェリントン市役所職員 Michelle McCartney氏による講義 ・ビクトリア大学訪問 国際ビジネス研究所 Jason Young氏による講義 ・ソーシャルビジネス Hana Craig氏による講義
事後学習	本 校	・ポスター作成・発表

国立博物館「ニュージーランドの歴史と現代社会」

先住民族マオリの歴史・文化を知り、現代社会において多民族がどのように共生を果たしているのかについて、多様な資料を見ながら理解を深めた。また、先住民族マオリとイギリス王権の間で結ばれたワイタング条約についての展示もあり、条約締結の背景やそれぞれの立場から見た条約の内容を学ぶことができた。

共生・協働「NZにおけるエスニックダイバーシティと働き方」

ウェリントン市役所で働いている Michelle McCartney 氏から、現代のウェリントン市の国際ビジネスの状況と共に、多民族の協働・共生や女性の働き方をめぐる問題についての講義を受けた。生徒からは、特に働き方についての質問が多くなされたが、日本で働いていた経験を踏まえて、日本とニュージーランドの働き方の違いについても答えてもらうことができた。

日系企業の海外進出「三菱自動車のNZにおける展開」

ニュージーランドに進出する際の経緯と販売戦略について講義を受けた。例えば、日本で販売されているものと同車種であっても、ニュージーランドでは「自然との調和」を中心テーマとして販売促進活動を行うことが分かった。その後、社内を見学させていただいた際に、日本とニュージーランドの職場環境の違いに関心を持った生徒もいた。



専門家講義「ニュージーランドは大きい国か小さい国か」

ビクトリア大学 国際ビジネス研究所の Jason Young 氏より、ニュージーランドと日本を例に外交や経済等、様々な視点で国の規模についての講義を受けた。講義後、大学の概要の説明を受け、構内を見学した。留学生も含め、海外の大学生の生活について知る機会となった。



世界の課題に触れる「ソーシャルビジネス」

Hana Craig 氏より現在行っているソーシャルビジネスについて講義を受けた。ニュージーランド

がかかえる社会課題と、その解決策のひとつとしてのソーシャルビジネスの展開について学ぶことができた。生徒たちは、日本ではどのような社会課題があるのかを挙げながら、それらに対してソーシャルビジネスが解決策になり得るのかを考えることができた。

成 果：

「グローバルレクチャー」は海外の現状や課題に触れる経験をする他に「海外に身を置くことで自らの壁を破り、グローバルな視野をもって自己を客観視すること、異文化との相違点や共通点を知り自己のアイデンティティを再確認すること」も目的としている。

参加生徒に研修の前後でSGTを行ったところ、多くの因子で向上が見られた（図1）。

向上の見られた因子は、「思考力（+0.2）」「ICT（+0.1）」「コミュ・コラボ（+0.2）」「発見・解決（+0.4）」「ID（+0.1）」「リーダーシップ（+0.1）」「キャリア（+0.2）」の7つであった。さらに、 t 検定を行うと、「コミュ・コラボ（+0.2）」「発見・解決（+0.4）」の因子で有意差が認められた（ $p<.05$ ）。

一方、「多様性」と「失敗耐性」については、有意差はないが0.1ポイントずつ低下していた。これは、本研修に参加することで、それまで目にする事のなかったような人々や文化の多様性に触れたり、様々な場面での失敗を多く経験したりすることで、自らの力不足を強く感じ、自己に対する評価が厳しくなった結果、ポイントが低下したのではないかと推察される。

SGTに加え、帰国後に本研修を通して向上したと感じる5S5Mの因子を2つ選び（図2）、その理由について記載させた。その結果、向上実感の高い因子は順に「コミュ・コラボ」、「多様性」、「変化への対応」となった。

生徒の記載を見ると、「コミュ・コラボ」が向上したと書いた生徒の多くが、英語力がまだ不十分であったために上手く聞き取れなかったり、積極的に自分の意見を表現できなかったりと反省している。しかし、「ゆっくり、もう一度話すようお願いした」、「身ぶり手ぶりも使って工夫した」というように、生徒たちは何とか英語でのコミュニケーションの壁を乗り越えた経験をしていた。さらに、「意思疎通できた時はとてもうれしかった」と、コミュニケーション上で生じた課題を乗り越えたことに対して、肯定的な印象を持っていた。

「多様性」については、SGTではポイントが減少しており、研修中に困難を体験することで自己評価が低くなったことを推察した。ところが、向上実感調査においては2番目に高く挙げられている。生徒の記載には、「ホームステイ中に日本とNZの生活習慣の違いを感じ、どうすればよいかわからないこともあり困ったが、ホストファミリーに質問等をしたことで、新しいことを知れたりコミュニケーションをとれたりした」、「ホストファミリーの生活やルールを聞いて理解したら自分も合わせることができた」との記述があり、自らの力不足は感じながらも、何とか工夫をして困難を乗り越えていった様子がうかがえる。その結果、SGTで測る達成度は低いものの向上実感はあるという結果になったと考えられる。

以上の結果から、本研修に参加したことで、海外に身を置くことで自らの壁を破り、さらに異文化との相違点や共通点に気づいて理解をし、人々とコミュニケーションをとることができるようになったり、少なくとも、それらの重要性に気づくことができたりしたと考えられる。

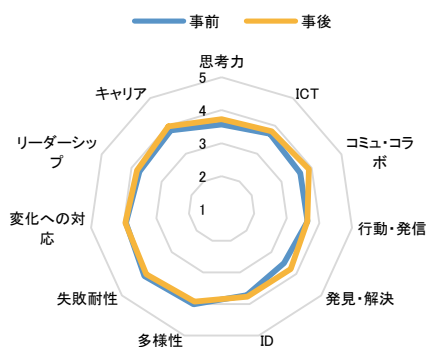


図1 各因子に関する自己分析とその変化

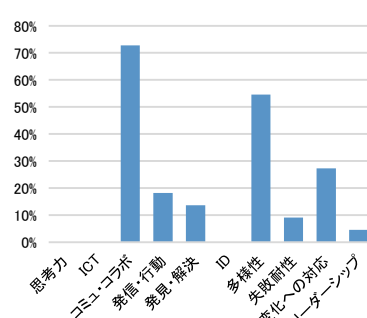


図2 研修を終えての向上実感

3 (3) -2 台湾研修「グローバルフィールドワーク」

研修の特色： 台湾は日系企業も多く進出しており、「グローバルビジネス課題の探究」を行うのに適している。研修先の台中科技大学は名城大学と連携しており、本研修に際しては名城大学経営学部教授 田中武憲氏 講義（計2回）「台湾と日本の経済関係」・現地調査予定の企業についての学習・レポート作成

対 象： 国際クラス第2学年 14名

実施時期： 平成30年10月8日（月）～10月15日（土） 5泊6日

費 用（概算）： 1名につき約11万円

実施内容：

区 分	場 所	内 容
事前学習	本 校	・台湾の歴史や現状について調査・学習 ・名城大学経営学部教授 田中武憲氏 講義（計2回）「台湾と日本の経済関係」 ・現地調査予定の企業についての学習・レポート作成
現地研修	台 北	・故宮博物館視察
	台 中	・台中科技大学の学生との協働学習（調査・ディスカッション・発表） ・企業フィールドワーク（中部サイエンスパーク・AGC） 「産業クラスター政策・日系企業の海外進出」
事後学習	本 校	・プレゼンテーション・レポート作成 ・Meijo Global Festaで代表グループが発表

故宮博物院視察

事前学習で学んだ中国・台湾の歴史をもとに実際の文物を見学した。

台中科技大学との協働学習

グループにわかれ、市内調査・ディスカッション・発表・企業訪問を行った。日系企業の店舗では、商品・客層・価格・宣伝方法等を調査し、必要に応じて従業員へのインタビュー、買い物客へのアンケート調査を行った。こうして得たデータをもとに、日本との比較を通して議論した（表1）。成果発表では、質疑応答を経て台中科技大学の先生方から講評をいただいた。



表1 各グループの調査先店舗と調査テーマ

班	店 舗	調査テーマ
1	コンビニエンスストア	取扱商品やサービスから見る台湾社会と日本社会の違い
2	ファストフード店（牛丼・ハンバーガー）	飲食チェーンが台湾へ進出するにあたって行っている工夫
3	自動車販売	台湾の交通事情と自動車の販売戦略
4	家具量販店	ブランドイメージと顧客ニーズの日台比較

企業フィールドワーク「産業クラスター政策・日系企業の海外進出」

研修先① 中部サイエンスパーク（中部科学園区）

パークの概要説明の後、質疑応答が行われた。ハイテク産業の中核を担う産業クラスターとして、産学連携やイノベーションの創出にどのように取り組んでいるのかについて活発な質疑応答が行われた。その後バスでパークを回り、企業の立地やパーク内の環境を見学した。



研修先② AGC 現地企業（旭硝子顯示玻璃股份有限公司）

事業概要・生産技術等の説明の後、質疑応答が行われた。事業内容だけでなく、日本人として現地の社員と共に働くということについて、経験に基づいたお話を聞くことができた。質疑応答では、工場における防災や障害者雇用、CSR 等多岐に渡るお話を伺うことができた。

成 果：

昨年度に引き続き、台中科技大学との協働調査を行った。本校生徒の視点だけでなく、現地生徒の視点も含めて調査を行うことができることがこの研修の最大の強みである。

研修の前後で行なった SGT の結果を比較すると、全ての因子で向上が見られた（図 1）。 t 検定を行うと、「コミュ・コラボ（+0.5）」、「アイデンティティ（+0.6）」、「多様性（+0.5）」と、3 つの因子で有意差が認められた（ $p<.05$ ）。また、帰国後に本研修を通して向上したと感じる因子を 5S5M から選び（図 2）、その要因について記載させた。結果として、90%以上の生徒が「コミュ・コラボ」が向上したと回答している。「コミュ・コラボ」「多様性」を選択した生徒の記載には、「(科技大生とは)、自分たちが普段話しているように話しても伝わらないことが多くの場面であった。具体的な言葉を使って分かりやすく話すことを心がけた。相手も一生懸命理解しようとしてくれた」「日本と似ているところの多い台湾でも、自分たちの当たり前が当たり前でないことが多くあった。自分の世界や視点や考え方が全てではないことがわかり、台湾以外の国についても知りたいと思った」とあった。現地へ行き、そこで生活する人々と関わったからこそその気づきである。「発見・解決」を選択した生徒は主に市内調査について述べている。「事前に日本で調査していたため、台湾での戦略に仮説を立てて現地調査を行うことができた。グループで助け合うことができたので、たくさんのアイデアを出すことができた」「インタビューだけではわからないことがあったため、お店を歩き回り雰囲気や商品の配置の工夫などを見た」等の記載があった。ここでも「コミュ・コラボ」と関連し、協働調査の効果が見られる。さらに現地でしかできない調査を進めようと試行錯誤し、取り組んだことが読み取れる。これは半数以上の生徒が「失敗耐性」の向上実感を挙げていることからもうかがうことができる。

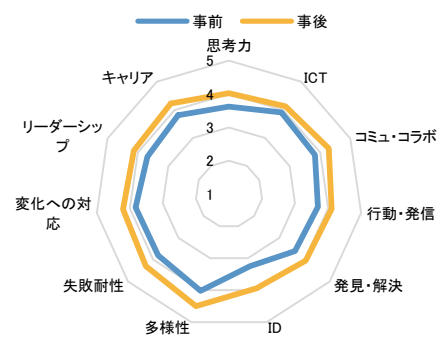


図 1 各因子に関する自己分析とその変化

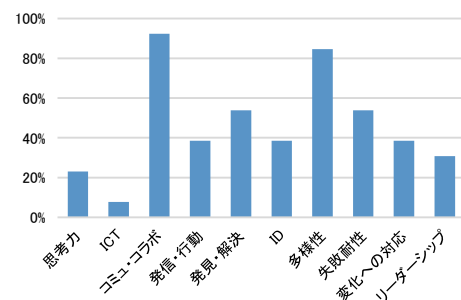


図 2 研修を終えての向上実感

3 (3) -3 インドネシア研修「グローバルフィールドワーク」

研修の特色： バリ州は、伝統と産業化、地域とグローバル、同世代のキャリア形成について、体験的に学ぶのに適している。本研修では、「ローカルとグローバル」をテーマに「観光開発と環境保全・伝統保存・地域活性化」についての学習を深める。



対 象： 国際クラス第2学年9名

実施時期： 平成30年10月8日～10月14日 6泊7日（機内泊を含む）

費用（概算）： 1名につき約19万円

実施内容：

区 分	場 所	内 容
事前学習	本 校	・インドネシア及びバリ州の歴史や現状について調査・学習 ・立命館大学国際関係学部助教 井澤友美氏 講義（計3回） ・先行研究分析（論文6書籍3） ・現地調査の計画・準備・各研修先にむけて事前質問事項を作成し送付
現地研修	バリ州	・調査・ディスカッション （1）マングローブ州立情報センターにて環境調査 （2）市内調査（ウブド第一高等学校との共同調査：産業班・観光班・キャリア班） （3）サラスワティ大学生とディスカッション ・講義 - ロイヤルピタマハホテル・デンパサール市環境局・NPO コペルニク
事後学習	本 校	・プレゼンテーション・レポート作成 ・生徒研究発表会で代表者が発表

調査・ディスカッション

観光開発をめぐる現状と課題をテーマに、マングローブ林・ウブド市内・ウブド第一高等学校内で調査を行った。サラスワティ大学では学生のキャリア志向等の状況を調査するとともにディスカッションを行った。外国語能力を使って観光産業への就業希望を持つ学生も多いなかで、観光開発によるグローバル化と伝統の保持が主な議題になった。



講義

研修先① ロイヤルピタマハホテル

伝統に根差した観光産業について視察を交えて講義を受けた。地域の雇用や教育を守り、既存の文化や環境をブランディングに生かす取り組みに、滞在した他のホテルとも比較して理解を深めることができた。



研修先② デンパサール市環境局

(dinas lingkungan hidup dan kebersihan kota denpasar)

デンパサール市におけるごみ収集やごみ処理の状況について説明を受け、質疑応答を交えながらバリのごみ事情について学習を進めた。



研修先③ コペルニク

アメリカ・日本・インドネシアに法人があり、途上国の「生活の向上」と「自立」を目指して活動しているNPOにて講義を受けた。現地のごみ問題に対する住民の意識改革を促す活動や、ラストマイルと呼ばれる途上国の「現場」への直接届ける持続可能な支援を行うため、企業や大学等と協働する仕組みづくりについて学んだ。



成 果：

本年度は新たにデンパサール市環境局でのフィールドワークを行い、学習のねらいの一つである、「観光開発と環境」について、より多面的に捉える機会となった。

研修の前後で行ったSGTを比較すると、多くの因子で向上が見られ（図1）、 t 検定からも「コミュ・コラボ（+0.6）」、「発信・行動（+0.9）」、「ID（+0.6）」、「多様性（+0.5）」と、4つの因子で有意差が認められた（ $p<.05$ ）。

また、帰国後に本研修を通して向上したと感じる因子を5S5Mから2つ選び、その要因について記載させたところ、「発見・解決」、「多様性」をあげた生徒が多かった（図2）。

「発見・解決」因子をあげた生徒の記載には、「このスキルは研修中のいたるところで感じた。ゴミ問題を例に挙げると、マングローブをカヤックで清掃した時にどうしてこのような状況になったのか、この状況を解決するためにはどうしたらいいのかを考えさせられた」というものや、「解決には、そこに関わるそれぞれの立場の文化的背景や経済事情、システムなど、複合的に考える必要があることを痛感した。それぞれの立場に調査などを行ったが、結論を出すことは難しかった。」「考えた解決案も、その地域に住む人たちの将来に影響することを考えると、本当にそれでよいのかと迷った。」といった記載が見られた。これらの記載からは「思考力」が鍛えられた様子も感じられる。

「多様性」をあげた生徒の記述には、ホームステイでの生活習慣等の違いを受け入れた経験やゴミ捨ての習慣に基づくものが多く見受けられた。本校SGH事業では、ニュージーランド・台湾・カナダで海外研修を行うが、日本の生活様式や思考と最も違う状況を体験できるのが本研修である。記載からは、エトセントリズム（自文化中心主義）に陥らず、そこに暮らす人々を受け入れるのと同様、生活習慣自体を受け入れていく意思が読み取れた。

生活様式だけでなく、いろいろな考えも違っていた。だから、一度相手のことを肯定、受け入れてから関わることを徹底してみた。相手をすべて受け入れるのには時間がかかったし、今思えばその時はとても悩んだと思う。違いを受け入れることは容易ではないけれど、受け入れた先に初めて交流があると思った。結果として現地の人をより深く知ることができたと思うし、そこで交流することはとても刺激的で面白かった。また、それによって、これまでとは違った新たな発想を持つことができた。この力をさらに伸ばすには、多様性を認めて関わっていくことを繰り返すことだと思う。

昨年度のインドネシア研修に参加した生徒の最も向上実感が高かった因子は「コミュ・コラボ」（36%）であった（第4年次の研究報告書 pp.30 - 31 を参照）のに対し、本年度はその因子を答えた生徒は多くない。生徒の記述から、コミュニケーションやコラボレーションはしているものの、その部分よりも調査や研究内容、多様性についての関心が高まっていた様子が見て取れた。

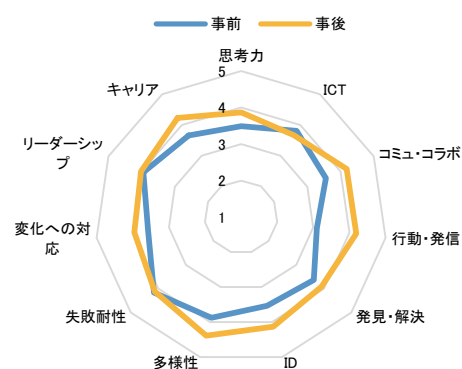


図1 各因子に関する自己分析とその変化

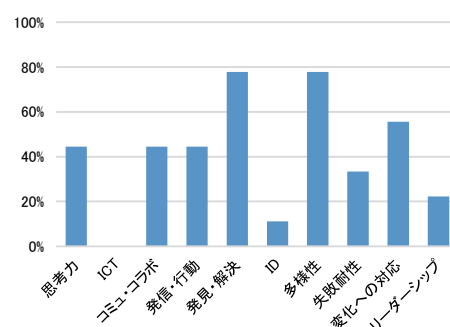


図2 研修を終えての向上実感

3 (3) -4 カナダ研修「グローバルアクション」

研修の特色： 当該国は、多文化国家としての特質があり、また、多くの日系企業が進出している。多文化共生の観点から調査・研究をし、愛知県における多文化共生課題について考察するとともに、日系企業の進出における現状と課題について現地調査をする。

対 象： 全校生徒の希望者から選抜された生徒 6 名

実施時期： 平成 31 年 1 月 25 日（金）～2 月 2 日（土） 7 泊 9 日

費用（概算）： 1 名につき約 17 万円



実施内容：

区 分	場 所	内 容
事前学習	本 校	・今回の研修全般の説明、ホームステイ先での注意事項等 ・カナダの歴史や現状について調査・学習 ・現地調査等に向け日本国内での調査やプレゼンテーション資料、質問事項作成等
本実施	トロント	・講義：JETRO・日本総領事館、日本商工会 ・調査：UNIQLO
	キッチン	・協働学習（ディスカッション等）：Forest Heights College Institute の生徒 ・企業フィールドワーク：トヨタ Cambridge 工場、地元商店 ・講義：日系カナダ協会
事後学習	本 校	・プレゼンテーション・レポート作成 ・生徒研究発表会で代表者が発表

講義（トロント・キッチン）

講義① JETRO トロント（酒井事務所長）

日系企業の進出状況の変遷と現状について説明を受けた。最近の日本企業の進出例として富士通を挙げ、カナダには AI や量子コンピューティングに強い研究機関が多くあること、協働や顧客対象となる大企業が進出していることなど、そのメリットが具体的に説明された。また、日本の中小企業の進出例として、日本酒を扱う醸造元によるものを説明された。生徒からは、カナダ滞在中の経験からプリクラ機器を扱う企業の進出の可能性等について意見が出された。

講義② 在トロント日本国総領事館（大山領事）

領事館の業務内容の説明を受けるとともに、オンタリオ州における日本人居住者の概況や居住者が抱える問題等について説明を受けた。また、日加間の文化交流の現状を聞き、日本のポップカルチャー、食についての関心が高まっていることが理解できた。生徒からは、日本語補習校についての質問や、カナダにおける教育システム、特に障がい者に対する教育について質問がされた。大山領事のキャリアからも大いに刺激を受けた様子であった。

講義③ 日系カナダ協会（Mr. ONO & Mrs. MATSUI）

日系一世の生活、戦中の日系人収容所での体験、戦後日系人の権利が回復されるまでの経過について説明を受けた。その経験から、歴史を正しく理解すること、自分自身の考えを持ち、声を上げることの重要性を訴えられた。事前学習で疑問に感じた点、本講義の内容について活発に質問することができた。



講義④ トロント日本商工会（伊東専務理事）

商工会の活動概要、日系企業進出時に生じる問題点、リサイクル、エネルギー問題、トロントでの日本語教育を中心に説明を受けた。働き方、女性の社会進出、教育に関する日加の違いなどについて盛んに質疑がなされた。また、カナダの大学について、進学・留学も含め多くの質問があった。

調査（リサーチ）

トロントにある UNIQLO において、店舗ディスプレイ、社員教育、社内コミュニケーション、リサイクルへの取り組み等について説明を受けるとともに、店内でディスプレイ等について調査を実施。また、トロント市内数か所で UNIQLO に対する企業イメージ等について、街頭リサーチを実施した。様々な年齢層から回答を得ることができ、上級生が先に行った台湾での調査、参加者で行った日本での調査との比較検討が可能となった。



Forest Heights College Institute の生徒との協働学習

アイスブレイクとしてあやとりなどの日本の遊びが紹介された後、参加生徒よりお弁当などの特徴的な日本の食について、日本で LGBT など性的マイノリティについてどのような教育がされているかなどのプレゼンテーションを行った。上記内容に関係する画像なども使用して現地高校生と活発な意見交換がなされた。



企業見学（トヨタ Cambridge 工場）

生徒たちからは日本の工場との違いや労働者の国籍や宗教への配慮等について質問がなされた。工場内では「KAIZEN」「MUDA」という言葉が随所に見られ、日本独自の感覚的な言葉が全世界共通で使われ共有されていること、リサイクルが誰でもできるような工夫がされていることに気付くことができた。

成 果：

参加者は選抜により、特進クラス 2 年生 1 名、国際クラス 1 年生 3 名、一般進学クラス 1 年生 2 名の計 6 名となった。昨年と比較し参加生徒の所属クラスが多彩となったことは、本年の特徴である。

研修の前後に行った SGT では、参加者全員に大きな変容が見られた（図 1）。特に「コミュ・コラボ」、「発信・行動」等の差異が大きかった。1 年生の参加者が多かったこと、研修前から顔見知りでなかった生徒同士が、研修に向けて協働してリサーチをし、プレゼンテーションの準備をしたこと、現地でのリサーチにおいても、それぞれが役割を分担し協力して行ったことなどがその要因と考えられる。リフレクションシートには、「今自分にできることは何かを考え、勇気を出して質問したり行動することができた」、「この研修で行った街中でのリサーチ時、自分はなかなか質問ができなかったけれど、グループの中で自分のできることを探し実行した」との記載があり、変化する状況の中で自分が何をしたらよいかを絶えず考えながら行動したことが推察される。

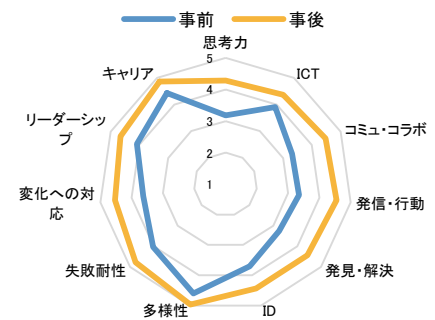


図 1 各因子に関する自己分析とその変化

今後に向けた改善点：

昨年の反省を生かし、生徒が取り組み易いグループでのプレゼンテーション、リサーチ等を研修内容に取り入れたことで、参加者全体が自己の向上を実感することができたと考えられる。生徒たちの感想に、「研修に参加して、たくさんの課題や、興味ある部分が見えてきた」、「これからも主体的に学ぶ姿勢をもって物事に組みたい」とあり、この研修をきっかけに今後の探究活動に主体的に取り組むことが期待できる。SGH 指定期間は終了となるが、今後も生徒の主体的な活動の契機となるこのような研修を実施していくことで、本校が目指す「突破力のある」生徒の育成がさらに促進されると考えられる。

3 (4) ローカルフィールドワーク

目 的： 社会や世界の課題に触れ、知識、スキル、マインドセットを統合して活用する学びの場とする。また、この経験を通して、自らの足を使って学ぶ姿勢や当事者意識を持って探究する姿勢を体得させることを目的とする。

内 容： 社会課題や研究課題に基づいて行う。実施した内容は以下の通りである。

「総合的な学習の時間」における「多文化共生」にて実施：国際クラス第1学年

項番	研 修 先	内 容
1	南山大学人類学博物館（計2回）	博物館資料から情報を読み解く
2	JICA 中部	JICA 概要・国際協力活動について
3-7	名古屋市内中学校（計5校）	多文化共生への教員の意識調査
8	株式会社ユニクロ	販売戦略・社内教育について
9	名古屋市内	消費者の意識調査・ブランドイメージ調査

「総合的な学習の時間」における「グローバル概論」にて実施：一般進学クラス第2学年

項番	研 修 先	内 容
1	南山大学人類学博物館	博物館資料から情報を読み解く
2	JICA 中部	JICA 概要・国際協力活動について
10	立命館アジア太平洋大学	日本や母国の誇れる点について留学生にインタビューを実施

「総合的な学習の時間」における「課題探究」としてゼミ別・個別実施

先行研究等で得た情報や仮説の検証を行うため、適宜課外活動時間等を使って実施した。

国際クラス第2学年

項番	内容	研 修 先	人数	項番	内容	研 修 先	人数
11	防災	Abc plus 緑徳重校		42	観光	愛知県振興部観光局観光振興課観光振興グループ	4
12		名古屋大学減災館		43		愛知県振興部観光局国際観光コンベンション課	3
13		名古屋港防災センター		44		名古屋市観光文化交流局観光文化交流部観光推進室	4
14		名古屋市役所総務課		45		中部国際空港	2
15		名古屋市中村区役所防災課		46		名古屋交通局事務所	
16		名古屋市港区役所区政部総務課庶務係		47		名古屋臨海高速鉄道株式会社	
17	産業	グレーター・ナゴヤ・イニシアティブ		48		名古屋鉄道株式会社計画部	
18		なごやサイエンス・スパーク	3	49		愛知高速鉄道	
19		知の拠点あいち		50		JR 東海	
20		エイベックス（株）		51		名古屋城総合事務所	4
21		名古屋市港区農家		52		清州城管理事務所	
22		名古屋市役所港農政課		53		熱田神社事務所	2
23	協働	JICA 中部		54		真宗大谷派名古屋別院	
24		Man to Man（株）		55		宣津神社事務所	
25		愛知大学キャリア支援センター		56		露橋神明神社事務所	
26	共生	名城大学キャリアセンター		57		常泉寺事務所	
27		岐阜大学キャリアセンター		58		妙行寺事務所	
28		知立市役所福祉子ども部福祉課		59		豊國神社事務所	
29		刈谷市役所市民活動部市民協働課	2	60		中埜酒造株式会社／酒の文化館	
30		弥富市役所危機管理課		61		イオンモール常滑	
31		半田市役所企画部秘書課		62		やさしい日本語ツーリズム協会	
32		半田市国際交流協会		63		グローバル名古屋バックパッカーズホステル	5
33		名古屋市港区障がい者基幹支援センター		64		ゲストハウス MADDO	
34		JA なごや 代官町支店		65		ゲストハウスなごのや	
35		オアシス 21 i センター		66		株式会社トラベルコンシェルジュ なごやんツアー	
36		オアシス 21 管理事務所		67		名古屋駅「うまいもん通り」	
37		豊田市保見団地	2	68		栄チカ	
38		知立団地		69		懐石料理「魚鉄」	
39		九番団地		70		手羽先サミット 2018	2
40		外国人留学生大交流会 in なごや 2018		71	複合	名古屋モスク	4
41		ワン・ワールド・フェスティバル for Youth 高校生のための国際交流・国際協力 EXPO		72		名古屋国際センター	4

一般進学クラス第3学年

73	高齢化	まはろ接骨院	75	産業	日本特殊工業
74		そんぼの家	76	観光	澤の屋旅館

成 果： 本年度は合計 76 の企業・団体・イベント等に協力を得ることができた。昨年と違い、国際クラス 3 年生は第 2 学年時に課題探究に関わる全てのフィールドワークを終えていたため、本年度は実施していなかったが、本年度の訪問先・件数はともに増加（昨年度は 68 箇所）した。

また、例年と同様、NPO 等でフィールドワークを行った生徒は、その後も継続して該当の活動に参加したり、探究活動を終えても関わりを持ち続ける様子も見られ、授業の枠を越えて、生徒たちのキャリア形成に位置づく学びとなってきた。

5 年間の教師生徒の変化：

これまで実施したローカルフィールドワークの件数は、国際クラス以外で実施したものも含め平成 27 年度が 40 件、平成 28 年度が 59 件、平成 29 年度が 68 件、平成 30 年度が 76 件であった。一般進学クラスでのフィールドワーク実施など、国際クラスに留まらず積極的に外に出る取り組みは広がりつつあり、担当教員の間でも過去に協力をいただいた訪問先の情報を共有するなどしている。複数年に渡って協力を得られる訪問先があることは、ローカルフィールドワークを継続して得た強みであると言える。

国際クラス「課題探究」において生徒が個々に実施するローカルフィールドワークは、SGH 指定以前より必要に応じて実施されてきたが、この 5 年間でよりその手法が系統化された。自身の立てた仮説を裏付けるため、どこに行きどのような情報を得るべきなのかを考えた上で計画を立て、アポイントを取り、訪問し、振り返りまとめるというフィールドワーク実施の手順を担当者間・生徒間で共有することができた結果、生徒たちはより積極的にフィールドワークを実施することができるようになった。

今後に向けた改善点：

研修先との連携を重視し、研修先・教員・生徒との関係を密に取ることを心掛けた授業運営をしている。国際クラスだけでなく一般進学クラスでもフィールドワークを実施しているが、訪問先が多岐に渡ることもあり、複数のクラス・コースから同一訪問先に別個で依頼をかけるという事態が起こりかねない。いつどこに、どのような目的でフィールドワークを実施するのか、教員間で共有できる体制づくりが求められる。

3 (5) Meijo Global Festa



目 的： SGH 指定校及びアソシエイト校等の生徒と議論・発表を行う機会とし、生徒中心で運営することによって主体的な行動力や発信力を育成することを目的とする。本取り組みの実施により、生徒のコミュニケーション力やコラボレーション力、ネットワーク構築力、問題解決能力が伸長するとともに、SGH 指定校の情報共有の場となることを目指す。

日 時： 平成 30 年 11 月 11 日（日）9:30～17:00

内 容： 東海地区の高校生を対象に、フォーラム部門、口頭発表部門、の 2 つの部門を実施した。フォーラム部門は 7 つの分科会で、それぞれ事前課題が与えられたうえで、議論し発表資料を作成した。口頭発表部門では午前のフォーラムでの作成資料をもとにした成果報告と課題研究活動の発表を行った。両部門において名城大学文系学部教授陣に指導をいただいた。また、企画・運営は有志生徒で構成された生徒実行委員会を中心に行った。

フォーラム部門： 参加校 15 校・参加生徒 166 名（昨年度 参加校 9 校・参加生徒 108 名）

分科会 A 「Is More Immigration Good or Bad for Japan? 」

講師：名城大学法学部准教授 David Green 氏

分科会 B 「グローバル・タックス（国際連帯税）の実施に向けて」

講師：名城大学法学部教授 伊川正樹氏

分科会 C 「新興国の通貨安からグローバル化を考える」

講師：名城大学経済学部准教授 新井大輔氏

分科会 D 「相模原障害者施設殺傷事件と杉田水脈議員の LGBT に関する発言に通底するもの」

講師：名城大学経営学部教授 村松恵子氏

分科会 E 「高校生が考える適切なスマホ利用」

講師：名城大学都市情報学部准教授 杉浦伸氏

分科会 F 「名古屋城天守閣木造復元をこのまま進めるべきか、そうでないならどうするか？」

講師：名城大学人間学部教授 伊藤俊一氏・水尾衣里氏・笠井尚氏・原田知佳氏

分科会 G 「ベストセラーとなった自己啓発本は読みに値するか」

講師：名城大学外国語学部准教授 堅田義明氏

口頭発表部門： 参加校 6 校・発表 11 件（昨年度 参加校 6 校・発表 9 件）＊フォーラム成果発表を除く

講 評：名城大学経済学部教授 渋井康弘氏及びフォーラム部門講師

本校からの発表：

国際クラス第 1 学年グループ発表「生徒主体で作る多文化共生劇～『あいち多文化共生推進プラン 2022』のその先～」

国際クラス第 2 学年グループ発表「台湾におけるニトリの販売戦略と顧客イメージ」

国際クラス第 3 学年個人発表 “Better Community Activities for Better Multicultural Society”

国際クラス第 3 学年個人発表 “Spread of Fair Trade in Japan”

国際クラス第 3 学年個人発表 “‘Education of Sexual Diversity’ into Compulsory Education”

全体挨拶・講評 名城大学附属高等学校校長 岩崎政次

名城大学副学長 福島茂氏

名城大学経済学部教授 渋井康弘氏

参加校一覧

岐阜県立大垣北高等学校、愛知県立旭丘高等学校、三重県立四日市高等学校、愛知県立時習館高等学校、国立名古屋大学教育学部附属中・高等学校、中部大学春日丘高等学校、岐阜聖徳学園高等学校、愛知中学校・愛知高等学校、名古屋中学校・高等学校、金城学院高等学校、名古屋市立山田高等学校、愛知県立津島高等学校、熊本県立水俣高等学校、常翔啓光学園中学・高等学校、京都府立桂高等学校、名城大学附属高等学校

成 果： 本年度は普及の観点から、SGH 指定校・アソシエイト校だけでなく近隣区内の全高等学校や探究活動に力を入れている県内の高等学校に参加を呼びかけた。その結果、参加校は 16 校、参加生徒は延べ 189 名（実 173 名）となった。また、昨年の課題を改善するために、ランチミーティングとプレゼンテーションをさらに充実させるよう努めた（第 4 年次の研究報告書 p.37 を参照）。

アンケートで本事業の成果を検証してみると、生徒・教員ともに満足度は高く、特にフォーラムでの議論を評価している様子が見受けられた（表 1）。さらに、本事業で学べたこととして、生徒は多様な価値観の存在に気がついており、議論し意見をまとめる力の向上、そして、それを支える基礎技術であるところの自らの主張を伝える技術や経験の向上を実感していることがわかる（表 2）。これらの実感は主に、フォーラムでの意見交換や協働作業の実践から来るものであると考えられる。

表 1 参加者の満足度と今後の参加意欲

生 徒 (n=105)				教 員 (n=11)		
満足度			今後の 参加意欲	満足度		今後の 参加意欲
フォーラム	プレゼン	大学教員の指導		大学教員の指導	全般	
96%	92%	88%	87%	91%	100%	100%

また、参加生徒と教員に自分（自校生徒）の苦手なことを複数回答で聞いたところ、生徒と教員では大きく回答が違っていた（図 1）。

参加生徒は、他校と協働する本事業に参加するだけあって、意欲も能力も高いことが想定される。そのため、苦手としている項目は顕著ではないが、「答えの出ないことを考える」と「論理的に人に伝わるように説明する」ことにおいては 25%の生徒が苦手と回答した。

教員は「賛成されるかわからないなかでの発言」や「答えの出ないことについての思考」、「発表」、「英語の使用」が自校の生徒は苦手だと考えている。

Meijo Global Festa は、プレゼンテーション部門を通して日頃の各校での探究活動の成果を発表する機会とするとともに、生徒・教員共に課題としている「答えの出ない課題について議論する」機会として機能しており、当初の目的通り、当事者意識をもって地域や世界の課題を見つめ、議論しようとしている、2030 年の世界を担うことになる高校生たちが集う場となっていることがわかる。

東海地区のスーパーグローバルハイスクールはもとより、各校から集まった意欲ある生徒たちが、この取り組みを通して、課題を見つけ考えることの更なる面白さを知り、協働・共生に向けて進むことを目指すことは約束されたも同然である。

また本事業は、他校のプログラムにも組み込まれ活用されている。特に愛知中学・高等学校の五十嵐真人教諭の「アカデミックライティング・アカデミックプレゼンテーション指導」では、その指導過程において、Meijo Global Festaでの研究発表を活用し、生徒のアカデミック技能を客観的に評価、可視化している。それら一連の取り組みに本事業が寄与できているとすれば、成果と考えられる。以下に五十嵐教諭の日本私学研究所委託研究論文「アカデミックライティング・アカデミックプレゼンテーション指導～トビタテ！留

表 2 本フェスタで特に学べたこと(複数回答・n = 155)

内 容	割合
新たな考え・意見・視点と別の価値観への気づき	57.7%
議論し、意見をまとめる技術や経験	34.5%
自らの主張を伝える技術や経験	34.6%
社会課題への視点・当事者意識等	12.5%

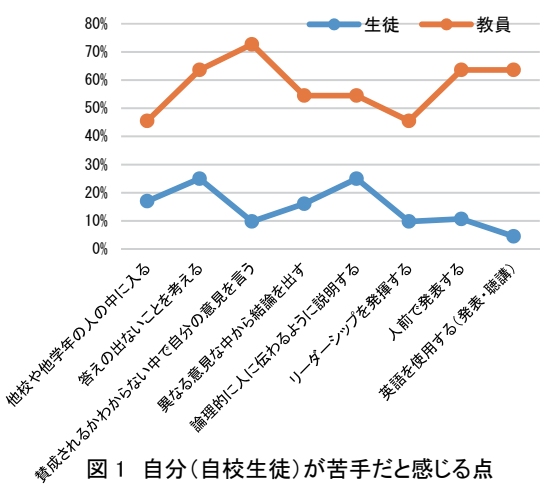


図 1 自分(自校生徒)が苦手だと感じる点

学JAPAN アカデミック（ロング）合格生徒の指導事例」の一部を抜粋して紹介する。

（対象生徒は）MGF 2018でのプレゼンテーション部門発表では、論文とレジュメを数部用意して臨んだ。しかし、発表途中や質疑応答時に言い淀む場面があったことなどから入賞を逃した。

対象生徒は当日参加した聴衆から任意の記述式フィードバックをもらい、多くの教訓を得たようだ。一方、審査員の一人からは次のような講評を頂戴した。

「イギリス留学中の日本人と現地学生の読書週間の違いに着目し、読書量、本の種類、読書に対する姿勢等をアンケート集計し、分析している研究発表を大変興味深く聞かせていただきました。（中略）研究内容の充実度に加え、口頭プレゼンの英語もたくみに使いこなし、堂々と発表としている姿も大変印象深かったです。研究をまとめた論文の準備原稿も用意しており、研究をする姿勢に一研究者として気が引き締まる思いでした。」

この評価から、大学・大学院へと通じる探究の「型」を対象生徒は十分に習得したと思われる。

その後、対象生徒は本フェスタでの反省を生かし、発表内容を丸暗記ではなく箇条書きで整理し、それらを組み合わせて発表するようになり、志望大学に推薦で合格した。愛知中学・高等学校における先進的なアカデミック指導において、本事業が1つの場となっていることは意義深く、SGH 指定校としての役割を果たしたと言えよう。

5 年間の教師生徒の変化：

Meijo Global Festa の実施は平成 28 年度からであるが、それより前、平成 26 年度からその前身となる SGH プレミーティングを実施している。プレミーティングではグローバルなビジネス課題をテーマにグループで議論し、データをもとに課題解決に向けた仮説を立てるといった探究活動を校内で実施した。平成 27 年度は SGH ミーティングを実施した。有識者の助言をもとに、探究活動を実施している各県の高校生同士が協働して多面的・複合的に探究した。以上の探究活動を発展的に継承したものが Meijo Global Festa である。平成 28 年度から合計 3 回実施し、参加者、関わる大学教員、見学者も増えている（表 3）。

表 3 5 年間の Meijo Global Festa に関わるファシリテーター・参加校・参加者の数

	H26 年度	H27 年度	H28 年度	H29 年度	H30 年度
	SGH プレミーティング	SGH ミーティング	Meijo Global Festa		
内 容	グループワーク 成果発表	ディスカッション 成果発表	ディスカッション ポスター発表 成果発表・研究発表 SGH カンファレンス	ディスカッション 成果発表・研究発表	
ファシリテーター 講師	6 名古屋大学大学院生 国際基督教・立命館学生	11 名城大学教員・研究員 企業	8 名城大学教員	10 名城大学教員	12 名城大学教員
参加校数	1	8	9 (カンファレンス16)	12	16
参加者数	35	107	145 (実 96)	142 (実 124)	189 (実 173)

また、本事業は平成 26 年度のプレミーティング以来、一貫して生徒実行委員会を中心に企画・運営してきた。生徒実行委員会は当初は国際クラス中心であったが、平成 30 年度には一般進学文系クラスからも実行委員に参加があった。例年のアンケートからも実行委員のスキルとマインドセットの伸長は著しい（第 4 年次の研究報告書 p.37 を参照）ことから、実行委員会生徒が各クラスにおける今後の探究活動の核となることが期待される。

教員については、本事業を校務分掌教育開発部・SGH 実行委員会が中心となり運営した。これまでに 8 名が担当してきており、校外に向けた事業開催のノウハウが確立された。

今後に向けた改善点： 本事業は SGH 指定期間終了後も継続する予定である。今後、探究活動と高大連携の核とするためにも、更なる全校・地域への普及は課題である。同時に、これらの成果をどのように通常の授業に反映させるのかといったこともあげられよう。ホームルーム単位で実施できることを少しずつ増やしていき、フェスタを探究型授業の展開に反映させることが必要である。よって、本事業と通常カリキュラムとの連携が今後の課題である。

3 (6) グローバルパスポート

目 的： 研究開発目標及び実践目標達成のロードマップとして、
の成果を検証評価する手法として活用する。



内 容： グローバルパスポートには以下の 6 項目を記録している。

- (1) 本校主催の探究活動や研修等の「本校事業」
- (2) 本校の授業や課外活動で行うプレゼンテーションである「本校プレゼンテーション」
- (3) 本校の授業や課外活動で行うフィールドワークである「本校フィールドワーク」
- (4) 本校以外が主催する課題研究に関わる研修やイベントの「学外事業（イベント・研修）」
- (5) 本校以外が主催する研究発表会やコンテストの「学外大会・コンテスト」
- (6) 英検・TOEIC L&R 等の「英語資格」

各項目に該当する取り組みについてはその状況に応じてポイント（以下、「マイル」）を付与し、各自のグローバルパスポートにスタンプを押している。このことによって各生徒の項目ごとの履歴や成果の確認、振り返りができるようになっている。

【グローバルパスポート概要】

- 1 対象生徒 国際クラス在籍者及び一般進学クラス文系第 2 学年、第 3 学年、グローバルサロン参加者
- 2 対象項目・マイル数 （目標マイル 1 年修了時 2000, 2 年修了時 3150, 3 年修了時 4250）
 - (1) 本校事業への参加（年間目標マイル 500）
 - グローバルサロン （参加 50 マイル）
 - 高大連携講座・ミーティング・フェスタ （参加 50 マイル） ※運営の場合は+50 マイル
 - 指定の名城大学主催のイベント （参加 50 マイル）
 - 海外研修 （参加 100 マイル）
 - (2) 本校プレゼンテーション（年間目標マイル 500）
 - 担当教諭の認めるプレゼンテーションの実施（1 回 50 マイル）※選抜された場合は+50 マイル
 - (3) 本校フィールドワーク
 - 担当教諭の認めるフィールドワーク（1 回 50 マイル）
 - 担当教諭の認める海外研修中のフィールドワーク（1 回 50 マイル）
 - (4) 学外事業（イベント・研修）への参加（年間目標マイル 500）
 - 指定の学外イベント（1 回 50 マイル）
 - 指定の学外研修（1 回 50 マイル）
 - (5) 学外大会・コンテスト（年間目標マイル 300）
 - 指定の大会・コンテストへの作品（論文・作文・作品等）応募（1 回 50 マイル）※入賞等の場合は+100 マイル
 - 指定の大会・コンテストへの出場（プレゼンテーション等）（1 回 50 マイル）※入賞等の場合は+100 マイル
 - (6) 取得英語資格（目標マイル 1 年修了時 550 2 年修了時 1000 3 年修了時 2100）

マイル	英 検
1000	1 級
800	準 1 級
350	2 級
150	準 2 級

マイル	TOEIC L&R
1000	945-990
500	830-940
300	730-825
200	650-725
150	550-645
100	470-545
50	380-465

マイル	GTEC・CBT	IELTS	TOEFL iBT
1000	1400	7.0-	95-120
800	1250-1399	5.5-6.5	72-94
350	1000-1249	4.0-5.0	42-71
150	700-999	3.0	

成 果： 本制度は、平成 26 年度末から名城大学国際化推進センターの支援を受け開発を進めてきた。冊子形式は SGH 指定 2 年目の平成 27 年度に初版が完成し、運用 3 年目に名城大学のグローバルパスポートが改訂されるのに伴い共通性の維持と使い勝手の改善を目的とした改訂版を作製した。本年度は運用 4 年目となる。

本年度のグローバルパスポート対象事業は、上記の (6) 資格試験を除いて、合計で 221 件の事業が実施された（表 1）。

表 1 グローバルパスポート事業集計結果

区 分	内 容	件 数
本校事業	グローバルサロン・本校主催の海外研修・高大連携講座等	32
本校プレゼンテーション	本校の授業または課外活動でのプレゼンテーション	46
本校フィールドワーク	課題探究のためのフィールドワーク	118
学外事業（イベント・研修）	本校が指定する研修及び他大学や他機関主催のイベント	11
学外大会・コンテスト	本校が指定する学外コンテストや大会（SGH 甲子園等）	14
合 計		221

また、本年度の国際クラス生徒については、すべての学年で目標マイルの達成率 100% に到達した（表 2）。一般進学クラス文系第 3 学年（課題探究選択者）については、第 2 学年時に平均 578 マイル、最高 1050 マイルであったのが、本年度は平均 864 マイル、最高 864 マイルとなった。

表 2 グローバルパスポート集計結果(カッコ内は昨年度数値)

クラス	人数	通算平均獲得マイル	目標マイル達成率	通算最高獲得マイル
国際クラス第 1 学年	34	2952.9 (2480.9)	100% (91.3%)	4950 (4652)
国際クラス第 2 学年	23	5043.5 (4821.1)	100% (93.8%)	7500 (7104)
国際クラス第 3 学年	30	6720.0 (7188.5)	100% (100%)	10000 (10154)

3 学年とも本校事業や学外研修・大会、コンテスト、フィールドワークやプレゼンテーションにも積極的に参加するようになってきている。一方で、英語の資格試験に対するマイル配分が大きいので、資格試験の取得状況が優れている生徒が高いマイルを取得している。例年課題としてあげられた集計の煩雑さを解消すべく、期間を区切り、小まめに生徒たち自身が活動を記録し振り返る機会を設けたことで、生徒の意欲喚起にもつながった。

5 年間の教師生徒の変化： グローバルパスポートを開始しての 4 年間の年間平均獲得マイルを概観すると、1 年目は浸透しておらず、各種の活動に生徒を参加させることはできなかったが、その後は順調にマイルの獲得が進んでいる。学年が上がる毎にマイル獲得数も増え、国際クラス全体として活動が盛んになっている様子が見て取れる。

制度導入にあたり、マイル獲得のゲーミフィケーション要素が生徒の活動への動機付けの一助になることを狙っていた。その狙い通り、生徒たちが自分の活動を振り返ることで、モチベーションが高まり各種活動へ積極的に参加する様子が見られた。

副次的なメリットとして、入試など生徒の活動履歴を対外的に提示する必要が生じた際、生徒にとっても教師にとっても活動の履歴管理として有用であった。教師にとっては、入試改革で必要とされるポートフォリオの運用のためのノウハウを蓄積することができた。

今後に向けた改善点： 生徒の手もとに冊子という形で記録があることは、各種活動へのモチベーションを高めることには繋がっているが、その集約は煩雑となりやすく全校的な導入の障壁となっている。今後の入試改革と生徒の学びを見える化することを踏まえて、生徒の「学びの過程」とそこから生じる「次への視点」をどう記録するかと、電子化についての検討が必要である。

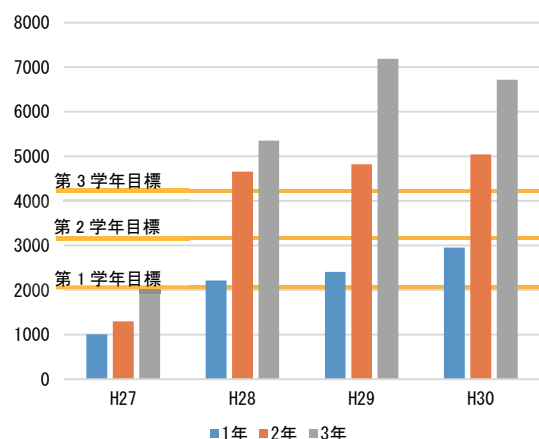


図 1 年度毎の平均獲得マイルの推移(国際クラス)

3 (7) グローバルサロン

目 的： 自律的キャリアデザイン形成の機会として、様々な講師を招聘し、対話型の学びを深める場とする。学問分野の壁、講師と生徒の壁、理論と現実の壁を取り払って学ぶことで、将来のグローバルリーダーとなる意欲と能力のある生徒の発掘と育成を行う。



内 容： 全校生徒・保護者等を対象に土曜日に2時間程度実施(表1)し、参加は任意である。年間を通じて、様々な分野で活躍する講師による現実に即した話題提供をもとに、具体的な課題について世代・学年・クラス・コース等の枠を越えて討論する。

表1 グローバルサロン実施一覧

回	日 時	講 師 ・ テ ー マ
1	4月21日	牧野佳奈子氏 (DiVE.tv 代表・制作ディレクター) 「愛知県の外国人労働者の日本語学習」
2	5月19日	山藤旅間氏 (都立武蔵高等学校教諭・SDGs ファシリテーター) 「SDGsを「知る」から「行動する」ためのデザイン～自分の好きで社会課題の解決を目指す方法～」
3	6月16日	杉藤貴浩氏 (中日新聞社社会部記者) 「子どもの貧困」
4	7月7日	菅谷亮介氏 (Very50 代表) 「世界に羽ばたく高校生が知るべき3つのこと」
5	9月29日	杉浦伸氏 (名城大学都市情報学部准教授) 『「意思決定手法」を使ってみよう』
6	10月20日	馬場幸子氏 (トヨタ自動車(株)・北京オリンピックソフトボール金メダリスト) 「夢に向かう～瞬間(いま)しかない」
7	11月10日	四方善啓氏 (名古屋大学名誉教授) 「インドから西へと流れる学問」
8	12月8日	Jeffery Fritch 氏 (Berlitz 講師・本校非常勤講師) 「Speaking with Confidence」
9	1月26日	田林信哉氏 (総務省職員・元南相馬副市長) 「東日本大震災と原子力発電所の事故 そして復興について～南相馬市の経験から～」

成 果： 本年度は開催回数を2回増やしたこともあるが、例年よりも多く、延べ541人の生徒が参加した(表2)。実人数157名の参加者のうち、110名は2回以上、さらにそのうち51名は5回以上参加している。これは、全校規模の自由参加の学習としては十分な成果であり、全校に浸透しつつある事業と言える。

表2 年度・クラス別グローバルサロン参加者数(延べ)

クラス	H26	H27	H28	H29	H30
国際第1学年	128	117	126	60	209
国際第2学年	65	71	42	86	110
国際第3学年	67	31	32	26	56
国際クラス合計	260	219	200	172	375
一般進学第2学年	0	0	3	0	5
上記クラス以外合計	30	69	197	99	161
合 計	290	288	397	271	541

また、本年度は年度初めに、近隣の学校にも案内を送付した。他校では本事業の認知度も低いこともあり、他校から参加した生徒は愛知県立千種高等学校の生徒1名のみであったが、サロンを通して千種高校生徒や講師と繋がりを作ってSDGsの活動を始める生徒(有志)もでてきた。彼らは、その後、SDGs活動(布ナプキンを作り、アフリカの女子生徒に送る活動等)を千種高等学校生徒と協働して行うとともに、世界こどもの日に際したフォーラムで発表し



たり、文化祭で活動したりと、精力的に自主的な活動を行っている。

その他、OB や企業からの参加・見学、常葉大学附属橘高等学校の教諭の視察等、少しずつではあるが、広がりを見せている。

さらに国際クラスの生徒に対して、今後のグローバルサロンへの参加意欲についての調査を行ったところ、「非常に高い」「高い」の高群を選んだ割合が、第1学年は90%、第2学年は91%に達した(図1)。毎年度、さまざまな講師が独自の視点によって展開される内容は、参加者にとって未知の世界の扉を叩きかけとなったと言える。自由参加の学習でこのような高い値として表れたのは、参加すればするほどサロンの魅力を感じることでできる内容を展開できていたのではないかと考える。

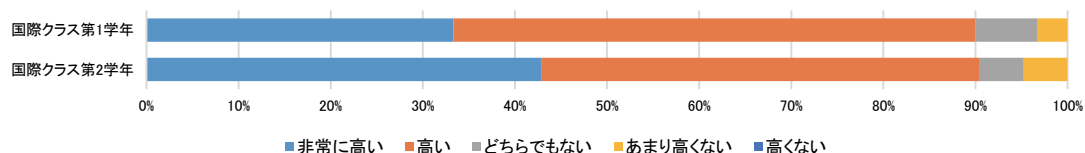


図1 グローバルサロンへの参加意欲

5 年間の教師生徒の変化：

表2の通り、参加生徒数は年度ごとに増減はあるが、本年度はどの学年も積極的に参加したことが、541名という総参加者数に繋がった。

国際クラス生徒は、入学時は担任団の働きかけのもとに参加し、何度か参加するうちにサロンの楽しさに気づき、自主的に参加することが定着している。それでも月1回の土曜日の実施であり、忘れてしまうこともあるため、次第に国際クラス担任団や「課題探究」担当者が率先して事前に生徒たちに案内し、グローバルサロンにも参加するようになっていく。教員自身が本事業に関与することで、課題研究活動や生徒との日頃の会話にもグローバルサロンでの内容を生かすことができ、当初の目的にある、(教師と生徒の)壁を取り払った対話や学びをすることができるようになった。また、他クラス(コース)においても特別進学クラス生徒を中心に普及しつつある状況である。この背景には、教育開発部員や国際クラス担任であった教員等、SGH事業に関わる教員が新たな配属先のクラス(コース)での積極的な働きかけがある。少しずつの変化ではあるが、グローバルサロンの意義を認める教員が増えてきているといえる。

また、本事業は教育開発部が所管しているが、昨年度からは担当者を固定せず、毎回担当者を変えているため、本事業に関わる教員も着実に増えてきている。

今後に向けた改善点： 課題は、SGHの準対象となっている一般進学クラス第2学年からの参加者が少ないことである。ただし、少ないながらも数名の生徒は積極的にSGHの諸活動に取り組んでおり、一般進学クラスの探究活動を牽引できる生徒が育ちつつある。

教員の理解や意識が生徒の行動を変えることから、今後は、グローバルサロンの魅力を生徒だけでなく教員に伝えるべく、さらに情報を工夫して発信する。

また、参加者のうち47名は1回のみ参加であるため、如何に生徒たちの知的好奇心を刺激する展開を作るか、各回の講師との事前打ち合わせを充実させる。



3 (8) グローバルリーダー講座

全校生徒を対象に実施することにより、探究学習のエッセンスを広く普及する取り組みである。世界の第一線で課題解決に取り組む講師による講座である。「本物」,「一流」に触れることによって、生涯に渡って課題発見・探究を進める素地を作るきっかけの場とする。

回	日 時	講 師 ・ テ ー マ
1	6月20日(水)	小出宣昭氏(中日新聞社顧問・主筆)「モノサシ一本主義を抜け出せ」
2	11月21日(水)	吉野彰氏(名城大学理工学研究科教授)「リチウムイオン電池が拓く未来の社会」

3 (9) SGH 運営指導委員会の開催

① 第9回 SGH 運営指導委員会の開催

日 時：平成30年11月11日(日) 12時30分～13時30分

場 所：名城大学ナゴヤドーム前キャンパス 南館 3F DS301 講義室

出席者：影戸誠委員長，福島敏司委員，武村學委員 陪席：後藤健太郎(株式会社AK総研 代表取締役)
岩崎，岡，羽石(以上，名城大学附属高等学校)

佐藤(以上，名城大学大学教育開発センター(管理機関))

配布資料：第8回 SGH 運営指導委員会議事要旨(案)(平成30年2月23日開催分)

【資料1】愛知県庁×名城高校♪多文化共生セッション報告資料

【資料2】グローバルフィールドワーク報告資料(インドネシア・台湾)

【資料3】Meijo Global Festa 2018 資料

【資料4】SGH 事業検証に関する中間まとめ(文部科学省) 資料

【審議事項】 ・SGH 運営指導委員会委員長の選任について

【報告事項】 ・愛知県庁×名城高校♪多文化共生セッションの事業報告
・グローバルフィールドワークの報告
・Meijo Global Festa 2018 の報告
・次期 SGH 事業についての説明

② 第10回 SGH 運営指導委員会の開催

日 時：平成31年2月22日(金) 12時00分～13時00分

場 所：名城大学附属高等学校1号館 会議室

出席者：福島敏司委員，武村學委員

陪 席：黒沢浩(南山大学教授)，後藤健太郎(株式会社AK総研 代表取締役)

岡，羽石(以上，名城大学附属高等学校)

平塚(以上，名城大学大学教育開発センター(管理機関))

配布資料：第9回 SGH 運営指導委員会議事要旨(案)(平成30年11月11日開催分)

【資料1】グローバルアクション(カナダ研修) 報告

【資料2, 3】第4回高校生国際シンポジウム報告・表彰者一覧

【報告事項】 ・グローバルアクション(カナダ研修) 報告
・第4回高校生国際シンポジウム報告
・以後の事業

3 (10) 成果の公表・普及

研究発表会の開催(一般公開)

① 国際クラス第3学年課題研究発表会(日本語)：平成30年7月2日(月)

内 容：日本語での研究発表

発 表：国際クラス第3学年29件(29名)

- ② SGH 探究活動に関する研究会：平成 30 年 7 月 7 日（土） 参加 9 校／36 名
 内 容：Meijo Global Festa と探究活動についての講演・報告・研究協議
 講 演：「Meijo Global Festa に見る探究型学習の成果と課題」名城大学都市情報学部准教授 杉浦伸氏
 報 告：「Meijo Global Festa が目指すこと」教育開発部 中條健太
 事例報告：「国際クラスにおける探究型学習の実践」教育開発副部長 羽石優子
- ③ 国際クラス第 1 学年「愛知県庁×名城高校 ♪多文化共生セッション」発表：平成 30 年 11 月 13 日（火）
 内 容：愛知県多文化共生推進室と連携して、多文化共生の取り組みを提案
 発 表：国際クラス第 1 学年 10 件（34 名）
- ④ 国際クラス第 3 学年課題研究発表会（英語）：平成 30 年 11 月 1 日（木）
 内 容：英語での研究発表
 発 表：国際クラス第 3 学年 30 件（30 名）
- ⑤ Meijo Global Festa 2018：平成 30 年 11 月 11 日（日） 参加 16 校／223 名
 内 容：東海地区を中心とした課題研究に取り組む学校（生徒）による議論・発表
 （詳細は前述「3（5）Meijo Global Festa」pp.47-49 を参照）
- ⑥ 教育研究会 2018：平成 30 年 11 月 22 日（木） 参加 40 団体／97 名
 内 容：各教科におけるアクティブ・ラーニング型授業の公開授業と研究協議
 公開授業：各教科（英語・数学・国語・理科・社会）2 単位ずつ
- ⑦ 生徒研究発表会：平成 31 年 2 月 22 日（金）
 内 容：全校より選抜で研究発表
 口頭発表：SGH インドネシア研修調査報告 1 件（第 2 学年 1 名）
 国際クラス第 3 学年課題研究 2 件（2 名）／一般進学クラス文系第 3 学年 1 件（1 名）
 ポスター発表：国際クラス第 3 学年 6 件（6 名）／国際クラス第 2 学年 5 件（5 名）
 グローバルサロン参加者有志 1 件（2 名）／SGH カナダ研修調査報告 1 件（6 名）

外部研究発表会への参加

- ① 移民政策学会 2018 年度年次大会：平成 30 年 5 月 27 日（日）
 内 容：講演・シンポジウム・自由報告・国際セッション・社会連携セッション
 発 表：社会連携セッション報告 国際クラス第 3 学年 3 件（3 名）
 ・『「新あいち多文化共生推進プラン」への提案』
 ・「愛知県におけるより良い多文化社会に向けた効果的な取り組みの提案」
 ・「外国人集住団地における持続可能なコミュニティの実現への一方策」
- ② Global Link Singapore 2018：平成 30 年 7 月 20 日（金）～22 日（日）
 内 容：アジア太平洋における中高生のアイデアコンテスト（社会課題分野）
 発 表：国際クラス第 3 学年 1 件（1 名）“Better Community Activities for a Better Multicultural Society”
- ③ グローバル人材育成教育学会 第 6 回全国大会：平成 30 年 10 月 20 日（土）・21 日（日）
 内 容：講演・シンポジウム・事例紹介・ポスター発表
 ・シンポジウム「産学・高大接続連携からみるグローバル人材育成」：校長 岩崎政次
 ・シンポジウム「高大連携の理想モデルを探る」：教育開発部 伊藤高司
 ・事例紹介「高等学校におけるグローバル人材育成の取り組み」：教育開発副部長 羽石優子・国際クラス第 3 学年 3 名
 ・ポスター発表：国際クラス第 3 学年 1 件（1 名）
- ④ SGH 全国高校生フォーラム：平成 30 年 12 月 15 日（土）
 内 容：SGH 指定校生徒による課題研究のポスター発表
 ポスター発表：国際クラス第 3 学年 1 件（1 名）“‘Education of Sexual Diversity’ into Compulsory Education”

- ⑤ 第4回高校生国際シンポジウム：平成31年2月8日（金）・9日（土）
 内 容：課題研究に取り組む国内外の高校生による研究発表コンテスト
 口頭発表：国際クラス第2学年1件（1名）：スライド発表部門優良賞
 「観光戦略における名古屋城木造復元の有効性～バリの観光開発の事例から～」
 ポスター発表：国際クラス第2学年5件（5名）
 「避難所 HUG の学校教育への導入」：ポスター発表部門最優秀賞 他
- ⑥ 課題研究セミナー：平成31年2月16日（土）
 内 容：課題研究に関する講演会（主催：新興出版社啓林館）
 講 演：教育開発部 山口照由「課題研究 - 全校への普及 - 」
- ⑦ 東海地区高校数学セミナー：平成31年3月3日（日）
 内 容：新テストに向けて今後求められる数学指導に関する講演会（主催：新興出版社啓林館）
 講 演：教務部 宮田隆徳「反転授業とアクティブ・ラーニング」
- ⑧ NEXT Education セミナー 2019：平成31年3月16日（土）
 内 容：『探究』はこれからの教育をどう変えるかに関する講演会（主催：株式会社 JTB）
 講 演：教育開発副部長 羽石優子「探究活動をどう評価してきたか～育てたい生徒像の実現に向けて～」
- ⑨ SGH 甲子園：平成31年3月23日（土）
 内 容：全国 SGH 課題研究発表
 ポスター発表：国際クラス第2学年1名 ディスカッション：国際クラス第2学年2名

他校との交流・連絡・普及

主に以下の通り交流等を行った。表の右列には参加生徒の人数を記載した。

月 日	内 容	生徒数
5月27日（日）	移民政策学会（東京大学駒場キャンパス）	3
6月29日（金）	SGH 管理機関等連絡会（筑波大学東京キャンパス）	
7月7日（土）	SGH 探究活動に関する研究会（9校）	
	常葉大学附属橘高等学校の訪問受け入れ	
7月20日（金）～22日（日）	Global Link Singapore 2018	1
7月26日（木）	渋谷教育学園幕張高等学校「SGH 研究報告会」	
8月6日（月）～9日（木）	愛知県立旭丘高等学校「高山グローバルサマーフェスタ」	17
9月17日（月）	市立札幌開成中等学校「公開授業・発表会」	
9月22日（土）	筑波大学附属高等学校「SGH 報告会参加」	
9月29日（土）	法政大学国際高等学校「3年生成果報告会参加」	
11月10日（土）	関西創価高等学校「SGH 中間研究発表会」	
11月11日（日）	Meijo Global Festa（16校）	93
11月13日（火）	札幌日本大学高等学校「SGH 事業・生徒研究発表会」	
11月16日（金）	新潟県立国際情報高等学校「SGH 成果発表会」	
11月17日（土）	子どもの日ユースフェスティバル（聖心女子大学）	4
11月22日（木）	教育研究会 2018（40団体）	
12月13日（木）	京都堀川高等学校「SGH 研究発表会」	
12月15日（土）	中部大学春日丘高等学校「グローバルミーティング」	
12月15日（土）	SGH 全国高校生フォーラム（東京国際フォーラム）	9
2月8日（金）～9日（土）	第4回高校生国際シンポジウム（サンエールかごしま）	6
2月21日（木）	熊本県立水俣高等学校「SGH 成果発表会」	
2月23日（土）	広島女学院高等学校	
3月23日（土）	関西学院大学「SGH 甲子園」	11

なお、表中にあるMeijo Global Festaは、他校のプログラムにも組み込まれ活用されている（前述「3（5）Meijo Global Festa」pp.48-49参照）。

4 目標の進捗状況・成果・評価

本校の「研究開発目標」と「実践目標」に沿って記載する。

4 (1) 【研究開発目標①】

高大の連携・協働を進め、グローバルリーダー養成のための各種プログラムを本校独自の取り組みである「グローバルパスポート」制度において 25 件以上実施する。

進捗状況・成果・評価：

本目標における「各種プログラム」とは、グローバルパスポート制度における「本校事業」とする（前述「3 (6) グローバルパスポート」pp.50-51 を参照）。

本年度の本校事業としては 32 件のプログラムを実施し、目標に到達した。昨年度の 30 件から増加したのは、グローバルサロンの実施件数を 7 件から 9 件としたためである（表 1）。

表 1 グローバルパスポート本校事業内容

区 分	内 容	件 数
本校事業	グローバルサロン	9
	高大連携講座等	5
	Meijo Global Festa 等成果発表会	5
	海外研修 (NZ・台湾・オーストラリア・インドネシア・カナダ)	5
	名城大学主催事業	3
	海外交流 (台湾)	1
	公表・普及活動	4
合 計		32

各学年の参加者数は、国際クラス第 1 学年 (34 名) が延べ 522 名 (平均約 15.4 回)、第 2 学年 (23 名) が延べ 297 名 (平均約 12.9 回)、第 3 学年 (30 名) が延べ 256 名 (平均 8.5 回) であり、昨年度に比べ大幅に増加した。その他のクラスからも、延べ 296 名の生徒が参加した。

昨年度の課題であった学年・クラスのニーズを考慮したプログラムの開発について、グローバルサロンの回数を増やし、多様な講師を招聘した。生徒への案内については、参加希望者に向けた説明会を開催し、興味のある生徒への働きかけを行った。その結果として、参加生徒が増加し、全学的な取り組みにすることができた。

今後に向けた改善点：

本校で次年度以降も探究活動を継続していく上で、SGH 指定期間終了後も継続していくべきプログラムの精選と発展を行うことが必要であると考え。さらに、プログラムを計画・運営・推進していく枠組みづくりが求められている。これまで蓄積してきた資産を活かし、発展させていくための体制をいかに整えるかが課題である。その上で、継続課題としてクラス・学年のニーズを考慮したプログラムの開発に取り組んでいきたい。

4 (2) 【研究開発目標②】

PBLにおけるコンフリクト・レゾリューション、ジグソー学習、フリップトクラスルームの各教科における展開例の開発と定着を進める。

進捗状況・成果・評価：

本年度は、SGH 実行委員会主管の「SGH 探究活動に関する研究会」とアクティブ・ラーニング研究会主管の「教育研究会 2018」を、大学教員の講演・助言を交えて開催した。「SGH 探究活動に関する研究会」は 9 校 36 名、「教育研究会 2018」は 40 団体 97 名の参加となった。

「教育研究会 2018」は、SSH や SGH での探究活動での経験をいかしながら、学校全体として、通常の授業でも「主体的・対話的で深い学び」につなげられるようなアクティブ・ラーニング型授業の普及・実践研究を行うことを趣旨として開催され、「SGH 探究活動に関する研究会」と合わせて、探究的な学習の在り方を各教科にどうつなげるかについての研究を進めた。

【SGH 探究活動に関する研究会】

日 時： 平成 30 年 7 月 7 日（土）

内 容： 報 告：「Meijo Global Festa が目指すこと」教育開発部 中條健太

講 演：「Meijo Global Festa に見る探究型学習の成果と課題」

名城大学都市情報学部准教授 杉浦伸氏

事例報告：「国際クラスにおける探究型学習の実践」教育開発副部長 羽石優子
研究協議・情報交換

【教育研究会 2018 概要】

日 時： 平成 30 年 11 月 22 日（木）

内 容： 公開授業①（英語・数学・国語・理科・社会）

公開授業②（英語・数学・国語・理科・社会） *公開授業①②は別内容

研究協議会（英語・数学・国語・理科・社会）

全体会 アクティブ・ラーニング研究会活動報告

また、3 月 3 日（日）には、東海地区高校数学セミナー（新興出版啓林館主催）において、本校の数学科教員が「反転授業とアクティブ・ラーニング」について講演を行った。

これらの活動には他校からも多数の参加者が参加し、各教科におけるアクティブ・ラーニングへの関心の高さとともに、本校の取り組みが他校のモデルとして一定程度機能していることがうかがえる。

このような背景を踏まえて、より多くの教員が各教科でジグソー学習やフリップトクラスルームを行うようになっている。

今後に向けた改善点：

一昨年度の課題として、①取り組む教員の偏り、②取り組みの共有、の 2 点があげられた（第 3 年次の研究報告書 p.50 を参照）。①②ともにかなり改善されたが、さらに実践の共有・検討が必要である。特に、母集団の大きなクラスでの展開は引き続き困難であり、組織的な授業開発の段階には至っていない。

昨年度の課題と同様となるが、各教科の専任率を上げるとともに、教員用のガイドラインの作成・精査を継続することが必要であろう。

4 (3) 【実践目標①】

探究型学習を通して、自らネットワークを構築し、協働して問題解決に向かう、スキルとマインドセットを育成する。

進捗状況・成果・評価：

本年度の探究型授業は、国際クラスでは第1学年で「多文化共生」(2単位)、第2学年では「国際教養」(4単位)や「課題探究」(2単位)、第3学年では「国際教養」(2単位)と「課題探究」(4単位)を行った。そこに連動して、海外研修やフィールドワークが実施される。さらに、国際クラスでは国語、数学、公民、英語等においても探究型の授業を積極的に実施している。一方、一般進学クラスは、第1学年で「探究基礎」(1単位)、第2学年で文系の生徒のみ「グローバル概論」(2単位)、第3学年で「課題探究(選択)」(2単位)を実施した。

これらの探究型学習の効果を検証するために、SGT及び各因子の向上実感調査等を行った。

SGTの結果、国際クラスにおいては、入学時から高く、各因子は、国際クラスは3.4～4.5、一般進学クラスは3.4～3.7であった。各因子の平均を算出して経年変化を概観すると、国際クラスは向上しているが、一般進学クラスは低下していることがわかる(表1)。ここから国際クラスでの探究型学習は、ある程度成果を挙げているが、準対象

表1 SGTの各因子の平均値

クラス	1年春	1年冬	2年冬	3年冬
国際クラス第1学年	3.8	4.1		
国際クラス第2学年	3.8	4.0	4.0	
国際クラス第3学年	3.8	3.8	4.0	4.1
一般クラス第1学年	3.6	3.7		
一般クラス文系第2学年	3.8	3.7	3.5	
一般クラス文系第3学年	3.5	3.6	3.6	3.4

である一般進学への普及は発展途上であり、今後さらなる指導内容の検討・充実が求められる。

以下にSGT結果を記載する(図1～図6にある凡例において、春は4月、冬は1月を指す)。

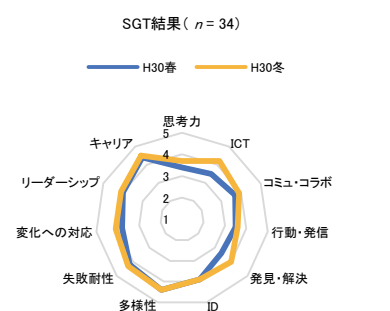


図1 国際クラス第1学年 各因子の変化

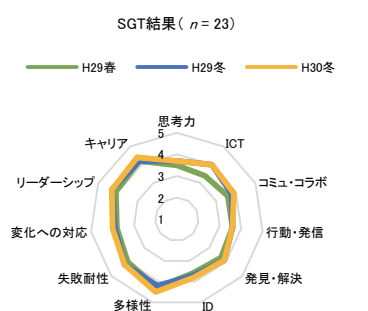


図2 国際クラス第2学年各因子の変化

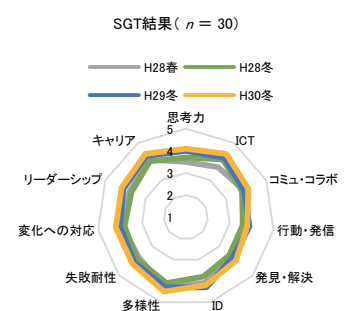


図3 国際クラス第3学年各因子の変化

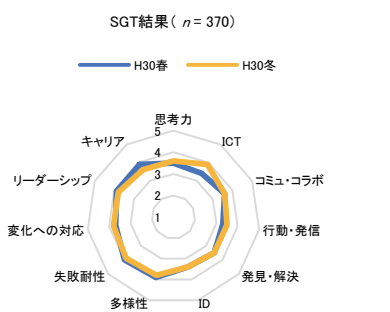


図4 一般進学クラス第1学年各因子の変化

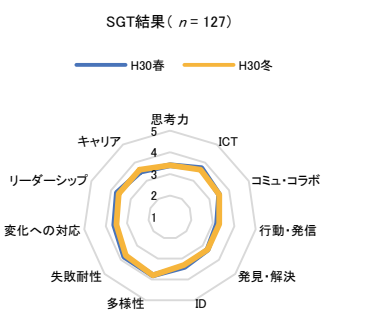


図5 一般進学クラス文系第2学年各因子の変化

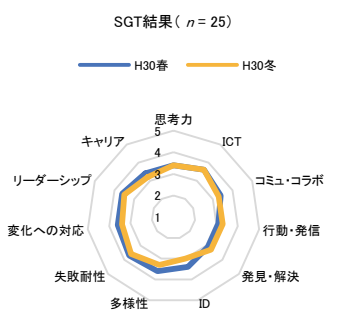


図6 一般進学クラス文系第3学年
課題探究選択者 各因子の変化

以下に各対象生の結果をまとめる。

【主対象生：国際クラス第1学年】

- ① 1月時点で、11因子中7因子が4.0を超え、全因子の平均は4.1ポイントである。4月の結果から0.3ポイント向上しているが、4月時点から高いポイントであったといえる。

- ② 4月の結果と比較して t 検定を行うと、「ICT (+0.7)」「発見・解決 (+0.6)」で有意差が認められた ($p < .05$)。これは情報教科と連携したグローバル教科「グローバルプロジェクトスタディ」と、総合的な学習の時間「多文化共生」の成果だと考えられる。

【主対象生：国際クラス第2学年】

- ① 本年度1月の各因子の平均は4.0ポイントであった。昨年度の1月からほとんど結果に変化はなく、有意差のある因子はなかった。わずかに「多様性 (+0.3)」に差異が見られたが、今後の変化を注視する。
- ② 入学時から平均して0.2ポイント向上しており、「行動・発信」以外の全ての因子で向上している。有意差が認められたのは「ICT (+0.6)」の因子であり ($p < .05$)、新たに始まった「課題探究」の授業や校外での発表活動が増えていることが背景にあると考える。

【主対象生：国際クラス第3学年】

- ① 本年度1月の各因子の平均は4.2ポイントであった。また、昨年度1月から「行動・発信」「ID」以外の9因子のポイントが向上している。 t 検定では、「思考力 (+0.1)」、「ICT活用能力 (+0.2)」、「発見・解決 (+0.2)」、「失敗耐性 (+0.1)」において有意差が認められた ($p < .05$)。
- ② 入学時から平均して0.3ポイント向上しており、「思考力 (+0.6)」「ICT活用能力 (+0.7)」「発見・解決 (+0.4)」「失敗耐性 (+0.4)」に有意差が見られた ($p < .05$)。これは、課題探究やそれに付随する国内外での活動等、探究活動の取り組みの成果といえる。

【準対象生：一般進学クラス第1学年】

- ① 1月の各因子の平均は3.7ポイントである。4月から各因子が平均0.1ポイント向上している。向上が見られる因子で有意差が認められたのは、「思考力 (+0.1)」「ICT (+0.5)」、「行動・発信 (+0.2)」であった ($p < .05$)。該当の「探究基礎」は、4クラスもしくは5クラス合同で実施する2単位科目であるため、効果を出すのは難しい面があるが、実施3年目を迎え、内容や指導の体制が整いつつあり、その成果が結果に表れたと言える。

【準対象生：一般進学クラス第2学年】

- ① 本年度の4月と1月の各因子の平均はともに3.5ポイントで、各因子の平均では変化が見られなかった。因子別にみると、 t 検定による有意差は認められないものの、「行動・発信」「キャリア設計への意欲」の各因子の平均値が上昇した。一般進学クラスへの普及は進みつつあるが発展途上であり、今後の課題であると言える。

【準対象生：一般進学クラス第3学年】

- ① 本年度の4月と1月の各因子の平均はともに3.4ポイントであった。 t 検定による有意差は認められないものの、「行動・発信」「発見・解決」の各因子の平均値が上昇した。「課題探究」における調査・研究や発表がその理由として考えられるが、より明確に目標が達成できたと言える結果を出すためには、指導内容の検討・充実が必要である。

また、探究型学習の成果を検証するため、5S5M等の各因子における向上実感を「強く感じる」「感じる」と答えた国際クラス第2・第3学年の生徒に複数回答でその要因を聞いた。第2学年では全ての因子において、「探究型授業」が最も向上実感に影響を与えた訳ではなかったが、どの因子においても影響が大きい様子が見て取れる(図7)。第3学年においては全ての因子で「探究型学習」が最も向上実感に影響したと答える生徒が多かった(図8)。

さらに「探究型授業」、「海外研修」、「フィールドワーク」を探究活動の軸として見ると、それらがおおよそどの因子においても半数以上を占めている。このことから、全てのスキルとマインドセットの向上実感に「探究活動」が大きく影響していることがわかる。

加えて、向上実感の要因として「他校生との活動」を挙げた生徒が多くいることにも注目したい。これは、Meijo Global Festa での他校生との協働や校外活動での協働を指すものと考えられる。以前はこの要素を挙げる回答は少なかったが、他校生徒と協働する機会を作ることによって向上実感が得られることが明らかとなった。

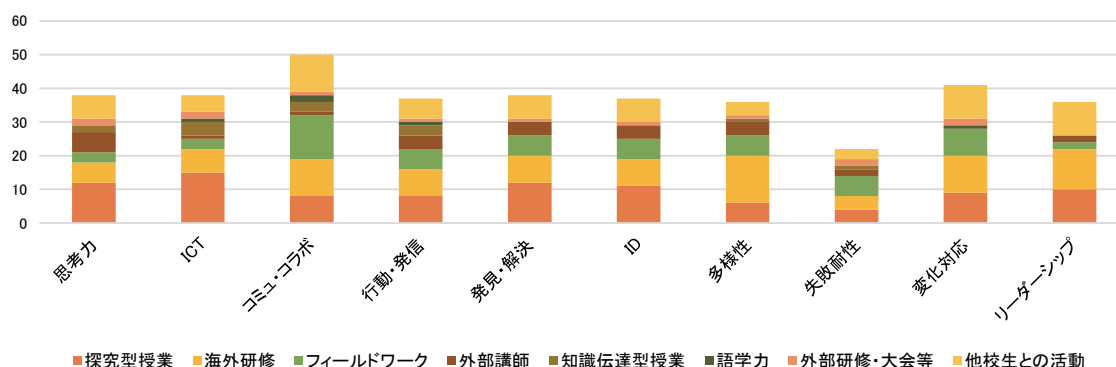


図 7 国際クラス第 2 学年向上実感の要因

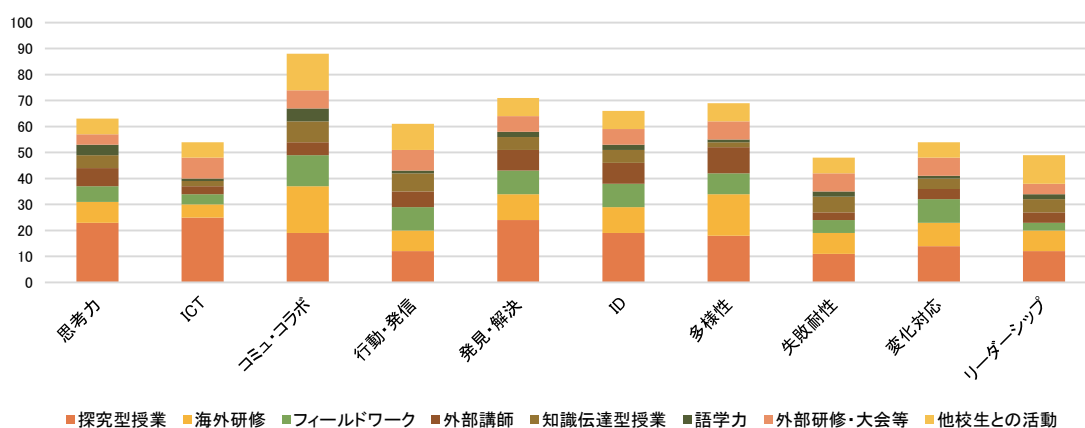


図 8 国際クラス第 3 学年向上実感の要因

今後に向けた改善点：

昨年度までの課題に引き続き、スキルとマインドセットの各因子が意味する具体的な内容の共通理解を進め、目指す資質と学習内容の具体化・構造化を進める。特に、一般進学クラスにおけるスキルとマインドセット向上は大きな課題である。

4 (4) 【実践目標②】

国内と海外でのフィールドワークを課題研究論文完成までに 4 回以上実施し、それらの実践的活動を通して、ローカルとグローバルを往還する視座を獲得させる。

進捗状況・成果・評価：

本年度、課題研究論文作成を行ったのは、国際クラス第 2 学年（23 名）、国際クラス第 3 学年（30 名）、一般進学クラス文系第 3 学年の選択者（25 名）であり、総合的な学習の時間の「課題探究」にて実施した。ゼミ形式で授業を進行し、生徒は各自の研究課題に基づいた調査を行うため、適宜課外活動の時間等を利用して企業や団体等に赴いた（前述「3 (4) ローカルフィールドワーク」pp.45-46 を参照）。

課題研究論文完成までに 4 回以上のフィールドワークをするという目標においては、国際クラス第 2・第 3 学年は 100% の達成率であり、第 2 学年は入学以降平均して 14.7 回、第 3 学年は 14.5 回行った。一方、一般進学クラス第 3 学年では達成できていない。今年度の一般進学クラスの「課題探究」は、昨年度のように国際クラスの生徒と合同ではなく、一般進学クラス単独での実施となったため、国際クラスとの連携が取れていなかったこともその要因であるかもしれない。

本年度末に行った調査では、向上実感が得られた 5S5M 等の各因子において、フィールドワークが影響を与えた割合を抽出した（図 1）。本年度は、第 3 学年はフィールドワークを行っていないため目立った値は出ていないものの、本年度、国内外で複数の調査を行った第 2 学年では、特に「探究意欲」や「失敗耐性」、「発見・解決」、「コミュ・コラボ」の値が高く、海外の人や社会人を相手に失敗を繰り返しながら調査を行った様子が見られる。また、「ローカルとグローバルを往還する視座」を意識して学習を進めた結果、インドネシアでのフィールドワークをもとに、バリの観光開発の事例と名古屋における観光戦略を比較検討した生徒は、「第 4 回高校生国際シンポジウム」における口頭発表で優良賞を受賞した。こうした面からも、一連のフィールドワーク活動が「ローカルとグローバルを往還し、問題発見する力・課題を解決する力」を高める要素となっていることがわかる。

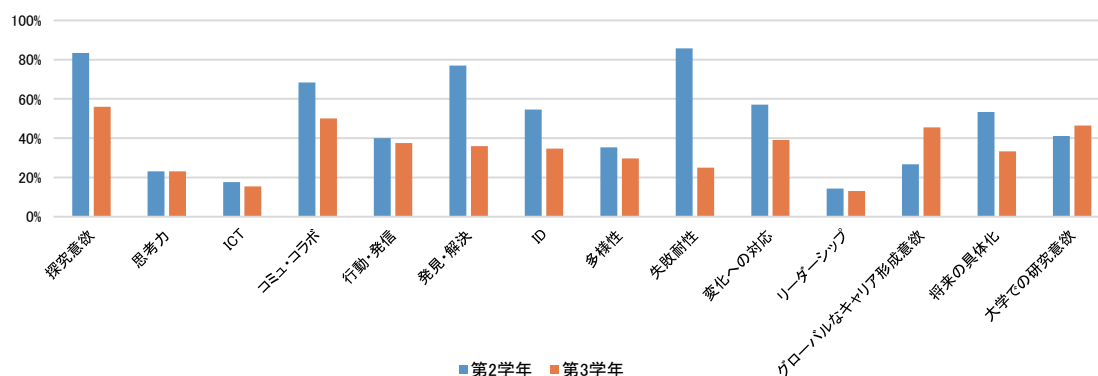


図 1 フィールドワークが各因子の向上実感に影響を与えた割合（国際クラス）

今後に向けた改善点：

本年度の大きな課題として、一般進学クラスにおけるフィールドワークの在り方の再検討が必要であり、担当者間の連携とノウハウを含めた情報の共有、その体制づくりが急務である。さらに、生徒の興味関心を喚起し、外へ出て調査を行う意欲を高められるような指導が求められる。

4 (5) 【実践目標③】

国内外の研修、大会及び社会活動に年間 3 回以上参加させる。

進捗状況・成果・評価：

国内外の研修、大会及び社会活動に年間 3 回以上参加した生徒の割合は、国際クラス全体で 92%（昨年度 87%）であり、国際クラス第 1 学年及び第 2 学年については昨年度と同様 100% 達成できた（表 1）。第 3 学年の達成割合は 76.7%にとどまったが、昨年度の 56.8%に比べると大きく向上した。

表 1 実践目標③の結果

区 分	応募・参加数	1 人あたりの平均参加数	目標達成割合
国際クラス第 1 学年	530	15.6	100%
国際クラス第 2 学年	322	14.0	100%
国際クラス第 3 学年	149	5.0	76.7%

以下の表 2 に主な参加先と参加数、表彰について記載する。

表 2 国内外の研修・大会・社会活動と参加状況（表彰欄のカッコ内は所属クラス）

区分	内 容	参加数	表彰・選派出場
研修	グローバルサロン（全 9 回）	541	
	次世代リーダー講座（全 4 回）	80	
	カナダ研修	6	
	高山グローバルサマーフェスタ 主催：旭丘高等学校	16	
	手羽先サミット	2	
	世界明石塾 主催：関西学院大学	1	
	夢ナビライブ	9	
	外国人県民あいち会議 2018 主催：愛知県多文化共生推進室	2	
	GLOBAL LEADERSHIP	1	
大会	Meijo Global Festa 2018	93	優秀賞 富田（国際） 優秀賞 大谷・佐藤・三浦・宮嶋（国際） 優秀賞 鈴木・長尾・森本・モハメドリファー（国際）
	SGH 全国高校生フォーラム 主催：文科省・筑波大学	5	
	SGH 甲子園 主催：関西学院大学・大阪大学・大阪教育大学	11	ポスター発表 小坂井（国際） ディスカッション 岡村 本田（国際）
	高校生国際シンポジウム 主催：Glocal Academy	6	ポスター発表最優秀賞 榊原（国際） スライド発表優良賞 福岡（国際）
	Global Link Singapore 2018 主催：グローバルリンクシンガポール実行委員会	1	発表 山室（国際）
	グローバル人材育成教育学会	3	発表 岩田・佐々木・西村（国際）
	移民政策学会	3	発表 岩田・佐々木・堀（国際）
	SGH 校発表会「SDGs のために高校生ができること」	4	発表 山本・宮嶋（一般）岡村・坂（国際）
	IT とデザインエンジニアリングソリューションコンテスト主催：産業技術大学院大学	36	佳作 大橋（国際）
	国際協力中学校・高校生エッセイコンテスト 主催：JICA	58	佳作 モハメドリファー・ハミルトン（国際）
	IIBC エッセイコンテスト 主催：国際ビジネスコミュニケーション協会	57	学校奨励賞
	新聞切り抜き作品コンクール 主催：中日新聞社	510	優秀賞 杉山・水田（一般） 佳作 工藤・橋本（一般）
	国際ユース作文コンテスト 主催：五井平和財団	56	
	社会共創コンテスト 2019 主催：愛媛大学	23	
	社会活動	1	
	その他ボランティア	24	

成果としては、全学年において、これまでよりも参加数が伸びており、生徒間に研修や大会に参加する機運が定着したことである。上級生や意欲の高い数名が核となり、彼らが校外で積んだ経験を他の生徒が見聞きするうちに、次第に全体が影響を受けていく、というのが例年の形であったが、本年度の第 1 学年に関しては、早い時点から意欲的に動き、周囲を巻き込んでいく生徒が多く見られた。数値にもそれが表れた形となっている。

また、担任団をはじめ教員が積極的に関わり、外部との人脈を構築したことも大きな成果である。

今後の研修や大会への参加意欲を聞いたところ、以下の結果となった（図 1, 2）。外部研修への参加意欲が「非常に高い」または「高い」と答えた生徒の割合は、国際クラス第 1 学年は 83%（昨年度 70%）、第 2 学年が 76%（昨年度 62%）である。同様に外部大会への参加意欲は順に 80%（昨年度 57%）、84%（昨年度 59%）となった。一方、一般進学クラスの第 1, 2 学年の結果は、「高くない」との回答が過半数ではあるものの、10~20%の生徒は「非常に高い」または「高い」と答えており、昨年度よりも増えている。

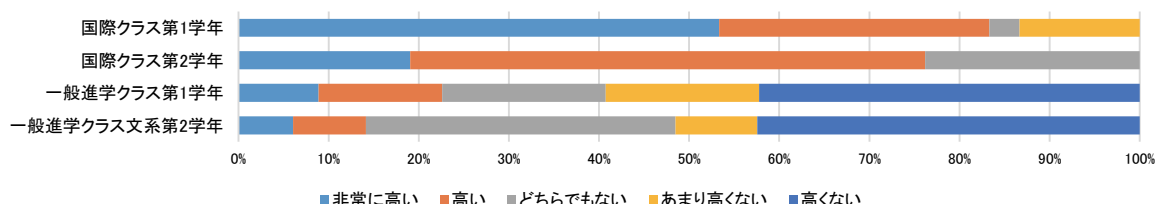


図 1 今後の外部研修へ参加意欲

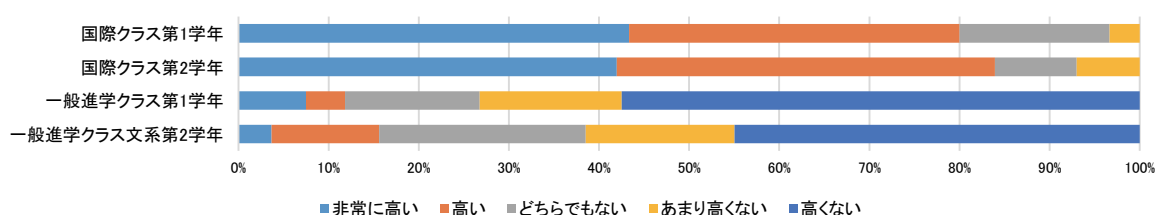


図 2 今後の外部大会へ参加意欲

今後に向けた改善点：

一般進学クラスの意欲の高い生徒をどのように育成するか、探究活動に巻き込んでいくかが課題である。国際クラスでは、外部の研修や大会へ参加することの意義や効果を意識化させて課題探究を進めることで、その価値が共有されている。他クラスにおいても、外部大会への参加を年間の授業目標の 1 つとして設定することが共有され、次年度は Meijo Global Festa を 1 つのマイルストーンとして、探究活動を実施する予定である。

4 (6) 【実践目標④】

プレゼンテーションを、国際クラスの生徒は年間 12 回以上実施する。

進捗状況・成果・評価：

全員が目標を達成した（表 1）。また、表 1 に記載されている全員が行うプレゼンテーションの他に、代表者のみが発表するものも多く実施することができた。

表 1 プレゼンテーション回数

学年	本年度	昨年度	一昨年度	実施授業（回数）
1	17～20	14	12	総合的な学習の時間における「多文化共生」(6) グローバル教科「グローバルプロジェクトスタディ」(2)・ 「English Presentation」(6), 英語科「コミュニケーション英語」(3) 他
2	16～24	14	15	総合的な学習の時間における「課題探究」(3) グローバル教科「国際教養」(5)・「English Presentation」(6) 英語科「コミュニケーション英語Ⅱ」(2) 他
3	18～23	17	13	総合的な学習の時間における「課題探究（日本語・英語）」(6), グローバル教科「English Presentation」(4), 「国際教養」(2) 英語科「コミュニケーション英語Ⅲ」(3), 公民科「倫理」(3) 他

本年度はどの学年においても、例年よりも多くの発表機会を作ることができ、校外でも多数のプレゼンテーションを実施することができた。

例年通り、第 1 学年の「English Presentation」でプレゼンテーションの基本技能を段階的に指導し、その後の様々な授業での発表時には、その理論を応用して実践する形をとった。クラス内での発表はもちろん、校外の研究発表会や大会へも積極的に参加する様子が見受けられるが、その背景には、上級生からの影響が少なくない。入学時に上級生によるガイダンス等を受けたり、上級生の研究発表を視聴したりすることを通して、早い段階から探究学習やプレゼンテーションに対するモチベーションを高めている。

一方、第 3 学年の生徒についても、下級生の前で発表の機会を作ることにより影響が生まれている。第 3 学年の生徒を対象に 3 年間でついた力について書かせたところ、多くの生徒が「人前で自信をもって発表することができるようになった」、「人に教えたり、人の役に立ったりすることが楽しくなった」と答えていることから、自己肯定感の向上にも寄与していると考えられる。

また、他クラスにおいても年間に数回はプレゼンテーションを経験させることが定着してきており、全校を対象にした生徒研究発表会等で成果が共有されている。

今後に向けた改善点：

特に改善の必要はないが、上級生と下級生の学び合い、教え合いの機会を継続することが重要であると考えます。そのために、各授業でそれぞれ行われるプレゼンテーションをある程度管理し、他学年の視聴ができるよう、担当者間の連携を進める調整役が必要である。

4 (7) 【実践目標⑤】

卒業時における CEFR の B2 レベル到達率を、国際クラスの生徒は 100%とする。

進捗状況・成果・評価

英検での準 1 級、TOEIC Listening & Reading (以下、TOEIC L&R) 785 点以上で CEFR の B2 レベルと読み替える (第 3 年次の研究報告書 p.61 を参照)。

結果として、第 3 学年 ($n=30$) では英検準 1 級に 20%の生徒が合格しており (図 1), 8%が TOEIC L&R 785 点を取得している (図 2)。昨年度と比較すると、英検準 1 級取得者の割合は 23%低下しており、TOEIC L&R の 785 点取得者も一昨年度と比較すると 11%低下しているため、今後の課題である。

一方、本年度は授業内外で「英語での発表」と「質疑応答」に力を入れて取り組んでいた。その成果もあり、本年度は校外の大会においても英語で発表をする生徒が多かった。

例えば、第 3 学年の生徒 1 名が、「高校生国際シンポジウム」にて最優秀賞を受けたことで、シンガポールで行われた Global Link Singapore 2018 で英語発表を行う機会を得た。発表に備えて英文の作成能力が必要なだけでなく、発表後の質疑応答では即時的に英語でやり取りする能力も求められる。来年度も引き続き、高い資格取得率を目指すだけでなく、個人研究の内容等を英語で発表する機会を多く用意していきたい。

また、TOEIC L&R のクラス平均スコアの推移を見ると、第 1 学年前期の 326 点から第 3 学年後期の 620 点と 294 点伸びており、これまでの生徒と同様、英語力の伸長が見受けられる (図 3)。

今後に向けた改善点：

昨年度の課題であった「即時的に英語で時事問題や社会問題等について話す」を克服するために、本年度は第 3 学年の「国際教養」(2 単位) の授業で、統計データを用いながら英語でエッセイを書いたり議論したりする活動を取り入れた。生徒たちは、データ等を批判的に捉えながら、英語で意見を表出することに慣れてきた様子である。現状の課題

としては、少人数グループで議論を行う際に、中心的に発言する生徒に限られてしまい、メンバー全員で十分に活発な意見を交わすことができていないことが挙げられる。議論に必要な各トピックの背景知識が不十分であることも考えられるが、日本語話者のクラスメイトと英語で会話をするためのマインドセットが身につけていないことも要因である。今後は、英語での日常的な発話力を高めることに焦点を当てた活動を多く取り入れていく必要がある。そのために、Can Do リストを提示しつつ、B2 レベルの項目 (表 1) を基準として指導を進める。

表1 本校教員が作成した Can Do リスト B2 レベル

話すこと (やり取り)	話すこと (発表)	聞くこと	読むこと	書くこと
時事問題や社会問題等について、即時的に自分の考えを論理的に述べるができる。	時事問題や社会問題等について、客観的事実と自分の考えを用い、聞き手に伝わるように工夫しながら、15 分程度の発表をすることができる。また、質疑応答では即時的に質問者の質問に答えることができる。	時事問題等、幅広く社会に関係した内容についての情報や説明を聞いて、要点を正確に理解することができる。英語母語話者の演説を聞き取り、内容を理解することができる。	論理性のある説明文等を中心に専門的な分野の英文を初見で読んで、大筋の内容を正しく理解できる。自分の必要とする情報を英文の中から短い時間で的確に探しだすことができる。	時事問題等幅広く社会に関係した内容について自分の考えを論理的な段落構成を意識しながら、150 語程度で書くことができる。

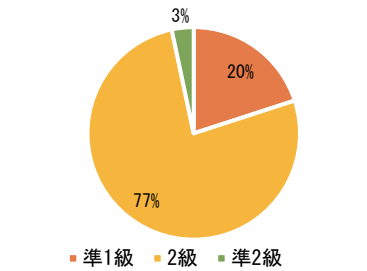


図1 国際クラス第3学年英検取得率

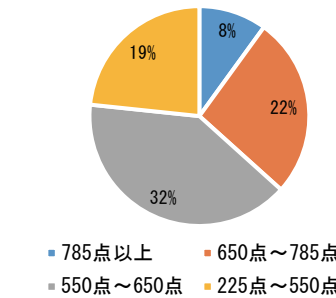


図2 国際クラス第3学年 TOEIC L&R スコア

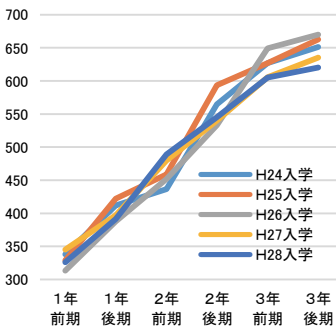


図3 入学年別 TOEIC L&R スコア推移

4 (8) 【実践目標⑥】

国際化を進める国内や海外の大学等，課題研究を生かした研究ができる大学へ進学する生徒を育成する。

進捗状況・成果・評価：

国際クラス第3学年においては，スーパーグローバル大学創成支援事業の採択校(以下，SGU)である，上智大学，立教大学，立命館大学，関西学院大学等への進学が決定している。その他，国際化を推進する大学や課題研究をさらに発展させることのできる大学(関西大学外国語学部，愛知県立大学外国語学部，愛媛大学社会共創学部等)へ進学を決定してきている(本稿執筆時点)。

「探究を深めることのできるグローバルな大学への進学意欲」と「グローバルなキャリア形成への意欲」について調査したところ，「探究を深めることのできるグローバルな大学」への進学意欲が高い(「非常に高い」と「高い」)生徒は，第1学年で77%，第2学年で83%，第3学年では93%であり，どの学年も高い値を示した(図1)。

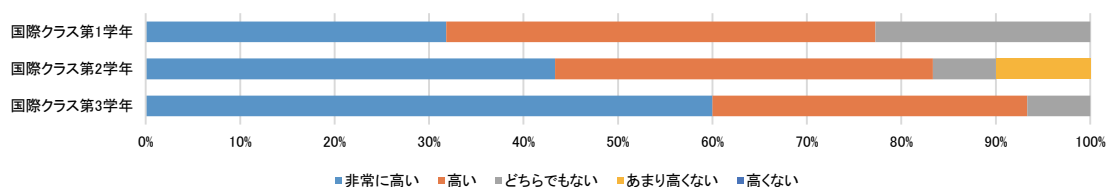


図1 探究を深めることのできるグローバルな大学への進学意欲(国際クラス)

「グローバルなキャリア形成への意欲」は，意欲の高い生徒(「非常に高い」と「高い」)は，第1学年76%，第2学年65%，第3学年73%であった(図2)。

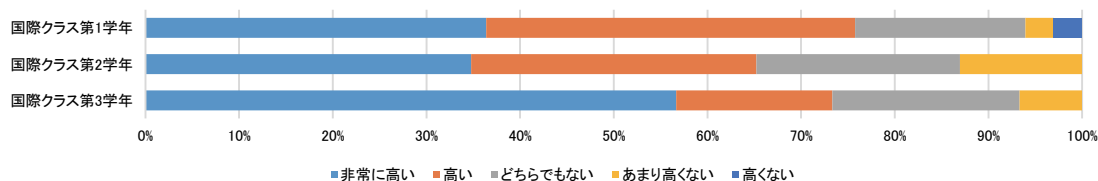


図2 グローバルなキャリア形成への意欲(国際クラス)

両質問の結果を比較すると，第3学年では「グローバルなキャリア形成への意欲」にくらべ，「探究を深めることのできるグローバルな大学への進学意欲」が高い。この傾向は，昨年度とは逆となっている(第4年次の研究報告書 p.54 を参照)。背景には課題研究論文の進捗を早めたことがあると推察される。そのため3年生は研究が完了した状態で大学入試に挑むことができた。結果，多くの生徒が研究成果や探究活動の経験を生かし，AO入試や推薦入試等で第一志望への合格を決めた。それが昨年以上に前向きな意見につながったと考えられる。

第1学年では進学意欲とキャリア意欲はほぼ同じ値を示しており，進学意欲とキャリア形成に対する意識はほぼ同じものとして結びついている様子が見られる。

第2学年においては「グローバルなキャリア形成の意欲」よりも「探究を深めることのできるグローバルな大学への進学意欲」の方が高く，グローバルなキャリア形成については漠然としている一方で，探究活動の意義は感じており，それを大学でさらに深める意欲は高まっている様子が推測される。

これらの意欲は何が喚起させているのかを調べるために，両質問において高群の回答を選出した生徒に，その回答を導くことになったと考える要素を聞いた結果，どちらの質問においても全学年に共通して高かったのは「探究型授業」，第2・3学年では「海外研修」であった(図

3, 4)。「海外研修」を選択する第1学年が少ないのは調査時点ではまだ海外研修を実施していないためである。

「探究を深めることのできるグローバルな大学への進学意欲」と「グローバルなキャリア形成への意欲」での回答を比較すると、大学進学に関しては「探究型授業」や「海外研修」の次に多いのが「語学力」、「フィールドワーク」であるのに対し、グローバルキャリアに関しては、「探究型授業」や「海外研修」の次には「フィールドワーク」や「外部講師」が多くなっている。

ここから見てくるのは、大学進学に影響を与える要素には「語学力」が欠かせないが、「探究を深めることのできるグローバルな大学への進学意欲」「グローバルなキャリア形成への意欲」の向上のためには、探究型学習での学びとともに世界や社会との接点を持たせることの重要性である。

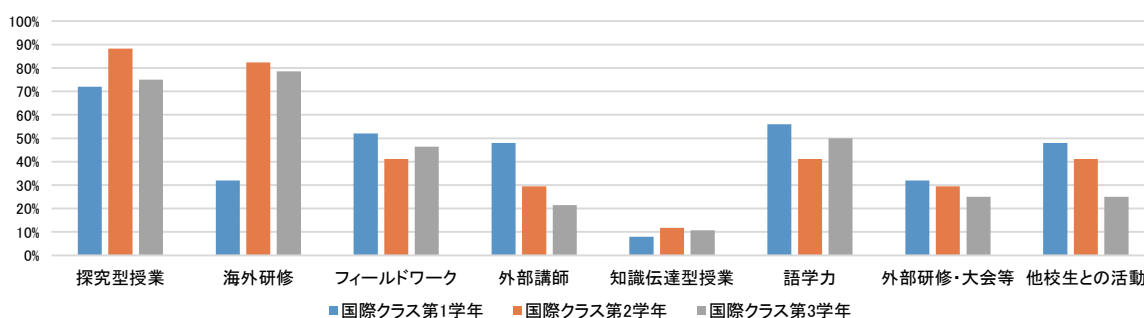


図3 探究を深めることのできるグローバルな大学に進学する意欲を高めた要素(国際クラス)

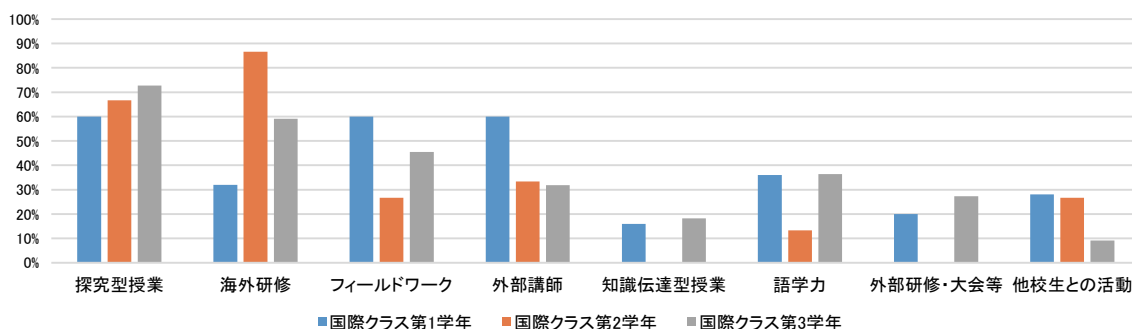


図4 グローバルなキャリア形成への意欲を高めた要素

今後に向けた改善点：

国際クラス第3学年の生徒の進路として、愛知県外の大学への進学が決定（もしくは希望）している人数は30人中19人おり、一般に地元志向が強いとされるこの地方の高校生としてはこの比率は圧倒的に高い。SGUをはじめとした国際化を進める大学は関東・関西に多く、探究活動をはじめとしたSGHに関わる活動が進路選択に影響を与えている。

しかし、それらの大学への進学は経済的に叶わないケースも少なくない。そのため中部地方の大学が、よりグローバル化に力を入れていくことを期待しつつ、本校のSGH事業を通して築いた周辺の大学との関係を引き続き継続し、Meijo Global Festa等を広く活用し、この地方の大学との協働を目指す。